

第十五國立銀行處分方法

第十五國立銀行ヨリ大藏省へ借上タル一千五百萬圓ノ金高ヲ返却シ、日本銀行ニ加入セシメ且特別ヲ以テ増發セシメタル紙幣ヲ支消シ準備ノ不足ヲ補充セシメ、漸ク以テ該銀行ノ組織ヲ解散セシムルノ順序左ノ如シ。

- 第一 大藏省ニ於テ借上タル一千五百萬圓ハ來明治十六年ヨリ十九年マデ四ケ年間ニ悉皆返却スルモノトス。
- 第二 來明治十六年ヨリ年々ノ返却高ハ第二期（現在ヲ第一期トス）即チ十六年ハ五百萬圓第三期即チ十七年ハ三百萬圓、第四期即チ八年モ三百萬圓、第五期即チ十九年ハ四百萬圓トシ毎年三月ニ於テ政府ノ紙幣ヲ以テ返却スル者トス。
- 第三 第二期即來十六年三月ニ於テ大藏省ヨリ五百萬圓ヲ返却セラレタルトキハ、第十五銀行ニ於テハ右返却高ノ内四百二十萬圓ヲ以テ日本銀行へ加入シ、其殘八十萬圓ヲ以テ同額ノ該銀行紙幣ヲ引換へ大藏省へ返納シテ之ヲ支消スベシ。

第四 第十五銀行ヨリ發行紙幣八十萬圓ヲ返納スルトキハ、大藏省ニ於テハ右八十萬圓ニ對スル抵當公債證書額面高百一十一萬圓ヲ下戻スベシ。

（實抵當價格ハ七十一圓ニ付キ額面高百十二萬圓六千圓餘トナル）

第五 大藏省ヨリ右抵當公債證書百一十一萬圓下戻シタルトキハ、第十五銀行ニ於テハ之ヲ賣却シ、其代價ハ十萬圓（七十二圓ノ相場）ヲ以テ準備金ニ加へベシ。

第六 第三項ニ掲グル四百二十萬圓ヲ於テ日本銀行ニ加入スルトキハ、日本銀行ニ於テハ右株金四百二十萬圓ヲ以テ同額ノ金札引換公債證書ヲ購入シ、他日其抽籤ニテ得ル所ノ正貨ヲ準備トナシ、以テ兌換銀行券ヲ發行スルノ資ニ供スベシ。

第七 第三期即十七年及第四期即十八年ニ於テハ大藏省ヨリ三百萬圓宛ヲ返却スルニ付、第三項ヨリ第六項マデノ比例ニ從ヒ、日本銀行ニ加入スル高ハ兩年各二百五十二萬圓發行紙幣ノ支消高及準備金ノ增加高ハ兩年各四十八萬圓宛ニシテ公債證書ノ下戻シ高兩年各六十六萬六千圓金札引換公債證書ノ購入高ハ各二百五十二萬圓トス。

第八 第五期即十九年ニ於テハ大藏省ヨリ四百萬圓ヲ返却スルニ付、第三項ヨリ第六項マデノ比例ニ從ヒ日本銀行へ加入スル高ハ三百三十六萬圓、發行紙幣ノ支消高及準備金ノ增加高ハ六十四萬圓宛ニシテ、抵當公債證書ノ下戻シ高ハ五十八萬八千圓金札引換公

債證書ノ購入高ハ三百三十六萬圓トス。

第九 前第八項マデノ方法ヲ履行シ了スルトキハ、大藏省ニ於テハ一千五百萬圓ノ負債悉皆償却セラレ、第十五銀行ニ於テハ資本金一千五百七十五萬圓ニシテ、發行紙幣ハ其八割即一千二百六十萬圓、準備金ハ其二割即三百十五萬圓抵當公債證書額面高一千七百五十萬圓トナリ、而シテ日本銀行ノ株券一千二百六十萬圓ノ所有者タリ。(此方法ハ總テ一千五百七十五萬圓ノミノ資本金ノ計算ト知ルベシ)

第十 前方法ノ外更ニ以下ノ一法ヲ設ケ假ニ第六期トナシ、以テ前項ニ掲グル一千二百六十萬圓ノ發行紙幣ヲ支消シ且ツ以テ日本銀行ニ加入スル高ヲ増加スルモノトス。

第十一 準備金三百十五萬圓ノ内二百四十萬圓ハ亦日本銀行ニ加入スルモノトシ、合シテ一千五百萬圓ノ株主トナス。

第十二 準備金三百十五萬圓ノ内七十五萬圓ト、抵當公債證書ノ内當籤ノ分一千八百八十五萬圓ヲ以テ一千二百六十萬圓ノ發行紙幣ヲ支消スル者トス(前項及本項ノ方法ハ豫メ規定ノ準備ヲ他ニ支用スルガ如シト雖ドモ、抵當公債證書當籤毎トニ先ヅ紙幣ヲ支消シ、然後不要ニ屬セザル準備ヲ以テ日本銀行ヘ加入スルト同様ナリトス)

第十三 前方法ヲ悉皆履行シ了スルニ及デハ、資本金一千五百七十五萬圓ニシテ、發行紙幣高

紙幣抵當高及準備金高ノ毫モ殘存スルナク全ク日本銀行ノ株券一千五百萬圓公債證書ノ殘高五百六十五萬圓及公債證書ノ差額(此方法ハ總テ公債證書ヲ七分利付トシテ計算スレドモ其實五分利差ヲ茲ニ掲グ)六百十七萬圓ヲ所有スル者ナリ。

第十四 第一期ヨリ第六期マデノ利益ヲ計算スルニ、第一期八年一割三分三厘五、第二期ハ一割三分四厘四、第三期ハ一割三分四厘九、第四期ハ一割三分五厘四、第五期ハ一割三分六厘一第六期ハ一割三分二厘六トナル。此利益生ズル所ノ計算ハ總表ニ讓ル。

第十五 前項資本金一千五百七十五萬圓ノ外、二百七萬六千百圓ニ對スル發行紙幣百六十六萬八百八十圓モ其抵當公債ノ當籤毎トニ悉皆之ヲ支消スルモノトシ、是ニ至テ第十五銀行ヲ解散シ、第十五銀行ノ所有セル日本銀行ノ株券ハ悉ク第十五銀行ノ株主ニ分割所有セシムルモノトス。

以上。

國立銀行條例改正ノ件

今般國立銀行條例改正、本月五日第十四號ヲ以テ御布告相成候ニ付テハ、既ニ御聞知ノ事ト奉存候。抑我邦財政ノ萎靡不振ノ狀ヲ呈スルハ固ヨリ幾多ノ原因アリテ此ニ馴致シタル義ニ可有之候得共、我流通紙幣ノ制其宜ヲ得ザルガ若キ、其最モ財政上ニ妨害ヲ與ヘタルハ得テ掩フ可カラザルノ事實ニ有之、今若シ之ガ救治ノ道ヲ求メント欲セバ必ラズ其妨害ヲ來ス所以ノ一大病根ヲ醫スルニ非ザレバ百事徒勞ニ屬シ、到底全治ノ奏功ハ無覺束義ト思考致候。依テ先ヅ全國ノ流通額ヲシテ漸次減殺シテ以テ其位價ヲ復セシメ、且ツ其各種ニ涉ルノ大弊ヲ一洗シ到底之ヲ一途ニ歸スルノ計畫ヲ立ツルハ蓋シ方今ノ一大急務ニ可有之ハ貴官ニモ素ヨリ御同感ノ義ト存候。然ルニ政府發行ノ紙幣ハ夫々處分ノ方法相立居候得共、獨リ國立銀行紙幣ニ至テハ一定ノ消却法無之ニ付、此ノ儘在再打過候得バ、營業年限滿期ニ至リ全國三千四百餘萬圓ノ銀行紙幣ヲ一時ニ消却スルカ否ラザレバ到底特別ノ詮議ヲ以テ紙幣發行ノ延期ヲ許サザルヲ得ザルノ極ニ至ルベシ。是レ下官ガ居常憂慮罷在候處ニシテ、到底今日ヨリ之ガ遞減消却ノ方法

ヲ講究セザル可カラズ。且ツヤ國立銀行紙幣ノ義ハ、一般取引ハ勿論國稅上納ニ於テモ無差支通用スルモノニシテ、所謂法貨同様ノ資格ヲ有スルモノニ有之、今若シ之ヲ遞減消却スルモノトスレバ、流通上ノ感覺恰モ同額ノ國幣ヲ減ズルト同一ニ歸シ、即チ全國ノ流通高ヲ減少シテ以テ漸次其位價ヲ復セシムルノ一端ニ可有之ト存候。依テ右消却ノ方法ヲ考按スルニ從來國立銀行ニ收藏スル所ノ紙幣引換準備金ヲ隨意使用スルコトヲ許ルシ、其額ニ相當スル銀行紙幣ヲ消却セシメ、而シテ其殘額ヲ營業年限ニ割合ヒ、每年限行利益ノ幾分ヲ以テ之ヲ漸次消却セシメンカ、又ハ其殘額ヲ依然据置キニシテ、營業年限ニ至リ一時ニ之ヲ消却セシメンカ、此兩法ニ就テ利害得失ヲ熟察候處、多少緩急遲速ノ差ハ可有之候得共到底經濟上ノ激變ヲ生ジ、全國銀行ヲシテ倒行鎖店相踵グノ慘狀ニ陥ラシムベキハ必定ニ有之、去リトテ因循苟且今ニ及デ之ヲ處分スル所アラザレバ、將來財政ノ恢復如何ト被存、百方計畫ヲ盡シ、終ニ今回條例改正ノ旨趣ニ決定致シ候。今其旨趣ヲ約言スレバ目下運用ス可ラザルノ準備金ト年々少額ノ預入金ヲ以テ其紙幣ヲ營業年限内ニ遞減消却スルモノニシテ、其方法タル明亮精確公利私益茲ニ行ハレテ相悖ラズ、漸次紙幣ノ價格ヲ復シ、金楮均一ノ美ヲ見ルニ至ルベキハ確信疑ハザル所ニ有之即チ國立銀行條例改正ノ義遂奏上候處、幸ニ大臣諸公ノ贊襄ニヨリ上裁ヲ經テ今回全國ニ御布告相成下官竊ニ不勝感激之至候。

爾後全國銀行者ノ感情如何ヲ察スルニ方法ノ周密ナルト恩典ノ優渥ナルトニ感ジ概シテ歡喜
悅服ノ態ニ被相窺候。尤モ二三銀行ニ在テハ目下營業上ニ多少ノ困難ヲ覺ユルモノナキニ非ズ
ト雖ドモ、全國十二八九ハ皆利益ヲ永遠ニ企圖シ盛意ノ所在ヲ了解致シ候哉ニ相見得、邦家ノ
爲メ洵ニ大慶ノ至リニ存候

但第十五銀行ノ義ハ御承知ノ通り政府ト特別ノ約條モ有之、外銀行ト一律ニ處分難致ニ付、
改正條例ヲ實行センニハ到底夫ノ特別約定ヲ解キ、自餘ノ銀行同様ニ制限ノ準備金ヲ置カシム
ルニ非ザレバ其目的ヲ達スル能ハズ。是ニ於テ該銀行へ及協議候處、最初ハ種々苦情ノ趣モ有
之候得共、一國理財ノ大計ヨリシテ數回熟議相遂ゲ候末、終ニ政府へ借上金ノ内五百萬圓丈當
年度内ニ該銀行へ下戻シ、其内ヲ以テ制限ノ準備金ヲ置カシメ候事ニ談判相調候就テ該借上金
ノ儀ハ從來五分利付ニ候處、今般特別約定相解候上ハ、自ラ依然据置キニ難致事情モ有之旁今
後年七歩五厘ノ割ヲ以テ利息付與候事ニ内決致シ是ニ於テ銀行條例改正ノ手續全ク一段落ヲ完
結候間此段御通報申度、該手續及計算等御參照ノ爲メ別冊改正條例寫及ビ第一號ヨリ第七號迄
書類御廻シ申候間御一覽被下置度候也。

明治十六年五月三十日

大藏卿 松方正義 印

參議 伊藤博文 殿

第十四號

明治九年八月第百六號布告國立銀行條例中左ノ通改正加除ス。

第十二條 此條例ヲ遵奉シテ創立スル銀行ハ鎖店其他ノ事故アルニ非ザレバ開業免許狀ヲ受

ケシ日ヨリ二十ケ年ノ間其營業ヲ繼續スルコトヲ得ベシ。右期限後ハ更ラニ私立
銀行ノ資格ヲ以テ大藏卿ノ許可ヲ受ケ、其營業ヲ繼續スルコトヲ得ベシ。然レド
モ紙幣發行ノ特許ヲ有シ國立銀行ノ資格ヲ以テ營業ヲ繼續スルコトヲ許サズ。

第二十條 此條例ヲ遵奉スル銀行ハ其紙幣下付高四分ノ一ニ相當スル通貨ヲ以テ發行紙幣引
換ノ準備ニ充ツベシ。

第二十二條 削除。

第二十七條 但書削除。

國立銀行條例改正ノ件

第四十九條 此條例ヲ遵奉シテ創立シタル銀行ヨリ發行スル所ノ銀行紙幣ヲ通貨ト引換ヘンコトヲ請求スルモノアルトキハ日本銀行ニ於テ之ヲ引換フベシ。

第六十一條 此條例ヲ遵奉スル銀行ニ於テ預リ金ノ返濟又ハ爲換手形約束手形等ノ仕拂ヲナスニ當リ、兼テ積置キタル準備金ヲ以テ之ヲ償フコト能ハザルトキハ、其銀行ノ株主等ハ各其所持ノ株數ニ應ジ別ニ出金シテ一時之ヲ償辨スルノ責ニ任ズベシ。但此出金ハ全ク一時償辨ノ爲メニシテ其株金ト異ナルヲ以テ、其銀行ハ速カニ之レヲ各株主ヘ返辨スベシ。

第八章 利益金分配ノ方法ヲ明カニス

第七十九條 此條例ヲ遵奉スル銀行ノ頭取取締役等ハ每半季其銀行ノ總勘定ヲナシ、其總利益金ノ内ヨリ諸雜費並ニ損失補償ノ金額及ビ滯貸金ノ準備ヲ引去リ、其餘ヲ以テ純益金トナシ、之ヲ總株主ヘ分配スベシ。尤右利益ノ計算ハ株主ニ分配セザル前十日以内ニ（郵便遞送日數ヲ除ク）大藏卿ヘ差出シ其承認ヲ得テ後之ヲ株主一同ヘ通知シ、且新聞紙ヲ以テ以上ニ公告シ而シテ之ヲ株主一同ヘ分配スベシ。但儘カナル抵當物或ハ確實ナル引受人アル貸附金ヲ除クノ外、其返濟期限ヲ過

グルコト六ヶ月以上ニ及ブモノハ都テ之ヲ滯貸金ト看做スベシ。

第八十條 削除。

第八十三條 國立銀行ノ役員タル者諸相場ニ關シ投機ノ商業ニ從事スルトキハ、大藏卿ハ銀行ニ命ジ其役員ヲ退職セシムルコトアルベシ。

第十二章 官命鎖店ノ場合特例監督役跡引受人等ノ取扱方

並ニ公債證書ノ没入及ヒ紙幣引換等ノ手續ヲ明

カニス

第九十二條 削除。

第九十三條 國立銀行ニ於テ左ニ掲グル事實アルトキハ大藏卿ハ鎖店ヲ命ズルコトアルベシ。

第一、國立銀行條例ノ旨趣又ハ箇條ニ背戻シ大藏卿其銀行ヲ鎖店セシムルヲ相當ナリト思考スルトキ。

第二、國立銀行ニ於テ負債辨償ノ義務ヲ盡ス能ハザル證據アルトキ。

第三、國立銀行ニ於テ其資本金總額十分ノ五以上ノ損失ヲ生ズルトキ。

第九十四條 前條ニ記載スル事實アリト認ムルトキハ大藏卿ハ検査ノ官員ヲ派遣シ、其事實ヲ推糺セシメ、若シ相違ナキニ於テハ都テ其銀行ノ營業ヲ差止メ金銀其他ノ出納ヲ禁ズベシ。

第九十八條 此條例第九十六條ニ據リ其銀行ヨリ没入シタル公債證書ハ大藏省ノ便宜ニ從ヒ之ヲ公賣若クハ私賣シ以テ其銀行ノ發行紙幣引換ノ資ニ充ルモノトス。但右公債證書ノ賣却代價紙幣下付高ニ對シ不足アルトキハ、大藏卿ハ他ノ債主ニ先チ之ヲ其銀行ノ資産ヨリ徵收シ、若シ下付高ニ對シ過剩アルトキハ之ヲ其銀行ニ下付スベシ。

第三百三條 此條例ヲ遵奉スル銀行鎖店ノ場合ニ於テ、跡引受人ノ入費等ハ都テ相當ノ處分ヲ以テ大藏卿之ヲ取極メ他ノ債主ニ先チ其銀行ノ資産ヨリ之ヲ辨償セシムベシ。

第十六章 銀行紙幣消却ノ方法ヲ明カニス

第一百十二條 此條例ヲ遵奉スル國立銀行ヨリ發行シタル紙幣ハ左ニ掲グル方法ヲ以テ其營業年限内ニ悉皆消却スベキモノトス。但其取扱手續ハ大藏卿之ヲ定メ日本銀行ヲシテ之ニ從事セシムベシ。

一、各國立銀行ノ紙幣引換準備金ハ大藏卿ノ指定スル期限迄ニ日本銀行ニ納付シ、營業年限内之ヲ定期預ケトナシ、以テ紙幣消却ノ元資ニ充ツベシ。

一、各國立銀行ハ每半季利益金ノ多少ニ拘ラズ其銀行紙幣下付高ニ對シ年二分五厘（即チ半季一分二厘五毛）ニ當ル金額ヲ引去リ、之ヲ日本銀行ニ預ケテ紙幣消却ノ元資ニ充ツベシ。

一、日本銀行ハ前二項ニ掲グル金額ヲ預リ各國立銀行ト別段ノ約定ヲ結ビ之ガ發行紙幣ヲ消却シ、大藏省ニ上納スルモノトス。但其約定書ハ大藏卿ニ呈シテ之ガ奥書證印ヲ受クベシ。

一、日本銀行ヨリ右消却紙幣ヲ上納シタルトキハ、大藏省ニ於テ此條例第五十一條ノ手續ニ從ヒ、之ヲ燒捨テ其都度之ヲ公告スベシ。

一、日本銀行ヨリ右消却紙幣ヲ大藏省ニ上納シタルトキハ、豫テ出納局ニ差出シ置キタル紙幣抵當公債證書ノ内、右消却高ニ相當スル員額ヲ大藏省ヨリ直チニ其銀行ニ還付スベシ。

第十六章 第十七章ト改ム

第一百十二條 第一百十三條ト改ム。

右奉 勅旨布告候事。

明治十六年五月五日

太政大臣 三條實美
大藏卿 松方正義

國立銀行條例改正書類

目次

- 第一號 國立銀行發行紙幣消却方法說明
- 第二號 國立銀行紙幣消却方案
- 第三號 國立銀行紙幣消却一覽圖說明
- 第四號 大藏卿ヨリ日本銀行へ命令書案
- 第五號 大藏卿ヨリ國立銀行へ命令書案
- 第六號 日本銀行ト國立銀行トノ約定書案
- 第七號 國立銀行紙幣消却方法計算表三葉(甲號、乙號)

(第一號)

國立銀行發行紙幣消却方法說明

夫レ紙幣ノ制ノ國家ノ經濟上ニ於テ至重ノ關係ヲ有シ、紙幣ノ制其宜シキヲ得ザレバ價格浮沈信疑相雜ハリ經濟上百般ノ幣一トシテ此ヨリ生ゼザルハ莫シ。蓋シ紙幣ノ要ハ第一全國ノ流通高ヲシテ其適度ヲ持セシムルニ在リ。第二流通紙幣ヲシテ畫一ニ出デシムルニ在リ。蓋シ紙幣ノ一國ニ要スル必ズ爭フ可カラザルノ定度アリ。若シ此定度ヲ超越スルトキハ、忽チ價格ヲ墜シ市場物價ノ標準ヲ誤ルニ至ルハ經濟上ノ通理ナリ。然ルニ我邦今日ノ通貨ハ不換紙幣ナルガ故ニ、既ニ其定度ヲ超越スルモ自ラ伸縮シテ以テ常ニ之レガ適度ヲ持スル能ハズ。所謂自正ノ性ナキモノナリ。是必ラズ政府ニ於テ適當ノ處分ヲ設ケ勉メテ之ヲ減殺シテ以テ其定度ニ復セシメザルベカラズ。是レ第一ノ要點ナリ。紙幣ノ制ハ全國ニ畫一ナルヨリ善キハナシ。紙幣若シ各種ニ涉ルトキハ、信用ノ厚薄ニヨリ其價格ヲ昂低シ、浮沈定リナク、甲乙互ニ打歩ヲ生ジ、金融上爲メニ大障礙ヲ來スハ、之ヲ歐洲諸國ノ實例ニ徵シテ照タリ。今我國ノ幣制タルヤ全國百四十有餘ノ銀行互ニ紙幣ヲ發行シ、之ニ加フルニ政府ノ紙幣ヲ以テシ、種類錯雜決シテ

完美ナル制ニ非ズ。其弊幸ニ歐洲諸國ノ甚シキニ至ラズト雖ドモ、將來其轍ヲ履マザルヲ保シ難シ。是レ宜ク今ニ及ンデ各種ノ紙幣ヲシテ跡ヲ市場ニ收メシメ、到底之ヲ一途ニ歸スル計畫ヲ立テザルベカラズ。曩者日本銀行ノ創立ノ若キモ乃チ之ガ第一歩ヲ進メタルニ外ナラズ。是第二ノ要點ナリ。今之ヲ實施スルニ於テハ、先ヅ宜ク銀行紙幣ノ處分ヨリ始ムベシ。夫ノ政府紙幣ノ處分ノ若キハ別ニ自ラ畫策スル所アルヲ以テ今姑ラク之ヲ置キ、銀行紙幣ノ來歴及ビ其處分方法如何ヲ左ニ開陳セントス。

抑モ日本銀行紙幣ノ義ハ初メ明治五年頒布ノ舊國立銀行條例ニヨリ、正金兌換ノ制ヲ立テ之ガ發行ヲ國立銀行ニ特許セラレシモノニシテ、當時金貨紙幣其價ヲ同フシ、未ダ差額ヲ生ゼザリシヲ以テ、其制度ヲ扞格スル所ナシ。是レ眞ニ銀行紙幣ノ完全ナルモノト云フベシ。然ルニ明治七八年ノ交ニ至リ、内外貿易ノ轉動ニヨリ大ニ實貨ノ濫出ヲ促シ、爲メニ金貨益々騰貴シ交換益々頻繁ニ赴キ、銀行ニシテ依然實貨ヲ以テ紙幣兌換ノ準備ニ充ルトキハ、雷ニ其營業日ニ萎靡ヲ來スノミナラズ、却テ金貨外出ノ便路ヲ開クノ憂アリ。是ニ於テ當時設立ノ四銀行(第一、第二、第四、第五)連署ヲ以テ其事情ヲ政府ニ開陳シ、且通貨兌換ノ制ニ改正アランコトヲ請願セリ。當時遽カニ其願意ヲ採用ス可ラザルノ事情アリシヲ以テ、先ヅ政府發行ノ新紙幣ヲ貸下ゲテ以テ臨機周急ノ法ヲ立テタリト雖ドモ、且ツ特ニ一時彌縫ノ策ニ出デテ整正金

兌換ノ永遠ニ維持スベカラザルハ既ニ炳乎掩フ可ラザル者アリ。是ヨリ先キ明治七年中士族ノ家祿賞典祿ヲ奉還スル者ニハ秩祿公債證書ヲ下付スルノ制ヲ定メラレテ以來、士族ノ之ヲ得ルモノ或ハ農ニ歸スルモ、三百年來安逸ノ士遽カニ力耕ニ勝ヘズ。或ハ商ト爲ルモ此輩算ヲ執テ縦横ヲ知ラズ。卒ニ敗頓蹉跎ニ至ツテ止ムモノ往々是レナリ。況ンヤ明治九年ニ至リ一般華士族ノ祿制ヲ廢シ、之ニ公債證書ヲ下附セントスルニ際シ、一時巨萬ノ公債證書全國ニ散布スルガ爲メ、將來其價格ヲ墜シ、士族ノ之ヲ得ルモノ爲メニ前途ニ彷徨シ、就産ノ道ヲ失ハシコト必リセ。是時ニ當リテ政府モ亦宜ク坐視スベカラズ。假令之ヲ坐視スルモ國家治亂ノ機暗ニココニ分ルルヲ如何スベキヤ。政府此ニ見ル所アリ、是ニ於テカ全國士族ヲシテ公債證書ヲ資本トシ、紙幣發行ノ銀行ヲ設立セシメ、條令ヲ設ケテ之ヲ保護シ、以テ幾分カ其恒産ヲ失ハザラシメントノ廟議ヲ興サレタリ。時恰カモ前顯四銀行ノ出願アリテ、益々銀行條例ノ以テ改正セザルベカラザルヲ察シ、乃チ明治九年改正條例ヲ頒布シ、通貨兌換ノ制ヲ定メラル。實ニ現今銀行紙幣ノ制是レナリ。

抑々、「バンクノート」(銀行紙幣)ノ本質タル、全ク正金兌換ニ在リテ恰モ約束手形ト其作用ヲ均クスルハ是其「バンクノート」タルノ本質ナリ。然ルニ今銀行紙幣ノ兌換ニ充ルニ政府紙幣ヲ以テスルハ、即チ不換ヲ以テ兌換ニ代フ、所謂「バンクフォールセー」(強行紙幣)ノ性質

ヲ帶ブルモノニシテ、曩キニ所謂「バンクノート」ノ本質今安クニ在ルヤ。政府初メヨリ其悖理ナルヲ知ラザルニ非ザルナリ。奈何セン維新以來制度變遷多ク財政未ダ整理セズ。輸出ノ輸入ニ於ケル常ニ權衡ヲ失ヒ、之ニ加フルニ國事多端政府ノ財用毫餘裕ナキノ秋ナリ。且ツヤ全國無數ノ士族俄カニ常識ヲ解カレ、前途ニ彷徨シ、速ニ之ガ授産法ヲ立ルニ非ザレバ其患亦測ラレズ。是ノ時ニ當リテ銀行紙幣ノ本質ヲ存セント欲スレバ則チ士族授産ノ方法立タズ。是レ乃チ政府ガ斷然彼レヲ棄テ此レヲ取リシ所以ニシテ、全國士族ノ幸ニ今日アルモノハ蓋シ又國立銀行設立ノ効ニ非ズト謂フベカラザルナリ。

今ヤ制度漸ク舉リ、財路漸ク開ケ、農事商業ヨリ以テ世間百般ノ事物ニ至ルマデ多少進歩ノ効ヲ奏シ復タ當時ノ時勢ト同日ニシテ論ズベカラザルモノアリ。夫レ時運既ニ已ニ此ニ至レバ則チ夫ノ幣制ノ若キモ早晚改メテ正金兌換ノ本質ニ復シ、以テ全國流通ノ紙幣各種ニ涉ルノ大弊ヲ洗除シ、他日畫一ノ幣制ヲ布クノ目途ヲ立ツベキハ言フ俟タズ。曩者日本銀行創立ノ旨趣モ蓋シ之ヲ以テ一大目的トセシニ非ズヤ。若シ此目的ヲ他日ニ達セント欲セバ必ズ今日ヨリ良法ヲ設ケテ以テ國立銀行紙幣ヲ處分スルノ計畫ヲ爲サル可ラズ。蓋シ國立銀行紙幣ノ物タル、一般ノ取引上ハ勿論、國稅上納ニ於テモ差支ナク通用スル者ニシテ、所謂法貨ト同一ノ資格ヲ有スルモノナリ。故ニ今若シ之ヲ遞減消却スルモノトシ、流通上ノ感覺ヨリ之ヲ觀レバ恰

モ國幣ヲ減少スルト同一ニ歸シ、即チ全國流通高ヲシテ其定度ニ復セシムルノ一端ニ外ナラザルナリ。

正義熟々之ガ處分方法ヲ考按スルニ、現今發行ノ銀行紙幣ヲ舉ゲテ之ヲ日本銀行ニ負擔セシメン乎、曰ク不可ナリ。地方銀行ノ紙幣ヲ中央銀行ニ歸シテ之ガ消却處分ヲ負擔セシムルハ、歐洲諸國既ニ實例アリ、苟クモ日本銀行ニシテ今日既ニ銀行券發行ノ實力ヲ有セバ、蓋シ之ヲ負擔セシムルニ於テ亦自ラ其方法ナキニ非ズト雖ドモ、今日ヲ以テ之ヲ觀ルニ時機未ダ熟セズ、條例中既ニ銀行券發行ノ特權ヲ付與スルモ猶ホ之ヲ實行シ得ザルノ事情アルヲ奈何セン。然ルニ現今發行ノ銀行紙幣三千四百餘萬圓ノ巨額ヲ以テ、單ニ之ニ負擔セシムル固ヨリ得可ラザルノ數ナリ。

又國立銀行ヲシテ發行紙幣引換ノ準備金ヲ隨意使用スルコトヲ許ルシ、其額ニ相當スル銀行紙幣ヲ斷截セシメン乎。亦未ダ可ナラズ。何ヲ以テ之ヲ言フ、蓋シ準備金ナルモノハ條例ニ據リ常ニ銀行ノ庫中ニ存シ、苟クモ融通使用ス可カラザル者ナレバ、今之ガ使用ヲ許ルシ、之ニ代フルニ同額ノ銀行紙幣ヲ消却セシメントスルハ、乃チ得テ爲スベシト雖ドモ、然レドモ此一舉ニシテ以テ止ムベキニ非ズ。假令ヒ全國銀行ニ於テ現在準備金ニ相當スル金額五百五十餘萬圓(第十五銀行ノ準備金ハ現在ノ額ヲ舉グ)ヲ一時ニ消却シタリトスルモ、尙ホ二千八百餘萬

圓ヲ餘スベシ。而シテ此殘額ヲ消却センハ又必ず其方法ヲ他ニ求メザル可カラズ。正義竊ニ之ヲ求ムルニ蓋シニ法アリ。一ハ其殘額ヲ營業年限ニ割合ヒ、毎年利益金ノ幾分ヲ以テ之ヲ斷截セシムルコト、一ハ其殘額ヲ依然据置キニシテ營業年限ニ至リ、一時ニ之ヲ消却セシムルコト是レナリ。請フ其得失如何ヲ左ニ講究セン。

第一法ニ據ルトキハ銀行紙幣現發行高ノ内ヨリ其準備金ニ當ル金額ヲ消却セシムルモノナリ。例ヘバ資本金十萬圓ノ銀行ニシテ八萬圓ノ紙幣ヲ發行シ、準備金ニ相當スル二萬圓ハ即時ニ之ヲ消却シタリトスルモ、尙ホ六萬圓ヲ餘スベシ。之ヲ十五ケ年間(營業年限)ニ消却セントセバ必ラズ利益金ノ内ヨリ年々四千圓ヲ斷截セザル可カラズ。其困難勝テ言フベケンヤ。是レ固ヨリ銀行自ラ負債ヲ辨償スル者ニシテ、敢テ怨嗟ヲ抱クベキニ非ズト雖ドモ、政府ガ銀行ヲ待スル、乃チ過酷ナル母ナランヤ。今日猶且ツ資力薄弱ナル國立銀行ニシテ、逐年其資力ヲ減殺セラルルコトアラバ、爲メニ其經營ヲ誤リ、其資産ヲ失ヒ、倒行鎖店、蓋シ復タ今日ノ比ニ非ザルベシ。或ハ云フ我邦銀行ノ數過多ニシテ却テ害アリ、銀行ノ鎖店ハ所謂糠糶ヲ沙汰スルノ理ニシテ、深ク憂フルニ足ラズト。是レ事理ヲ知ラザルノ論ナリ。何ントナレバ銀行ナル者ハ貨財流通ノ媒介ニシテ、財政上苟モ缺クベカラザルノ要具ナリ。之ヲ歐洲諸國ニ例スルモ誰レカ我邦ノ銀行ヲ過多ナリト言ハンヤ。且夫レ銀行鎖店ノ若キ、今日ニ在テ猶且ツ金融上ニ

影響ヲ及ボシ、多少憂フ可キモノアルヲ免レズ。況ンヤ他日陸續相踵グノ慘狀ヲ見ルガ如キコトアラバ、其一般ノ財務ヲ紊亂スル果シテ如何ゾヤ。是レ第一法ノ不可ナル所以ナリ。

第二法ハ銀行紙幣ノ殘額二千八百餘萬圓ヲ依然据置ニシテ、營業年限ニ至リ一時ニ之ヲ消却セシムルモノナリ。凡ソ國立銀行ノ創立多クハ明治十一、二年ニ在ルヲ以テ、明治三十一、二年ノ交ニ至リテハ、全國百四十有餘ノ銀行一時ニ紙幣抵當ノ公債證書ヲ賣却シテ以テ二千八百餘萬圓ノ紙幣ヲ消却セザル可カラズ。夫レ此ノ如クナレバ爲メニ經濟上急激ノ變動ヲ起スノミナラズ、各銀行ノ資力猶創立ノ時ニ畢ラズシテ、流通資本急ニ減却スルガ爲メ、顛頓狼狽自滅ヲ取ルモノ全國相望ムノ慘狀ヲ見ルベキハ明々乎トシテ火ヲ睹ルガ如シ。苟モ事此ニ至レバ政府ト雖ドモ一國ノ經濟上ヨリシテ亦之ヲ坐視スル能ハズ。到底特別ノ恩典ヲ以テ營業年限ノ延期ヲ許スカ、否ラザレバ寧ロ政府ノ資力ヲ以テ之ヲ擁護維持セザルニ至ルベシ。是第二法ノ不可ナル所以ナリ。

國立銀行紙幣ノ處分タル、前文ニ論述スル如ク營業年限内ニ於テ利益金ヲ以テ之ヲ斷截スルハ固ヨリ過酷ナリ。去因循苟且今ニ及デ處分スル所アラズンバ、譬ヘバ猶水ノ益々深キガ如ク、空ク一日ヲ過セバ則チ一日ノ悔アリ。是レ宜ク今ニ及ンデ夙ニ紙幣遞減ノ標準ヲ立テ、各銀行ヲシテ將來ニ處スルノ目途ヲ定メシメ、其年限ニ至リテハ悉ク私立銀行ノ制ニ循ヒ以テ

其營業ヲ繼續セシムルノ地ヲ爲スベシ。今之ヲ施行セント欲セバ先ヅ國立銀行條例ヲ改正シ、其紙幣ヲ遞減シテ財政ノ激變ヲ生ゼシメズ、其處置ヲ徐ニシテ各銀行ヲシテ其業ニ安堵セシムルニ如カズ。之ヲ爲スハ只各國立銀行ノ準備金ヲ以テ預托セシメ、日本銀行ヲシテ銀行紙幣ノ消却ヲ負擔セシムルニ在リ。其方法タルヤ日本銀行ニテ此準備金ヲ以テ公債證書ヲ購求シ、其利子ヲ以テ年々紙幣消却ノ元資ニ充テ、而シテ各國立銀行ハ更ニ利益金ノ内ヨリ紙幣下附高ニ對シ、年二分五厘ニ當ル金額ヲ引去リ、之ヲ日本銀行ニ預ケテ公債證書ヲ買入レ、其利子ヲ以テ又紙幣消却ノ元資ニ供スベシ。右兩種ノ公債證書若シ公債支消ノ抽籤ニ當ルモノアルトキハ其當籤ノ金額ハ之ヲ日本銀行ニ受取り、轉ジテ之ヲ以テ公債證書ヲ購求シ是レ又紙幣消却ノ元資ニ差加ヘ、此ノ如クニシテ十五年ノ後ニ至リ、尙ホ其消却殘高ハ右公債證書ヲ賣却シテ悉ク之ヲ消盡スベシ。蓋シ此ノ紙幣ヤ國立銀行ノ發行スル所ナリ。然ルニ日本銀行ヲシテ之レガ消却方ヲ負擔セシムルハ少シク無理ナキニシモ非ラズト雖ドモ、該銀行ハ非常ノ特典ヲ有シ、各國立銀行ノ銀行タルガ故ニ、之ニ對シテ應分ノ義務ヲ盡スハ固ヨリ得テ辭ス可ラザル職分ナレバナリ。

抑々紙幣發行ノ特典ハ政府ガ法律ヲ以テ二十年間之ヲ銀行ニ許可シタルモノナリ。然ルニ之ヲ年限中ニ遞減セント欲セバ宜シク特別ノ活路ヲ開テ以テ之ガ救護ヲ謀ルベキハ當然ナリ。今

前陳ノ方法ヲ以テセバ目下運用ス可カラザル準備金ヨリ利息ヲ生ジ、之ヲ以テ其負債ヲ十五年間ニ遞減償却セシムルノ一大恩典ニシテ、恰モ之ヲ一種ノ保助金ト云フモ敢テ不可ナキガ如シ果シテ然レバ國立銀行ノ資力ヲ逐年減殺スルノ困難ナク、隨テ其經業ヲ誤リ、資産ヲ失フモノ今日ヨリ多キヲ加ヘズ。其利一ナリ、發行紙幣ハ營業年限ニ至リ暗ニ通貨トナリテ銀行ニ歸入スルノミナラズ、紙幣抵當ノ公債證書及ビ準備金ハ依然トシテ銀行ノ所得トナルベシ。其利二ナリ。巨萬ノ紙幣ヲ一時ニ消却セザルガ故ニ、金融上ニ激變ヲ生ジテ財政ヲ紊亂スルノ患ナシ。其利三ナリ。全國流通ノ紙幣ハ數年ノ後漸ヤク減少シテ其定度ニ復シ、他日晝一ノ幣制ヲ布クノ便ヲ得ベシ。其利四ナリ。此四アツテ而シテ施設ニ害ナク、且ツ其方法タル明亮精確、公利公益並ビ行レテ相悖ラズ。目的一タビ此ニ定レバ則チ前途惑ハズシテ將來ノ施行ニ困ムノ憂ナカラントス。銀行紙幣消却ノ方其レ之ヲ捨テ將タ安クニ求メンヤ。

此説明ヲ畢ルニ臨ンデ更ニ一言スベキアリ。何ゾヤ、曰此消却法行ハレテ興業銀行「クレヂー」フオンシエー」始メテ起スヲ得ベシ。抑々興業銀行ナルモノハ農工業ヲ培養スルノ財源ニシテ經濟上缺ク可カラザルノ要具タルハ曾テ啓陳ヲ經シ所ナリ。然ルニ今日未ダ之ヲ實施スル能ハザル所以ノモノハ、他ナシ、公債證書ノ價格低落シテ其全力ヲ有セザルガ爲メ、興業銀行ノオブリガーション券（興業銀行ヨリ發行スル債券）ヲ發行スルノ機未ダ至ラザレバナリ。今本議ノ消却法ニ

依ルトキハ、先ヅ初年ニ準備金ヲ以テ公債證書ヲ買入レ、實價七百九十餘萬圓（第十五銀行ノ準備金ハ政府ノ下戻シ金ヲ以テ制限ノ額ニ充シタルモノト看做ス）ノ公債ヲ日本銀行ニ收入シ外二年二分五厘ノ預リ金ヲ以テ購求スルモノ毎年七十餘萬圓ニ登リ、之ヲ十五年ニ累算スレバ實價一千餘萬圓ニ登ルベシ。今此公債證書ヲ日本銀行ニ管シテ嚴然据置クモノトスレバ、假令各銀行ノ紙幣消却高ニ對シテ紙幣抵當ノ公債證書ハ時々之ヲ下付スベキモノナルモ、民間ノ流通高ニ著ク減少ヲ生ジ、爲メニ其價格ヲ昂貴スベキハ必然ノ勢ナリ。公債證書既ニ勢力ヲ復スレバ、則チ縱令ヒ興業銀行ヲ起シ之ガ社券ヲ發行スルモ公債ト社券ト並行ハレテ相悖ラズ。一國農工ノ振起始メテ計ルベキナリ。人或ハ云ハン巨額ノ公債證書ヲ日本銀行ニ收入シテ十五年ノ後ニ至リ之ヲ發賣セントセバ、俄然價格ヲ墜シテ爲メニ經濟上ノ紊亂ヲ醸スコトアラント、是レ然ラズ。凡ソ現今發行ノ公債七種アリ。其償却年限ノ十五ケ年以往（明治二十年ニ當ル）ニ涉ルベキモノハ終ニ舊公債金祿起業ノ三種ニ止リ、其餘ハ皆其以内ニ之ガ償却ヲ結了スベキモノナリ。而シテ夫ノ金祿起業ノ若キモ（舊公債ハ無利息ナルヲ以テ此ニ省ク）一ハ明治二十九年一ハ明治三十五年迄ニ悉皆之ヲ償却スベキモノナレバ、今後十五年ヲ經過スレバ公債證書ノ民間ニ殘存スルモノ僅々少額ニシテ、其需用蓋シ亦今日ノ比ニ非ザルヤ必セリ。況ンヤ民間一般ノ金利ハ理財ノ機關整頓スルニ從ヒ、漸次低下スベキノ傾向アルニ於テオヤ。是ニ由テ之ヲ

觀レバ公債證書ノ下落ハ十五年後ニ憂フルニ足ラズシテ、興業銀行ノ利ハ將サニ數年間ニ興スヲ得ンコト是レ正義ガ確信疑ハザル所ナリ。

明治十六年三月

大藏卿 松方正義

(第二號)

國立銀行紙幣消却方案

一、各國立銀行ノ創立多クハ明治十一、十二年ノ交ニ在ルヲ以テ、其營業年限ヲ概スレバ明治十六年ヨリ向十五年間ニ在ルモノ最モ多シトス。因テ其發行紙幣皆之ヲ消了スルモノトス。

一、第十五國立銀行ハ特別ノ制アリテ、自餘ノ國立銀行ト同例ニ算定スル能ハズト雖ドモ、今此計算ニ於テハ當十六年度内、政府ヨリ返付高ノ内ヲ以テ更ニ二百四十萬圓ノ準備金ヲ増シテ三百五十六萬五千二百二十圓、即チ制限ノ準備額ニ充シタルモノト假定セリ。因テ各銀行ノ總額ニ於テ準備金ハ二百四十萬圓ヲ増シ紙幣發行高ハ二百四十萬圓ヲ減ジタルモノト見ルベシ。

一、右銀行紙幣ヲ消却スルニ之ガ消却元資トナスベキモノ分テ二種トス。第一各國立銀行ニ於テ現ニ貯在スル所ノ紙幣引換準備金、第二各銀行毎半季利益金ノ多少ニ拘ハラズ其紙幣下付高ニ對シ年二分五厘(半季一分二厘五毛)ニ當ル金額ヲ以テ特

ニ紙幣消却ノ準備ニ充ルモノ是レナリ今其消却手續及ビ其結果ヲ左ニ概舉セン。

第一種

此第一種ノ消却元資ハ即チ各國立銀行ニ現ニ貯在スル所ノ紙幣引換準備金ニシテ其總額ハ七百九十五萬三千二百二十圓ナリ。偕テ國立銀行條例改正ノ上ハ、直チニ各國立銀行ヨリ此準備金ヲ以テ日本銀行ニ預託セシメ、日本銀行ハ之ヲ以テ公債證書(例ヘバ七朱利付)ヲ買入ルベシ。今實價八十圓ノ相場ヲ以テ之ヲ計算スレバ其券面九百九十四萬千五百二十五圓ニ登ル。而シテ此公債證書ハ各銀行營業年限ニ至ルマデ總テ日本銀行ニ保管セシメ、右證書ヨリ年々生ズル所ノ利子六十九萬五千九百〇六圓七十五錢ヲ以テ各銀行ノ紙幣發行高ニ割合ヒ、日本銀行ニ於テ漸次之ヲ交換消却スルモノトスベシ。依テ十五ケ年ノ後ニ至リテハ此公債利子ヲ以テ銀行紙幣ヲ消却スベキ總額ハ一千〇四十三萬八千六百〇一圓二十五錢ニ上ル。

第二種

此第二種ノ消却元資ハ即チ各銀行ニテ每半季其紙幣下付高ニ對シ年二分五厘(半季一分二厘五毛ニ當ル金額ヲ以テ)特ニ紙幣消却ノ準備ニ充ルモノニシテ、今各銀行ノ紙幣總額三千八百一十一萬二千八百八十圓ニ對シ年々積立ツベキ所ノ金額ハ七十九萬五千三百二十二圓ニ登ルベシ。偕テ此金額ヲ各國立銀行ヨリ日本銀行ニ預ケシメ、日本銀行ニ於テ之ヲ以テ公債證書(例ヘバ(七分利付)ヲ購求スルモノナレバ(實價八十圓ト計算ス)其券面九十九萬四千五百五十二圓五十錢ヲ得ベシ。而シテ此公債證書ハ第一種ニ掲ル公債證書ニ均シク各銀行ノ營業年限ニ至ルマデ日本銀行ニ保管セシメ、右證書ヨリ年々生ズル所ノ利子六萬九千五百九十圓六十七錢五厘ヲ以テ紙幣消却ノ元資ニ當ツベシ。斯クノ如ク年々二分五厘ノ預ケ込ヲ以テ公債證書ト爲シ隨テ其利子ヲ以テ紙幣消却ニ供用スルモノトシ、逐年ニ之ヲ累算スレバ十五ケ年ノ後ニ至リテハ公債證書券面ニ於テ一千四百九十一萬二千二百八十七圓五十錢ヲ得ベク、而シテ其利子ヲ以テ消却スル所ノ銀行紙幣ハ八百三十五萬〇八百八十一圓ニ登ルナリ。

以上二種ノ消却元資、即チ公債證書ノ利子ヲ合計スレバ十五ケ年間ニシテ千八百七十八萬九千四百八十二圓二十五錢ヲ消却スルヲ得ベシ。因テ之ヲ現銀行紙幣發行總額三千八百八十一萬二千八百八十圓ヨリ差引ケバ、尙ホ其殘額千三百〇二萬三千三百九十七圓七十五錢ヲ餘セリ。是ニ於テ前第二種ニ掲ル所ノ公債證書券面一千四百九十一萬二千二百八十七圓五十錢(即チ年二分五厘ノ預ケ金ヲ以テ、十五ケ年間累年ニ買入レタルモノ)ヲ賣却スレバ、其實價一千百九十二萬九千八百三十圓ヲ得ベシ(但シ公債價格十五ケ年間八十圓ノ据置トシテ計算セリ尤モ十五

ケ年内ニ百圓迄ニ騰貴スルモノト假定シテ計算セシモノハ別表ニ詳カナリ) 依テ其賣拂代金ヲ以テ前紙幣殘高千三百〇二萬三千三百九十七圓七十五錢ヲ消却スルモノトスレバ其消却殘高尙ホ百〇九萬三千五百六十七圓七十五錢ヲ餘セリ。

(以上、計算ハ甲號計算表ニ詳カナリ)

前記ノ計算ヲ以テスルトキハ十五ケ年ノ後ニ至リ各銀行發行紙幣ノ内消却殘高尙ホ百〇九萬三千五百六十七圓七十五錢ヲ餘スベシト雖ドモ、實際ニ在テハ又之ヲ消却スベキノ餘資アリ。蓋シ公債證書抽籤ニ當ルトキハ政府ヨリ其券面ヲ以テ拂渡サルルガ故ニ其金額ヲ以テ更ニ原券面ニ相當スル公債證書ヲ買入ルルモ、時價八十圓ナレバ尙ホ百圓ニ付二十圓ノ餘贏ヲ生ズベシ。因テ其餘贏ヲ以テ更ニ公債證書トナシ、以テ紙幣消却ニ供スベシ。且ツ公債證書ノ價格タル年々騰貴スベキノ傾向アルヲ以テ、前計算ノ如ク毎年八十圓ノ相場ニテ買得ベキノ理ナケレバ、早晚前計算ニ於テ多少ノ變換ヲ來サルヲ得ズ。因テ今其價格ノ騰貴ト當籤高トヲ假定シテ之ガ概算ヲ立ルコト左ノ如シ。

一、公債證書ノ當籤ハ每年平均五十分ノ一ト見積リ、即五十萬圓ヲ所持スレバ年々一萬圓ヲ當籤高トシテ計算ス。

一、公債證書ノ相場(七朱利付ニテ勘定ス)ハ明治十六年ヨリ同十八年マデ八十圓同

十九年ヨリ同二十二年マデ八十五圓、同二十三年ヨリ同二十六年マデ九十圓、同二十七年ヨリ同二十九年マデ九十五圓据置トシ、而シテ末年即明治三十年ニ至リテハ百圓相場トシテ計算ス。

右ノ計算ニヨリテ毎年公債當籤ノ節其金額ヲ以テ直チニ同券面高ノ公債證書ヲ買入レ、當籤高ノ缺額ヲ補ヒ而シテ其殘額ハ更ニ公債證書トシテ消却元資ニ供スルモノトナシ、斯クノ如クシテ連年公債證書ノ員額ヲ増殖スルトキハ、十五ケ年後ニ至リ(明治三十年ニ當ル)公債券面及其利子總額即チ紙幣消却ノ元資ヲ増加スル左ノ如シ。

一、金千〇七十三萬八千九百八十二圓五十一錢一厘
準備金ヲ以テ買入レタル公債證書十五ケ年間ノ利子總額

一、金千三百七十九萬五千五百五十五圓三十二錢七厘

發行紙幣ニ對シ年二分五厘ノ金員ヲ以テ十五ケ年間買入タル公債證書券面但シ本文ハ券面ニテ擧ゲタレドモ十五年目ニハ公債實價百圓ト見積ルヲ以テ本文ハ即チ又實價ナリト知ルベシ。

一、金七百九十九萬二千二百二十三萬九千五百九十五錢八厘
前同公債證書十五ケ年間ノ利子總額

合計金二千二百五十二萬二千七百二十一圓七十九錢六厘

紙幣消却元資總額

右消却元資ノ總額ヲ以テスルトキハ現在各國立銀行ノ發行紙幣總高三千八百八十一萬二千八百八十圓ヲ悉皆消却スルモ尙ホ七十萬九千八百四十一圓七十九錢六厘ノ過剩ヲ生ズベシ。此方法ヲ以テスルトキハ紙幣消却ニ於テ十分ノ餘裕アルコト計數上ニ於テ極メテ明瞭ナリトス。假令萬分ノ一其消却元資ニ不足ヲ生ジ發行紙幣ヲ消了スル能ハザルコトアルモ、初年準備金ヲ以テ買入レタル公債證書竝ニ十五年間其當籤ノ益金ヲ以テ累年買加ヘタル公債證書總額千〇三十五萬八千四百八十圓二十六錢ニ登ルベシ。今此公債證書ヲ賣却シ、其代金ノ内ヨリ以テ之ヲ補充スルモノトスレバ、其不足ヲ生ゼンコト決シテ憂フルニ足ラズ。況ンヤ公債證書當籤ノ員額ハ逐年増加スベキガ故ニ、平均二十分ノ一ヲ當籤高ト見積ルモ敢テ不可ナキニ於テヲヤ。

(第三號)

國立銀行紙幣銷却一覽圖說明

第一圖ハ國立銀行ノ發行紙幣竝ニ準備金等ニ關スル現在ノ景況ヲ示シ、第二圖ハ國立銀行ノ準備金竝ニ發行紙幣ニ對スル年二分五厘ニ當ル金額ヲ日本銀行ニ預ケ、之ヲ元資トシテ年々其發行紙幣ヲ消却スルノ手續ヲ示シ、第三圖ハ右第二圖ノ手續ヲ以テ發行紙幣ヲ消却シタル結果ヲ示スモノナリ。今此說明ノ主意ハ第二圖及第三圖ニ就テ詳細說明ヲ加ヘテ其手續結果ノ如何ヲ了會セシムルニ在リト雖ドモ、今其說明ヲ十分ニ會得セシムルガ爲メニ先ヅ第一圖ニ就テ現在銀行ノ成り立如何ヲ略說セントス。

第一圖

抑々現在國立銀行ノ成立タルヤ、資本金十分ノ八ヲ以テ公債證書ヲ買入レ、之ヲ以テ發行紙幣ノ抵當トナシ、大藏省ニ上納シ、同額ノ銀行紙幣ヲ大藏省ヨリ受取り、資本金十分ノ二ハ通貨ニテ之ガ引換準備トナシテ以テ右銀行紙幣ヲ發行スルノ制ナリ。今之ヲ圖面某銀行ニ例スレ

バ、某銀行ノ資本金十萬圓ノ内八萬圓ヲ以テ定價八萬圓ノ公債證書ヲ買入レ、之ヲ發行紙幣ノ抵當トシテ大藏省ニ上納シ（某銀行ヨリ大藏省ニ至ル $A^1 A^2$ ナル朱線）此抵當ニ對シ同額八萬圓ノ銀行紙幣ヲ大藏省ヨリ受取り（大藏省ヨリ某銀行ニ至ル $A^1 A^2$ ナル朱線）銀行ニ於テハ資本金十萬圓ノ内二割、即チ二萬圓ヲ通貨ニテ積置キ之ヲ引換準備（即チP印）トシテ右銀行紙幣八萬圓ヲ發行シ、以テ其事業ヲ經營スルナリ（某銀行ヨリ民間ニ $A^5 A^6$ ナル朱線ハ此發行紙幣ノ民間ニ散布スルヲ示ス）儲テ右民間ニ散布シタル銀行紙幣八萬圓ハ初メ銀行ヨリ其營業ノ爲メ得意先キニ貸出シタルモノナレバ、苟クモ滞貸若クハ浪費等アルニ非ザレバ、早晚其銀行ニ收入スベキモノナリ。因テ營業年限ニ至リ悉皆之ヲ某銀行ニ收入シテ再ビ大藏省ニ返納スレバ大藏省ハ最初某銀行ヨリ上納シ置キタル公債證書實價八萬圓（但シ公債價額一定ト見ル）ヲ某銀行ニ還付スルナリ。是ニ於テ某銀行營業年限後ノ資本金ヲ計算スレバ、最初ヨリ積重ネタル準備金二萬圓ト今度紙幣上納ニ對シ還付セラルル所ノ公債證書八萬圓ト合セテ拾萬圓即チ最初創立ノ資本金ノ原額ニ復スルナリ。（尤モ營業利益金ノ内ヨリ年々ノ積立金アルベケレ共今暫ク此ニ算入セズ）

第一圖

此圖ハ今般發行セラルベキ追加條例ニ依リテ其銀行紙幣八萬圓ヲ遞減消却スルノ手續ヲ示シタルモノニシテ、其公債證書ヲ抵當トシテ、大藏省ヨリ銀行紙幣ヲ受取り、準備金ヲ置キテ之ヲ發行スル迄ノ手續ハ既ニ第一圖ニ説明シタルヲ以テ此ニ贅セズ。因テ A^1 ヨリ P^6 ニ至ル諸線ノ説明ハ第一圖ニ譲リ、直チニ右消却法ノ手續ヲ説明スベシ。儲テ其手續ハ先ヅ其銀行ニ積置ク所ノナル準備金二萬圓ヲ以テ其ノ發行紙幣消却ノ爲メ日本銀行ニ納付シ、營業年限内之ヲ定期預ケト爲スベシ（某銀行ヨリ日本銀行ニ至ル $B^1 B^2$ ナル青線）此準備金ノ外ニ某銀行ハ又其發行紙幣八萬圓ニ對シ年二分五厘、即チ二千圓ヅツ其利益金ノ内ヨリ引去リ、是レ又紙幣消却ノ元資トシテ日本銀行ヘ年々預ケ込ミヲ爲スベシ（某銀行ヨリ日本銀行ニ至ル $C^1 C^2$ ナル黒線）是ニ於テ日本銀行ハ此二口ノ預リ金ヲ以テ公債證書ヲ買入レ、之ヲ日本銀行ニ保管シ置クベシ。此公債證書ヨリ生ズル所ノ B^3 （準備金ノ公債利子） C^3 （二分五厘ノ公債利子）ナル利子ハ年々日本銀行ヘ受取り置き、而シテ第一圖ニ説明スル如ク民間ニ散布シタル某銀行ノ發行紙幣八萬圓ノ内、年々幾分カ流通取引上ヨリシテ日本銀行ヘ收入シタリトセバ、（民間ヨリ日本銀行ニ至ル $F^1 F^2$ ナル點線）日本銀行ハ彼ノ $B^3 C^3$ ナル利子ヲ併セテ之ヲ交換消却スルナリ。今此ノ如クニシテ年々消却スルモノトスレバ、其營業年限ニ至リテハ某銀行ノ流通紙幣八萬圓ノ内四萬七千二百五十圓ヲ消却シ得ベク、而シテ尙ホ其殘存スルモノ三萬二千七百五十圓アリ。是レ

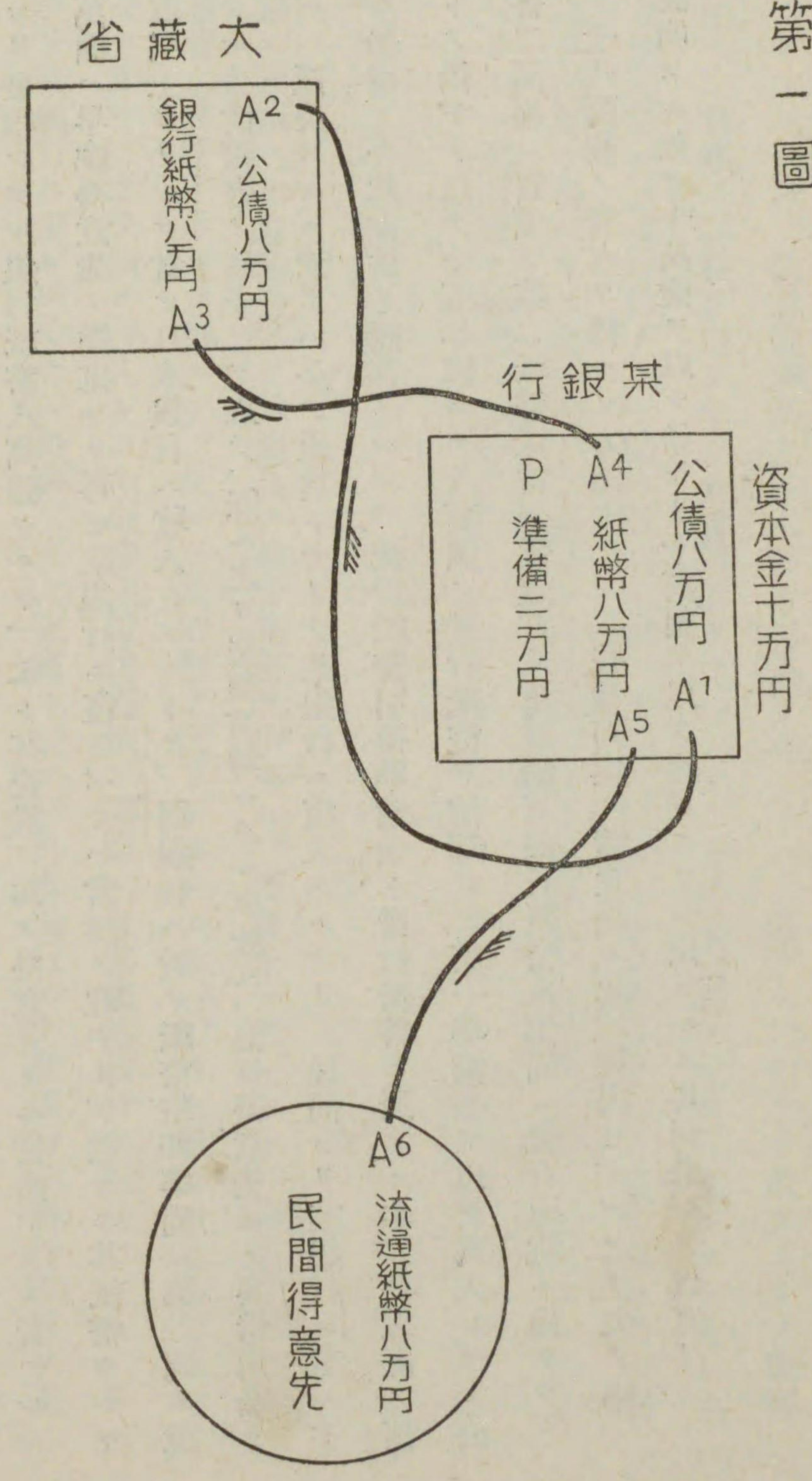
ハ前二分五厘ノ預ケ金ヲ以テ買入レ置キタル公債證書實價三萬圓（即チ十五年分）ヲ賣却シ其代價ヲ以テ之ヲ交換消却スルナリ。尤モ紙幣殘高三萬二千七百五十圓ノ内公債實價三萬圓ヲ消却スルモノトスレバ、尙ホ其殘高二千七百五十圓ヲ餘スベシト雖ドモ、亦之ヲ處分スルノ餘裕アリ。他ナシ當籤ノ利益ヲ以テ年々公債證書ニ換へ、是レ又紙幣消却ノ元費ニ充ルコト是レナリ（其方法計算ハ別表ニ詳ナリ）因テ到底某銀行ノ發行紙幣ハ右ノ方法ヲ以テ其營業年限ニ至リ悉皆之ヲ消却シ得ベキヲ見ルベシ。而シテ此方法ニ依リ某銀行ノ利益上ニ於テ如何ナル結果ヲ生ズベキカハ第三圖ニ説明スベシ。

第三圖

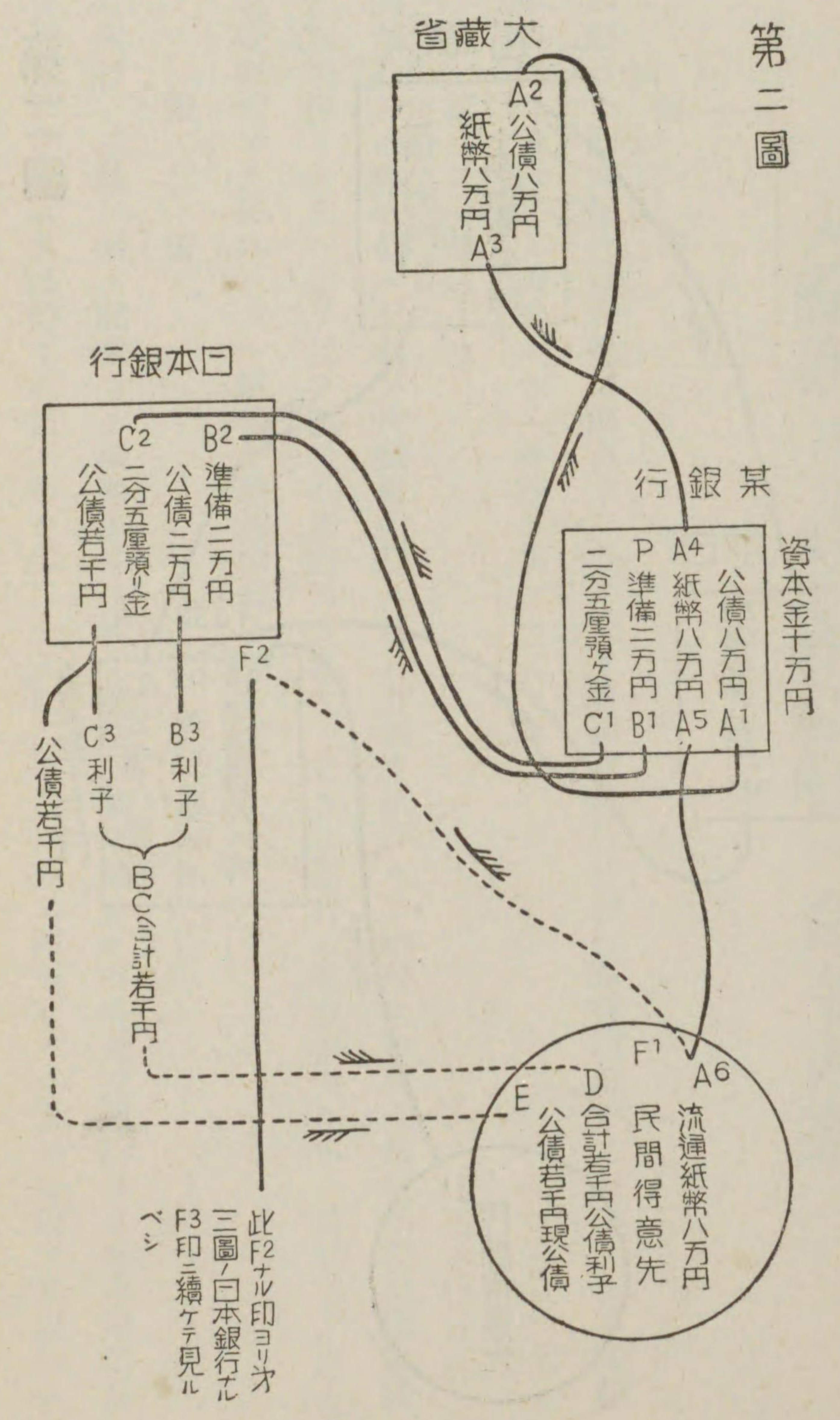
第二圖ニ説明スル方法ヲ以テ某銀行ノ發行紙幣ヲ消却シ、循環止マザルトキハ到底營業年限ニ至リ悉皆之ヲ消了スルヲ得ベシ。果シテ其紙幣ヲ消了シタルトキハ、日本銀行ハ最初某銀行ノ準備金ヲ預リ、之ヲ以テ買入シタル公債（證書實價二萬圓）ヲ其儘某銀行ニ還付スベシ（日本銀行ヨリ某銀行ニ至ル¹¹ ¹²ナル青線）又大藏省ニ於テハ日本銀行ニテ某銀行ノ發行紙幣ヲ逐年消却シテ之ヲ同省ニ上納スルニ從ヒ（日本銀行ヨリ大藏省ニ至ル¹³ ¹⁴ナル朱點線）最初某銀行ヨリ紙幣抵當トシテ上納シ置キタル公債證書（實價八萬圓）ノ内其消却紙幣ニ相當スル員數

ヲ時々某銀行ニ下付セラレベキガ故ニ、營業年限即チ發行紙幣悉皆消却ノ期ニ至レバ抵當公債八萬圓ハ全ク某銀行ノ所得ニ歸スルナリ（大藏省ヨリ某銀行ニ至ル¹⁵ ¹⁶ナル朱點線）又最初某銀行ヨリ發行シタル銀行紙幣八萬圓タルヤ、本ト其營業ノ爲メ得意先キニ貸出シタル者ナレバ此八萬圓ハ早晚得意先ノ勘定ヨリ再ビ某銀行ニ復スベキハ當然ノ理ナリ。然ルニ其紙幣タルヤ流通取引上ヨリシテ曾テ日本銀行ニ收入シタルトキ、同銀行ニ於テ紙幣消却準備（第二圖ニ説明シタル公債證書ノ利子）ヲ以テ、既ニ之ヲ交換消却シタルガ故ニ、他日得意先ヨリ其借用金ヲ某銀行へ返戻スルニ至テハ全ク通貨トナリテ某銀行ニ復入スルナリ（民間ヨリ某銀行ニ至ル¹⁷ ¹⁸ナル朱線）今此方法ヲ概言スレバ、發行紙幣引換準備金ト發行紙幣ニ對スル年二分五厘ノ預ケ金トノ働キヲ以テ十五年間ニテ八萬圓ノ發行紙幣ヲ消却シテ第一準備金ヲ以テ買入レタル公債證書二萬圓（實價）第二紙幣抵當公債證書八萬圓第三銀行紙幣八萬圓（但シ通貨ニ換リテ）合セテ十八萬圓ノ資本ヲ得ルノ方案ナリ。（營業利益ノ積立金ハ此ニ算出セズ）之ヲ夫ノ第一圖ニ説明スル如ク十萬圓ヲ以テ始マリ十萬圓ヲ以テ終ルモノニ比スルニ其利果シテ如何。

第一圖



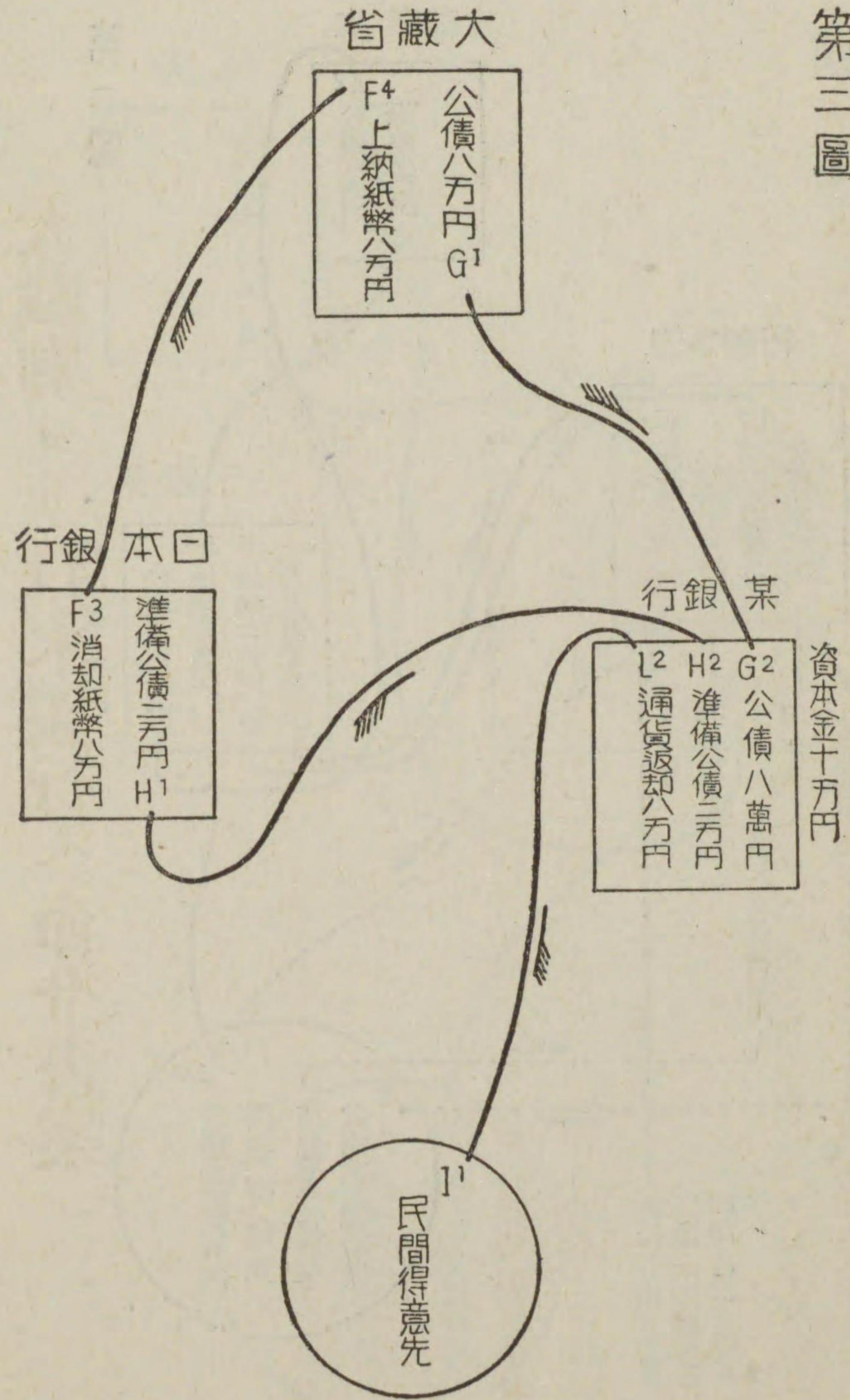
第二圖



國立銀行紙幣消却一覽圖說明

此F2ナル印ヨリ
三圖ノ日本銀行
F3印ニ續ケテ見ル
ベシ

第三圖



(第四號)

大藏卿ヨリ日本銀行へ命令書案

第一條

其銀行ハ國立銀行條例追加第一百十二條ニ依リ各國立銀行ノ發行紙幣消却方ヲ引受ケ各々其營業年限内ニ悉皆之ヲ處分スルノ義務ヲ負フモノトス。

第二條

其銀行ハ前第一條ニ記載スル紙幣消却ノ爲メ各國立銀行ヨリ納付スル所ノ發行紙幣引換準備金ヲ定期預リトナシ之ヲ以テ利付公債證書ヲ買入レ之ヲ其銀行ニ保管シ置キ年々其利子ヲ以テ各國立銀行ヨリ發行シタル紙幣ヲ遞減消却スベシ。

第三條

其銀行ハ前第一條ニ記載スル紙幣消却ノ爲メ前第二條準備金ノ外各國立銀行ヨリ每半期二月一日八月一日迄ニ其紙幣下付高ニ對シ年二分五厘(半期一分二厘五毛)ニ當ル金額ヲ其銀行ニ納付シタルトキハ之ヲ定期預リトナシ之ヲ以テ利付公債證書ヲ買入レ各々其營業年限内之ヲ其

大藏卿ヨリ日本銀行へ命令書案

銀行ニ保管シ置キ年々其利子ヲ以テ各國立銀行ヨリ發行シタル紙幣ヲ遞減消却スベシ。

第四條

其銀行ハ前第二條ニ掲グル公債利子ヲ以テ各國立銀行ノ發行紙幣ヲ消却シ其營業年限ニ至リ尚ホ殘存スルモノハ第三條ニ掲グル公債證書ヲ賣却シ其代金ヲ以テ悉皆之ヲ消却シ若シ過剩ヲ生ズルトキハ之ヲ各國立銀行ニ還付スベシ。

第五條

前第二條ニ據リ各國立銀行ヨリ其銀行ニ納付スル所ノ準備金ハ各國立銀行ノ發行紙幣ノ消却ヲ完了シタル上其銀行ヨリ之ヲ各國立銀行ニ還付スルモノトス。但シ其營業年限内ニ於テ公債證書價格ノ騰貴ニヨリ前第三條ニ記載スル公債證書（即チ發行紙幣ニ對スル二分五厘ノ金額ヲ以テ買入レタル分）及ビ其利子ニ減少ヲ生ズ之ガ爲メ紙幣消却ノ元資ニ不足ヲ來スコトアルトキハ最初準備金ヲ以テ買入レタル公債證書ヲ賣拂ヒ其代金ノ内ヨリ之ヲ補充スベシ。

第六條

其銀行ハ各國立銀行ヨリ紙幣引換準備金ノ預託ヲ受クルニ付キ該紙幣引換ノ義ハ國立銀行條例改正第四十九條ニ據リ其銀行ニ於テ之ヲ負擔シ若シ通貨ト交換ヲ請求スルモノアルトキハ其銀行本店ニ於テ之ヲ引換フベシ。但シ大藏卿ニ於テ要用ナリト思考スルトキハ其銀行ニ命ジ

テ其銀行支店又ハ「コルレスボンデンス」店ニ於テ之ガ引換ヲ爲サシムルコトアルベシ。

第七條

第二條第三條ニ記載スル公債證書ノ内若シ公債費消ノ抽籤ニ當ルモノアルトキハ其銀行ニ於テ其當籤金額ヲ受取り之ヲ以テ右當籤ノ公債額面ニ相當スル他ノ公債證書ヲ買入レ以テ其當籤ノ員額ヲ補充スベシ而シテ尚ホ餘剩アルトキハ更ニ之ヲ以テ公債證書ヲ買入レ亦以テ紙幣消却ノ元資ニ加フベシ。

第八條

前第七條ノ當籤金額ヲ以テ公債證書ヲ買入レ尚ホ端數ヲ生ジ公債證書ヲ買入ルベキ員額ニ充タザルモノアルトキハ之ヲ次期ニ繰越シ其第二條ノ公債證書ニ係ルモノハ第二條ノ公債證書次回ノ當籤金額ニ併セ第三條ノ公債證書ニ係ルモノハ第三條ノ公債證書次回ノ當籤金額ニ併セ之ヲ以テ更ニ紙幣消却ノ元資トシテ公債證書買入レニ充ルモノトス。

第九條

各國立銀行ノ發行紙幣ハ第二條第三條ノ消却法ニ依リ逐年其流通高ヲ減少スベシト雖ドモ、第三條ニ從ヒ各國立銀行ヨリ其紙幣下付高ニ對シ其銀行ニ預ケ入ルベキ金額（紙幣下付高ニ對スル二分五厘）ハ其營業年限内紙幣流通ノ減少ニ拘ラズ年々同額ヲ以テ納付シ更ニ増減ナキモ

ノトス。

第十條

國立銀行ノ内若シ第三條ニ記載スル期限内ニ預ケ金ノ納付ヲ怠リタルモノアルトキハ其銀行ハ其趣ヲ大藏卿ニ稟申スベシ大藏卿ハ此稟申ニ依リ右預ケ金ヲ怠リタル銀行ヲ督促シ尙ホ之ガ納付ヲ爲サザルトキハ大藏省ニ於テ右銀行（預ケ金ヲ怠リタル銀行）ノ紙幣抵當公債證書ノ利子ノ内ヨリ當期納付高ニ相當スル金額及當期買入ルベキ公債證書ノ利子一期分毎ニ相當スル金額ヲ引去リ大藏省ヨリ直チニ之ヲ其銀行ニ下付シ其當期納付高ニ相當スル金額ハ右銀行ノ利子一期分ニ相當スル金額ハ直チニ之ヲ以テ其期ノ消却元資ニ充ルモノトス。

第十一條

第二條第三條及ビ第七條ニ記載スル公債證書ノ利子ハ每期日本銀行ニ於テ直チニ東京府廳ヨリ受取り之ヲ以テ各國立銀行ノ發行紙幣ヲ引換ヘ之ニ消印ヲ爲シ而シテ毎月五日マデニ前月分ノ消却高ヲ取纏メ之ニ其紙幣ノ種類、記號、番號、員額等ヲ記載シタル明細表ヲ添付シテ之ヲ大藏省ニ上納シ、且ツ此ノ明細表ノ寫ヲ以テ右期限迄ニ各國立銀行ニ通知スベシ。而シテ各國立銀行ニ於テ此通知ヲ受ケタルトキハ直チニ之ヲ大藏卿ニ届出デシムルモノトス。

第十二條

此命令書ニ據リ其銀行ニ於テ各國立銀行ヨリ受領スル所ノ金額ハ全ク各國立銀行ノ發行紙幣ヲ消却スルノ元資ニシテ其營業年限内ニ於テ不時鎖店ノ場合ヲ除クノ外何等ノ事情アルモ之ヲ引出ス可カラザルハ勿論、其銀行ニ於テモ亦誠實ニ之ヲ保管シ決シテ之ヲ融通運轉スルヲ得ザルモノトス。

第十三條

此命令書ニ據リ其銀行ニ於テ各國立銀行ヨリ受領スル所ノ金額ハ公債證書ト爲シ其利子ヲ以テ各國立銀行紙幣消却ノ元資ニ當ツルモノナルガ故ニ其銀行ハ別段之ニ利子ヲ付セザルモノトス。

第十四條

其銀行ニ於テ各國立銀行ノ爲メ此命令書ニ據リ預リ金取扱竝ニ發行紙幣ノ消却方ヲ負擔スレバ其銀行ヨリ各國立銀行ニ對スルノ義務ニシテ別段之ガ手数料ヲ收メザルモノトス。

第十五條

其銀行ハ此命令書ニ記載スル預リ金取扱竝ニ紙幣消却事務ノ爲メ其銀行内ニ特ニ一部ヲ設ケテ之ヲ處辨セシムベシ。

第十六條

大藏卿ヨリ日本銀行へ命令書案

其銀行ニ於テ各國立銀行ノ發行紙幣消却ノ事務ヲ處辨スルニ就テハ各自ニ其勘定ヲ異ニシ敢テ混淆ス可カラザルハ勿論ナリト雖ドモ、第二條第三條及ビ第七條ニ據リ公債證書ヲ買入レ又ハ其抽籤賣拂等ノ事ニ於テハ各國立銀行トモ合同シテ之ヲ取扱ヒ別段之ガ區別ヲ立テザルモノトス。

第十七條

其銀行ハ各國立銀行ノ發行紙幣消却ニ關スル事務ノ顛末及其計算等ヲ報告スル爲メ一銀行毎トニ半期報告表ヲ作り上半期ノ分ハ八月十五日迄、下半期ノ分ハ二月十五日迄ニ之ヲ大藏卿ニ差出シ其寫ヲ以テ各其國立銀行ニ送付スベシ。

第十八條

國立銀行ノ内若シ其銀行ニ就テ同銀行紙幣消却ニ關スル帳簿書類ヲ査閲センコトヲ大藏卿ニ稟請スル者アリテ大藏卿之ヲ許可スルニ於テハ直チニ其銀行ニ命ジテ特ニ右稟請セシ銀行ノ勘定ニ關スル部分ニ限り之ガ査閲ヲ受ケシムルモノトス。

第十九條

其銀行ハ各國立銀行ノ發行紙幣消却ノ事務ヲ負擔スルニ付此命令書ノ旨趣ニ基キ各國立銀行ト特別ノ約定ヲ結ビ其取扱手續ヲ定ムベシ但シ此約定書ハ本書ニ通及ビ副書一通（大藏省ニ留置ク分）ヲ製シ大藏卿ニ呈シテ之ガ奥書證印ヲ受ケタル上其本書一通ハ國立銀行ニ留置キ一通ハ其銀行ニ留置クモノトス。

第二十條

前第十九條ニ記載スル約定書中此命令書ノ旨趣ニ牴觸セザル個條ニシテ其細目ニ涉ルモノハ其銀行トノ協議ヲ以テ適宜規定スルヲ得ベシト雖ドモ其都度之ヲ大藏卿ニ稟申シテ許可ヲ受クベキモノトス。

第二十一條

大藏卿ニ於テ必要ナリト思考スルトキハ何時ニテモ此命令書ノ個條ヲ改正又ハ増削スルコトヲ得。

(第五號)

大藏卿ヨリ各國立銀行へ命令書案

第一條

其銀行發行紙幣ノ儀ハ國立銀行條例追加第一百十二條ニ依リ其銀行ノ營業年限内ニ悉皆消却スルモノトス。

第二條

其銀行ハ前第一條ニ記載スル紙幣消却ノ爲メ發行紙幣引換準備金ノ半額ヲ本年六月三十日迄ニ其殘半額ヲ同十二月三十一日迄ニ遅延ナク日本銀行ニ納付シ營業年限内之ヲ定期預ケト爲スベシ。但シ此準備金ハ日本銀行ニ於テ之ヲ以テ利付公債證書ヲ買入レ之ヲ該銀行ニ保管シ置キ年々其利子ヲ以テ其銀行ヨリ發行シタル紙幣ヲ遞減消却セシムルモノトス。

第三條

其銀行ハ前第一條ニ記載スル紙幣消却ノ爲メ前第二條準備金ノ外更ニ每半季利益金ノ多少ニ拘ハラズ其銀行紙幣下付高ニ對シ年二分五厘(即チ半期一分二厘五毛)ニ當ル金額ヲ引去リ其

銀行營業年限内毎年二月一日八月一日迄ニ之ヲ日本銀行ニ預ケ入ルベシ此預ケ金ハ日本銀行ニ於テ之ヲ以テ利付公債證書ヲ買入レ其銀行營業年限内之ヲ其銀行ニ保管シ置キ年々其利子ヲ以テ其銀行ヨリ發行シタル紙幣ヲ遞減消却セシムルモノトス。

第四條

前第二條第三條ノ公債利子ヲ以テ其銀行ノ發行紙幣ヲ消却シ、營業年限ニ至リ尙ホ殘存スルモノハ前第三條ニ掲ル公債證書ヲ賣拂ヒ其代金ヲ以テ悉皆之ヲ消却シ若シ餘剩ヲ生ズルトキハ之ヲ日本銀行ヨリ其銀行ニ還付セシムベシ。

第五條

前第二條ニ據リ其銀行ヨリ日本銀行ニ納付スル所ノ準備金ハ其銀行ノ發行紙幣ノ消却ヲ完了シタル上日本銀行ヨリ之ヲ其銀行ニ還付セシムルモノトス。但營業年限内ニ於テ公債證書價格ノ騰貴ニヨリ前第三條ニ記載スル公債證書(即チ發行紙幣ニ對スル二分五厘ノ金額ヲ以テ買入レタル分)及ビ其利子ニ減少ヲ生ジ之ガ爲メ紙幣消却ノ元資ニ不足ヲ來スコトアルトキハ最切準備金ヲ以テ買入レタル公債證書ヲ賣拂ヒ其代金ノ内ヨリ之ヲ補充スルモノトス。

第六條

第二條第三條ニ記載スル公債證書ノ内若シ公債費消ノ抽籤ニ當ルモノアルトキハ日本銀行ニ

於テ其當籤金額ヲ受取り之ヲ以テ右當籤ノ公債額面ニ相當スル他ノ公債證書ヲ買入レ以テ其當籤ノ員額ヲ補充スベシ、而シテ尙ホ餘剩アルトキハ更ニ之ヲ以テ公債證書ヲ買入レ亦以テ紙幣消却ノ元資ニ加フルモノトス。

第七條

前第六條ノ當籤金額ヲ以テ公債證書ヲ買入レ尙ホ端數ヲ生ジ公債證書ヲ買入ルベキ員額ニ充タザルモノアルトキハ之ヲ次期ニ繰越シ其第二條ノ公債證書ニ係ルモノハ第二條ノ公債證書次回ノ當籤金額ニ併セ第三條ノ公債證書ニ係ルモノハ第三條ノ公債證書次回ノ當籤金額ニ併セ之ヲ以テ更ニ紙幣消却ノ元資トシテ公債證書買入レニ充ルモノトス。

第八條

其銀行ノ發行紙幣ハ第二條第三條ノ消却法ニ依リ逐年其流通高ヲ減少スベシト雖ドモ、其銀行ヨリ第三條ニ依リ其紙幣下付高ニ對シ日本銀行ニ預ケ入ルベキ金額（紙幣下付高ニ對スル年二分五厘）ハ營業年限内紙幣流通高ノ減少ニ拘ハラズ年々同額ヲ以テ納付シ更ニ増減ナキモノトス。

第九條

其銀行若シ第三條ニ記載スル期限内ニ預ケ金ノ納付ヲ怠ルトキハ、日本銀行ハ其趣ヲ大藏卿

ニ稟申シ大藏卿ヨリ之ヲ督促スルモノトス。爾後尙之ガ納付ヲ爲サザルトキハ大藏省ニ於テ其銀行ノ紙幣抵當公債證書ノ利子ノ内ヨリ當期納付高ニ相當スル金額及ビ當期買入ルベキ公債證書ノ利子一期分ニ相當スル金額ヲ引去リ大藏省ヨリ直チニ之ヲ日本銀行ニ下付シ其當期納付高ニ相當スル金額ハ其銀行ノ紙幣消却ノ爲メ公債證書ヲ買入レシメ當期買入ルベキ公債證書ノ利子一期分ニ相當スル金額ハ直チニ之ヲ以テ其期ノ消却元資ニ充ルモノトス。

第十條

前第二條第三條及第六條ニ記載スル公債證書ノ利子ハ每期日本銀行ニ於テ直チニ東京府廳ヨリ受取り之ヲ以テ其銀行ノ發行紙幣ヲ遞減消却シ毎月五日マデニ前月分ノ消却高ヲ取纏メ之ニ其紙幣ノ種類記號番號員額等ヲ記載シタル明細表ヲ添付シテ之ヲ大藏省ニ上納シ且ツ此明細表ノ寫ヲ以テ右期限マデニ其銀行ニ通知スルモノトス。而シテ右通知ヲ得タルトキハ其銀行ヨリ直チニ之ヲ大藏卿ニ届出ヅベシ。

第十一條

日本銀行ヨリ右消却紙幣ヲ上納シタルトキハ毎年七月十二月大藏省ニ於テ國立銀行條例第五十一條ノ手續ニ從ヒ之ヲ燒捨テ其都度之ヲ公告スベシ。

第十二條

大藏卿ヨリ各國立銀行ヘ命令書案

日本銀行ヨリ前第十條ニ從ヒ消却紙幣ヲ大藏省ニ上納シタルトキハ大藏卿ハ其銀行ヨリ豫テ出納局ニ差出シ置キタル紙幣抵當公債證書ノ内右消却高ニ相當スル員額ヲ大藏省ヨリ直チニ其銀行へ還付スルモノトス。

第十三條

此命令書ニ從ヒ其銀行ヨリ日本銀行ニ納付スル所ノ金額ハ全ク其銀行ノ發行紙幣ヲ消却スルノ元資ニシテ日本銀行ニ於テ之ヲ融通運轉ス可カラザルハ勿論其銀行モ亦其營業年限内ニ於テ不時鎖店ノ場合ヲ除クノ外何等ノ事情アルモ之ヲ引出スヲ得ザルモノトス。

第十四條

此命令書ニ據リ其銀行ヨリ日本銀行ニ納付スル所ノ金額ハ公債證書ト爲シ其利子ヲ以テ其銀行ノ紙幣消却ノ元資ニ當ツルモノナルガ故ニ、日本銀行ハ別段之ニ利子ヲ付セザルモノトス。

第十五條

日本銀行ハ其銀行ノ爲メ此命令書ニ據リ預リ金取扱方竝ニ發行紙幣ノ消却方ヲ負擔スルモ別段之カ手数料ヲ收メザルモノトス。

第十六條

日本銀行ハ此命令書ニ記載スル預リ金取扱竝ニ紙幣消却事務ノ爲メ日本銀行内ニ特ニ一部ヲ

設ケテ之ヲ處辨セシムルモノトス。

第十七條

日本銀行ニ於テ其銀行紙幣消却ノ事務ヲ負擔スルニ就テハ各國立銀行ノ分ト其勘定ヲ異ニシ敢テ混淆ス可ラザルハ勿論ナリト雖ドモ、第二條、第三條、第六條ニ據リ公債證書ヲ買入レ又ハ其抽籤賣拂等ノコトニ於テハ各國立銀行トモ合同シテ之ヲ取扱ヒ別段之ガ區別ヲ立テザルモノトス。

第十八條

其銀行ノ發行紙幣消却事務ノ顛末及ビ其計算等ハ日本銀行ニ於テ毎半期之ガ報告表ヲ製シ上半期ノ分ハ八月十五日迄下半期ノ分ハ二月十五日迄ニ之ヲ其銀行ニ送付セシムルモノトス。

第十九條

其銀行若シ日本銀行ニ就テ其銀行ノ發行紙幣消却ニ關スル帳簿書類ヲ査閲センコトヲ望ムトキハ豫メ其旨ヲ大藏卿ニ稟請シテ許可ヲ受クベシ、大藏卿ハ其稟請ニヨリ日本銀行ニ命ジテ特ニ其銀行ノ勘定ニ關スル部分ニ限り之ヲ査閲ヲ受ケシムルモノトス。

第二十條

其銀行ハ紙幣消却ノ事務ヲ日本銀行ニ委託スルニ付此命令書ノ旨趣ニ基キ日本銀行ト特別ノ

約定ヲ結び其取扱手續ヲ定ムベシ。但シ此約定書ハ本書ニ通及副書一通（大藏省ニ留置ク分）ヲ製シ大藏卿ニ呈シテ之ガ奥書證印ヲ受ケタル上其本書一通ハ日本銀行ニ留置キ、一通ハ其銀行ニ留置クモノトス。

第二十一條

前第二十條ニ記載セル約定書中此命令書ノ旨趣ニ牴觸セザル個條ニシテ其細目ニ涉ルモノハ其銀行ト日本銀行トノ協議ヲ以テ適宜規定スルヲ得ベシト雖ドモ、其都度之ヲ大藏卿ニ稟申シテ許可ヲ受クベキモノトス。

第二十二條

大藏卿ニ於テ必要ナリト思考スルトキハ何時ニテモ此命令書ノ個條ヲ改正又ハ増削スルコトヲ得。

(第六號)

日本銀行ト各國立銀行ト約定書案

(此約定書ハ一銀行毎ニ各別ニ製スルモノナレドモ今暫ク資本金十萬圓發行紙幣八萬圓準備金二萬圓ト假定シテ其一例ヲ示ス。

某國立銀行ヨリ發行シタル銀行紙幣八萬圓消却ノ義國立銀行條例追加第一百十二條ニ據リ日本銀行ニ於テ之ヲ負擔スルニ付キ明治十六年 月 日付ヲ以テ大藏卿閣下ヨリ此兩銀行ニ下付セラレタル命令書ノ旨趣ニ基キ日本銀行ト某國立銀行トノ間ニ約定ヲ締結シ其取扱手續ヲ規定スルコト左ノ如シ。

第一條

某國立銀行ヨリ發行シタル紙幣八萬圓ハ國立銀行條例追加第一百十二條ニ據リ某國立銀行ノ營業年限即チ明治何年何月何日迄ニ日本銀行ニ於テ之ヲ遞減消却スルモノトス。

第二條

某國立銀行ハ前第一條ニ記載スル紙幣消却ノ爲メ其紙幣引換準備金二萬圓ヲ日本銀行ニ納付

シ某國立銀行ノ營業年限内之ヲ定期預リト爲スベシ。

日本銀行ハ右準備金二萬圓ヲ以テ利付公債證書ヲ買入レ之ヲ該銀行ニ保管シ置キ年々其利子ヲ以テ某國立銀行ヨリ發行シタル紙幣ヲ遞減消却スルモノトス。

第三條

某國立銀行ハ前第一條ニ記載スル紙幣消却ノ爲メ前第二條準備金ノ外更ニ每半期利益金ノ多少ニ拘ラズ該銀行ノ紙幣下付高ニ對シ年二分五厘（即チ半期一分二厘五毛）ニ當ル金額一千圓（年二千圓）ヲ引去リ該銀行營業年限内毎年二月一日八月一日迄ニ之ヲ日本銀行ニ預ケ入ルベシ。

日本銀行ハ此預ケ金ヲ以テ利付公債證書ヲ買入レ某國立銀行ノ營業年限内之ヲ日本銀行ニ保管シ置キ年々其利子ヲ以テ某國立銀行ヨリ發行シタル紙幣ヲ遞減消却スルモノトス。

第四條

日本銀行ハ前第二條第三條ニ記載スル公債利子ヲ以テ、某國立銀行ノ發行紙幣ヲ消却シ某國立銀行ノ營業年限ニ至リ尙ホ殘存スルモノハ前第三條ニ掲ル公債證書ヲ賣拂ヒ其代金ヲ以テ悉皆之ヲ消却シ若シ餘剩ナル生ズルトキハ之ヲ某國立銀行ニ還付スベシ。

第五條

日本銀行ハ某國立銀行ヨリ前第二條ニ記載スル預リ金ヲ受取リタルトキハ、第一號雛形ニ據リ定期預證書ヲ交付シ、第三條ニ記載スル預リ金ヲ受取リタルトキハ其都度第二號雛形ニ據リ定期預證書ヲ交付スベシ。

第六條

前第二條ニ據リ某國立銀行ヨリ日本銀行ニ納付スル所ノ準備金ハ某國立銀行ノ發行紙幣ノ消却ヲ完了シタル上、日本銀行ヨリ之ヲ某國立銀行ニ還付スルモノトス。但シ某國立銀行ノ營業年限内ニ於テ公債證書價格ノ騰貴ニヨリ前第三條ニ記載スル公債證書（即チ發行紙幣ニ對スル二分五厘ノ金額ヲ以テ買入レタル分）及ビ其利子ニ減少ヲ生ジ之ガ爲メ紙幣消却ノ元資ニ不足ヲ來スコトアルトキハ最初準備金ヲ以テ買入レタル公債證書（即チ第二條ニ記載スルモノ）ヲ賣拂ヒ其代金ノ内ヨリ之ヲ補充スルモノトス。

第七條

某國立銀行ノ紙幣引換準備金ヲ日本銀行ニ預託スルニ付テハ、該紙幣引換ノ義ハ國立銀行條例改正第四十九條ニ據リ日本銀行ニ於テ之ヲ負擔シ、若シ通貨ト交換ヲ請求スルモノアルトキハ日本銀行本店ニ於テ之ヲ引換フベシ、但シ大藏卿ヨリ日本銀行ニ命令アルニ於テハ日本銀行支店又ハ「コレスポンデンス」店ニ於テ之ガ引換ヲ爲スコトアルベシ。

第八條

第二條第三條ニ記載スル公債證書ノ内若シ公債支消ノ抽籤ニ當ルモノアルトキハ日本銀行ニ於テ其當籤金額ヲ受取り之ヲ以テ右當籤ノ公債額面ニ相當スル他ノ公債證書ヲ買入レ以テ其當籤ノ員額ヲ補充スベシ。而シテ尙ホ餘剩アルトキハ更ニ之ヲ以テ公債證書ヲ買入レ亦以テ紙幣消却ノ元資ニ加フベシ。

第九條

前第八條ノ當籤金額ヲ以テ公債證書ヲ買入レ、尙ホ端數ヲ生ジ公債證書ヲ買入ルベキ員額ニ充タザルトキハ之ヲ次期ニ繰越シ其第二條ノ公債證書ニ係ルモノハ第二條ノ公債證書次回ノ當籤金額ニ併セ第三條ノ公債證書ニ係ルモノハ、第三條ノ公債證書次回ノ當籤金額ニ併セ之ヲ以テ更ニ紙幣消却ノ元資トシテ公債證書買入レニ充ルモノトス。

第十條

某國立銀行ノ發行紙幣ハ第二條第三條ノ消却法ニ依リ、毎年其流通高ヲ減少スベシト雖ドモ某國立銀行ヨリ第二條ニ據リ其紙幣下付高ニ對シ日本銀行ニ預ケ入ルベキ金額（紙幣下付高ニ對スル二分五厘即チ年二千圓半期一千圓）ハ營業年限（明治何年ヨリ同何年迄）紙幣流通高ノ減少ニ拘ハラズ年々同額ヲ以テ納付シ更ニ増減ナキモノトス。

第十一條

某國立銀行ニ於テ第三條ニ記載スル期限内ニ預ケ金ノ納付ヲ怠リタルトキハ其趣ヲ大藏卿ニ稟申スベシ。

第十二條

前第二條第三條及ビ第八條ニ記載スル公債證書ノ利子ハ每期日本銀行ニ於テ直チニ東京府廳ヨリ受取り之ヲ以テ某國立銀行ノ紙幣ヲ引換ヘ之レニ消印ヲ爲スベシ。而シテ毎月五日マデニ前月分ノ消却紙幣ヲ取纏メ之ニ其種類、記號、番號、員額ヲ記載シタル明細表ヲ添付シテ之ヲ大藏省ニ上納シ、且ツ此明細表ノ寫ヲ以テ右期限マデニ之ヲ某國立銀行ニ通知スベシ。

某國立銀行ハ前項ニ記載スル消却紙幣ノ通知ヲ受ケタルトキハ直チニ之ヲ大藏卿ニ届出デ、且ツ同銀行ノ發行紙幣元帳ノ内右消却シタル紙幣ヲ消除シタル上、元帳消除ノ證書ヲ作り之ヲ日本銀行ニ送致スベシ。

第十三條

此約定書ニ從ヒ某國立銀行ヨリ日本銀行ニ納付スル所ノ金額ハ全ク某國立銀行ノ發行紙幣ヲ消却スルノ元資ニシテ、日本銀行ニ於テ之ヲ融通運轉スベカラザルハ勿論、某國立銀行モ亦其營業年限ニ於テ不時鎖店ノ場合ヲ除クノ外何等ノ事情アルモ之ヲ引出スヲ得ザルモノトス。

第十四條

此約定書ニ據リ某國立銀行ヨリ日本銀行ニ納付スル所ノ金額ハ、日本銀行ニ於テ公債證書ヲ買入レ其利子ヲ以テ某國立銀行ノ發行紙幣ヲ消却スルモノナルガ故ニ日本銀行ハ別段之ニ利子ヲ付セザルモノトス。

第十五條

日本銀行ハ某國立銀行ノ爲メ此約定書ニ據リ預リ金取扱方竝ニ發行紙幣ノ消却方ヲ負擔スルモ別段之ガ手数料ヲ收メザルモノトス。

第十六條

日本銀行ハ大藏卿ヨリ同銀行ヘ命令書第十五條ノ旨趣ニ基キ特ニ一部ヲ設ケテ此約定書ニ記載スル預リ金取扱竝ニ紙幣消却等ノ事務ヲ處辨スルモノトス。

第十七條

日本銀行ニ於テ此約定書ニ據リ某國立銀行ノ發行紙幣消却ノ事務ヲ負擔スルニ付テハ各國立銀行ノ分ト其勘定ヲ異ニシ敢テ混淆ス可ラザルハ勿論ナリト雖ドモ、第二條、第三條及ビ第八條ニ依リ公債證書ヲ買入レ又ハ其抽籤及ビ賣拂等ノ事ニ於テハ各國立銀行トモ合同シテ之ヲ取扱ヒ別段之ガ區別ヲ立テザルモノトス。

第十八條

日本銀行ハ某國立銀行ノ發行紙幣消却ニ關スル事務ノ顛末及ビ其計算等ヲ報告スル爲メ毎半期之ガ報告表ヲ作り上半期ノ分ハ八月十五日迄下半年期ノ分ハ二月十五日迄之ヲ國立銀行ニ送付スベシ。

第十九條

某國立銀行ハ豫メ大藏卿ニ稟請シテ之ガ許可ヲ受クルニ於テハ日本銀行ニ就テ某國立銀行ノ發行紙幣消却ニ關スル帳簿書類ニ限り之ヲ査閱スルコトヲ得ベシ。

第二十條

日本銀行又ハ某國立銀行ニ於テ此約定書中明治十六年 月 日付ヲ以テ大藏卿ヨリ兩銀行ニ下付セラレタル命令書ノ旨趣ニ牴觸セザル箇條ニシテ、其細目ニ涉ルモノヲ規定若クハ改正センコトヲ要スルトキハ其實施ヨリ少クトモ一ヶ月以前ニ於テ互ニ之ヲ通知シ、兩銀行ノ協議ヲ以テ之ヲ規定若クハ改正スルヲ得ベシ。其都度之ヲ大藏卿ニ稟申シテ許可ヲ受クベキモノトス。

(第七號)

國立銀行紙幣消却方法計算表三葉 (甲號、乙號)

(略之)

歐洲諸國組合ノ數

獨逸	五千個	内 信用組合	二千二百個
		信用組合	千百四十個
奧國	千五百十四個	内 消費組合	二百七十六個
		其他ノ組合	九十八個
露國		信用組合	九百九十五個
英國	九百六十三個		

地方稅收支法改良法案

町村費制限賦課法改良之議

尾崎 二郎

地方稅收支改良法案

今般九州各縣ヲ巡回シ、各地民情ノ泰否及ビ施政ノ得失ヲ考察スルニ、當今應ニ講究改良スベキモノ一ニシテ足ラズ。其大略ハ過日供回覽候報告ニテ御承知被下候事ト奉存候。就中最モ急ニ兩卿閣下ノ御配慮ヲ願度キハ、收支組織ノ方法其宜ヲ得ザルニ在リ。其地方稅ヲ以テ支辨スベキモノ、内、宜シク國庫支辨ニ屬スベキモノ之レアリ、或ハ假令ヘ國庫支辨ニモ屬セザル一定シテ動カスベカラザル者又之アリ、現今ノ法律ニテハ是等ノ費目トイヘドモ年々地方議會

町村費制限賦課法改良之議

ノ議定ニ付セザルヲ得ズ、而シテ其議定行政上ノ不便アルトキハ即不認可權ヲ以テ議會ノ決議ヲ塗抹スルガ如キハ各縣多少アラザルコトナシ。是レ與フベカラザルモノヲ與ヘテ又之ヲ奪フガ如キ情況ニシテ、所謂泣カザル兒ヲ捉ヘテ泣カスト一般、徒ラニ人民ノ不平ヲ買フニ外ナラズ。此ノ如キハ初メヨリ與ヘザルノ優レリトセルニ若カズ。今其國庫支辨ニ屬スベキモノヲ舉レバ則左ノ如シ。

一、府縣廳舍建築修繕費

一、府縣監獄費

一、府縣土木費（但シ明治十四年前國庫下渡シニ屬スル分）

地方費中一定シテ動カスベカラザルモノヲ舉グレバ則左ノ如シ。

一、郡區吏員及戶長給料旅費

一、警察費

第一 府廳舍ハ則純然タル政體ノ官衙ニシテ中央ノ政令ヲ地方ニ施クノ出張所ナリ。然ルニ之レヲ其地方人民ノ協議負擔ニ委スルノ不適當ナルハ今更喋々ヲ要セズ。

第二 府縣監獄ハ其府縣下ニ於テ犯シタル罪囚ヲ繫留苦役スルノ所ニシテ、該地方本籍人民ノ爲メニ設ケタルモノニアラズ。凡ソ繁華ノ都會ニ在テハ其罪犯多クハ他府縣ノ寄留人ニシテ、

其本籍ノ者ハ却テ少キノ事實アリ。然ルニ今此費用ヲ一地方人民ノ負擔ニ屬スルハ甚ダ以テ穩當ナラズ。故ニ監獄費ハ各縣議會ニ於テ往々不平ヲ唱ヘ減額ヲ主張スルモノ多シ。然レドモ監獄費ノ如キハ行政ノ作用ヲ以テ伸縮スベキモノニアラズ。又地方議會ノ意向ニ由リ増減スベキモノニアラザレバ、之ヲ其議定ニ付スルノ不都合ナル今更論辯ヲ要セズ。且ツ其罪囚タル一地方ノ罪人ニアラズシテ全國ノ罪人ナリ。然レバ即一國全通ノ國稅ヨリ支辨スルコト至當ノ儀ニシテ又疑ヲ容レズ。

第三 府縣土木費、明治十四年前國庫下渡シニ屬セシ水理土功費ヲ廢セシヨリ、大河川ノ流通スル地方ニアツテハ往々其修繕ヲ怠リ、爲メニ大害ヲ醸シ、終ニハ國庫ノ費用ヲ仰グモノアリ。而シテ其入費タル未ダ大害ヲ蒙ラザル時ニ修繕スルノ費用ニ倍蓰シ、且民人ノ害ヲ蒙ルコト甚シク、隨テ國庫ノ收入ヲ減ズル等ノ例少カラズ。到底此土木費ハ舊ニ復シ國庫ヨリ支給スル方上下ノ便益タルコト疑ヲ容レズ。

今此三費目ヲ概算スルニ凡ソ左ノ如シ。

地方費中國庫支辨ニ屬スベキモノ、概算、

一、金六萬八千十六圓餘

府縣廳舍建築修繕費 但十七年度豫算

一、金二百六十八萬八千四百八十六圓

府縣監獄費 但シ同上

一、金百六十六萬五千三百六十六圓

土木費國庫下渡分

但十一、十二、十三、
三ヶ年平均

合計四百四十二萬千八百六十八圓餘

今此巨額ノ金高ヲ國庫ヨリ支辨メントスルニハ先ヅ其收入ヲ増サザルベカラズ。國庫ノ收入ヲ増スニハ新稅ヲ創設スルカ又ハ舊稅ノ率額ヲ増加スルノ二途アルノミ。然ルニ我邦現今ノ情況ニテハ舊稅ノ増加スベキモノ甚少シ、新稅ノ創設スベキモノトイヘドモ、人民ノ富源衰弊ノ折柄ナレバ能ク注意ヲ加ヘ、可成貧民ノ負荷輕ク、且勞費少ナク徵稅確實ナルモノヲ撰バザルベカラズ。今日尤モ此數個ノ理由ニ近キモノハ家屋稅ナラン。

大藏省草案家屋稅ノ概算ニ依レバ、其收入七百六十萬五千九百九十一圓餘トス。而シテ其概算法ハ全國戶數ノ三割弱ヲ免除シタルノ數ナリ。今若シ可成貧民ノ負擔ヲ輕クセン爲メニ、此免除區域ヲ擴充シ、全國戶數ノ半ヲ免除スルモノトスルモ、猶ホ五百萬圓以上ノ收入ヲ得ベシ。此金額ヲ以テ前文ノ三費額四百四十二萬千八百六十八圓餘ヲ支辨スルモ、猶ホ五十八萬圓弱ノ殘餘ヲ得ベシ。之レヲ徵稅入費ニ供スレバ餘リアラン。或ヒハ曰ク現今人民ノ衰弊ニ際シ、新タニ家屋稅ヲ創設スルハ策ノ得タルモノニアラズト、是レ又看過スベカラザルノ事情ナラズ。故ニ家屋稅ヲ創設スルト同時ニ今ノ戶數割ノ制ヲ廢スベシ、今十六年全國地方稅中戶數割ヲ合計スルニ、三百十七萬餘圓アリ（町村費ハ別ニ改良ノ方案アリ、下條ニ之レヲ陳ズベシ。故ニ

今姑ク地方稅ノミニ就テ論ズ）十七年度モ大差ナキモノトセバ、地方稅收入ノ内此金額ヲ減ズルモ向キニ列舉セル三費額即四百四十二萬餘圓ヲ國庫ヨリ下付スルトキハ、此戶數割廢止ニ由リ減ズル費額ヲ償フテ猶百二十五萬圓ノ剩餘アリ。但シ三百十七萬圓ノ戶數割ヲ廢シ、更ラニ五百萬圓ノ家屋稅ヲ課スルトキハ即人民ノ負擔百七十三萬圓ノ重キヲ加フルノ嫌ナキニアラズ。

然リトイヘドモ戶數割ヲ廢シテ家屋稅ト爲ストキハ稅率ノ確實ナル都鄙貧富等差ノ當ヲ得ル徵稅ノ容易ナル等數個ノ便益アリ、以テ百七十三萬圓ノ重加ヲ償フテ猶餘アルベシ。況ンヤ其増加スルモノハ重モニ富者ニ掛リ貧者ハ却テ輕免セラル、モノ多カラシ。故ニ家屋稅戶數割ノ利害得失ヲ左ニ條陳セン。

一、戶數割ナルモノハ所謂無形物ニ課スルモノナレバ、稅率ノ準據スベキモノナシ。從來都鄙貧富ノ差別ナク、全管内戶數平等ニ賦課スルノ習慣ナリ。故ニ僻地寒村ノ日傭稼人ニシテ他人ノ茅舍ニ棲息シ、身ニ襤褸ヲ纏フモノトイヘドモ、數十萬ノ財產ヲ有シ都會熱鬧ノ地ニ於テ大廈高樓ニ住居スル富者ト同額ノ稅ヲ拂ハザルヲ得ズ。即富者ニ輕クシテ貧者ニ重キノ結果アリ。其害一ナリ。

富者ハ其家計上些少ノ不便ヲ覺エズシテ拂フベキ稅額モ、貧者ハ千辛萬苦纔ニ能ク之ヲ

納レ、或ヒハ終リニ身代限ヲ爲スモ猶完納スル能ハズ、爲メニ無告ノ窮身ニ陥ルモノ往々是アリ。其害ニナリ。假へ幾多ノ貧民ヲシテ戸數割ノ爲メニ流難セシムルモ、猶ホ地方稅收入ノ豫算ニ、缺損金ヲ生ズレバ則再ビ之レヲ他ノ戸數ニ徵收セザルヲ得ズ。之レヲ追加戸數割ト云、其郡村吏ヲ勞スルコト容易ナラズ、其害三ナリ。之レヲ概スルニ戸數割ノ制ハ上下共ニ困難スル所ナリ、尤モ近來内務卿閣下ヨリ可成貧富等差ヲ立テ、徵收スベキ旨訓示アリ、將來幾分カ貧富輕重相轉倒スルノ弊害ヲ減少スベシトイヘドモ、元來準據スベキ秤量アルニアラズ、且今日戸數割貧富等差配當ノ法ヲ聞クニ、全管下ノ貧富ヲ秤量シテ等差ヲ立ルニアラズ、概ネ戸數割ノ總額ヲ全管下ノ戸數ニ割付、一戸平均何程ト定メ、而シテ之レヲ各郡ノ戸數ニ應ジ配當シ、各郡ニ於テハ又之レヲ該管下各戸長役場所轄内ノ戸數ニ應ジテ配當シ、各戸長役所ニ於テ初メテ各町村内各戸ノ貧富ヲ調査協議シテ差等ヲ定ムルモノナレバ、都會熱鬧ノ地ニシテ富豪軒ヲ並ブル市街モ、寒村僻地ノ村落モ、其配當ヲ受クルハ同格ノ稅率ニシテ、其貧富ノ等差ハ纔ニ一町村内ニ止マリ廣ク全管下ニ及バザレバ僻村ノ第一等ニ位スルモノト、都會ノ第一等ニ位スルモノト、其貧富ノ度自ラ相懸隔スルモ猶同額ノ稅金ヲ拂ハザルヲ得ザルノミナラズ、或ヒハ寒ニハ免除スベキ貧戶多ク、爲メニ其上等者ハ却テ都會ノ上等者ヨリ猶多額ヲ拂ハザルヲ得ザルノ情況アルベシ。故ニ

假令へ貧富何十等ニ區別シテ輕重宜ヲ得ント欲スルモ、元ト準據スベキモノナケレバ益々繁雜ニシテ益々輕重宜キヲ失スル弊アラシ。

抑戸數割ナルモノハ其何ノ時代ニ始マリシヲ聞カズ、西國未ダ此物アルヲ聞カズ、唯舊時滋賀縣下其他一二縣下ノ或ル地方ニ竈割ナルモノアルヲ聞クノミ。一變シテ戸數割ト爲リシモノナラン。之レヲ一般ニ施行シ既ニ數年ノ實驗ヲ經ルモ猶ホ未ダ以テ妥當ノ域ニ達セザルノミナラズ、益々紛雜ニ入ラストス。故ニ戸數割ノ制ハ斷ジテ之レヲ廢スベキナリ。

一、家屋稅ハ賦課スベキ財產ヲ一定シテ動カズ其利一ナリ。其持主ニ向ヒ之レヲ徵收スルモノナレバ無財產ノ僦居人ヨリ徵收スルノ困難ナシ其利二ナリ。家屋ノ大小構造ノ種類及價額ニ據テ等差ヲ立ツルモノナレバ、自ラ貧富ノ度ニ近ク課稅ノ主義ニ適ス其利三ナリ。準據スベキ稅率アリ一度勞シテ之レヲ定ムル時ハ後郡村吏ヲ勞セズ、協議評等ノ紛議ナシ其利四ナリ。家屋稅則ハ家屋ノ價格ノミナラズ土地ノ價格ヲ以テ準率ト爲ス、土地ノ價額ハ都鄙冷熱ノ度ニ應ジ高低アルモノナレバ、家屋ノ大小ハ同ジキモ都會僻地各々土地ノ貧富ニ應ジ自然ノ輕重アリ、其利五ナリ。最小家屋ヲ免除スルモノナレバ極貧者免除ノ區域判然トシ、隨テ身代限ヲ以テ取立ルノ弊ナシ其利六ナリ。有形財產ニ賦課スルモノナレバ缺損金ヲ生ズルコトハ甚ダ稀ナリ其利七ナリ。

以上陳述スルガ如ク今戸數割ヲ廢シ家屋稅ヲ與ストキハ、三弊ヲ除キ七利ヲ生ズルモノナレバ、人民負擔總額ノ上ニ於テ多少ノ増加アルモ決シテ憂フベキニアラズ。且ツ之レヲ以テ地方費目中最モ必要ノ三項ヲ削除シ、府縣會ノ範圍ヲ脫スルノ便益アリ。家屋稅斷ジテ行フベキナリ。

又郡區吏員及戶長給料旅費及警察費ノ如キハ行政上必用官吏ノ増減進退ニ關スルモノニシテ、地方議會ノ議定ヲ以テ年々増減取捨スベキモノニアラズ。故ニ此等ノ費用ハ假令ハ地方稅ヲ以テ支辨スルモノトイヘドモ其費額地租割制限以內ナルトキハ府知事縣令ニ於テ之レヲ定メ、內務大藏兩卿ノ認可ヲ得テ施行シ、議會ニハ惟之ヲ檢視ニ付シ、法律ニ違ハザル以上ハ之レヲ議セシメザルコトニ確定シ、其代リニ他ノ費目ニ至テハ充分其議決ノ權利ヲ與ヘ、府知事縣令トイヘドモ容易ニ之レヲ不認可スルヲ得ズ。萬已ヲ得ザル場合ニ於テハ一度不認可スルコトヲ得ルモ再三ニ及ブヲ得ザラシムルノ制度ヲ設ケバ、權限判然官民各々其分限內ニ在テ職務ヲ盡シ、彼此撞着上下乖離スルノ弊自カラ少カラン。

區町村費制限改良之義

町村費ハ近來年々増加シ、或ハ其金額國稅ノ高ヨリ多キ町村アリ、終ニハ人民ノ負擔ニ堪ヘズ、爲メニ窮民ヲ釀成シ生産力ヲ減縮スルノ恐レアルニ至ル、是レ兩卿閣下ノ既ニ熟知セラルル所ナレバ、今更喋々ヲ要セズ。其町村費ノ斯ク年々増加スル所以ヲ釋スルニ、一面ニハ之レヲ賦課スルノ制限ナク、一面ニハ行政教育衛生等凡百ノ事業年々逐テ増加シ、其費用ハ悉ク町村ノ負擔ニ歸ス、其勢然ラザルヲ得ザルナリ。此自然ノ増進ヲ防遏セン爲メ、本年第二十五號布告ヲ以テ町村費ノ地租割ニ係ルモノヲ制限セラレタリ。是レ則町村費制限ノ第一着手ニシテ、幾分カ其效アルベシトイヘドモ、未ダ以テ充分ノ好結果ヲ得ベカラズ。如何トナレバ今般ノ改革ハ未ダ以テ地租割制限ヨリ生ズル缺額ヲ補充スルニ足ラズ必ラズ他ニ増加スルノ結果ヲ見ルベシ。然ルニ町村費賦課ノ科目中地租割ヲ除ケバ只戸數割アルノミ（此他營業割等ハ小額ニシテ數フルニ足ラズ僻地村ニ在テハ營業割ノ課スベキモノナラン）故ニ今般地租割制限ノ結果ハ必ラズ戸數別ノ増加在ルベシ、而シテ最モ之ニ苦シムモノハ即僻地寒村ノ人民ニ在ルベシ。戸數割ノ弊害ハ前地方稅ノ部ニ於テ既ニ縷述スル所ノ外、町村費ノ戸數割ニ至テハ益々其不當弊害ノ甚ダシキモノヲ發見セリ。

抑町村費戸數割ノ不倫ナル、各地差異ノ甚ダシキ一聞人ヲシテ驚嘆セシムルモノアリ。今九州各地町村費戸數割ノ差異甚ダシキモノヲ舉グレバ、甲町村ニ在テハ一戸十四五錢乃至二三

十錢ノ所アリ、乙ニ在テハ一戸三圓内外ニ上ル所アリ。故ニ乙ノ人民ハ甲ノ人民ヨリ十倍乃至二十倍ノ重税ヲ拂ハザルヲ得ズ、其町村費ト云フモ其處分上ニ於テハ租税ト一般ナレバ、彼ノ賦ニ厚薄ノ弊ナク、民ニ勞逸ノ偏ナカラシメントノ 聖勅ニ悖ル無キヲ得ンヤ。而シテ其重キモノハ僻地寒村ノ貧民ニ係リ、輕キモノハ却テ市街ノ富民ニ係ル。斯クノ如ク輕重轉倒奇異ノ現象ヲ生ズル所以ハ他ナシ、一方ニハ萬般ノ政治皆畫一主義ヲ旨トシ、都鄙貧富ノ差別ヲ見ズ、一方ニハ費用ノ制限アルナリ。唯一直線ニ萬般ノ整頓ヲ促スノ致ス所ナリ。就中其尤モ著シキモノハ教育費ニ在リ、從來ノ教育會及文部省時々ノ令達ニ依レバ、如何ナル僻地寒村トイヘドモ合格ノ學校ヲ建設シ維持セザルベカラズ。其教員ハ即縣會ノ證狀ヲ得タル准訓導以上ノ資格ヲ有スル者ニ限ルノ制ナリ。此教員ノ給料ハ一ヶ月五圓以上トス。故ニ僻村ニ在テハ町村費ノ額往々國稅ヨリ多ク、其教育費ハ全額ノ三分二以上ニ上ル所アリ。今其一例ヲ舉グレバ長崎縣下對馬國下縣郡大船越村外九ヶ村ノ村費、明治十七年度ノ豫算額金七百六十八圓餘、內教育費五百十圓餘、則全額三分二強ナリ。此戸數三百餘戸一戸ノ戸數割二圓五十錢、之レニ地方稅ノ戸數割四十三錢ヲ加フレバ殆ンド三圓ナリ。而シテ其國稅地租額ヲ尋ヌレバ、則六百六十圓餘、村費ノ地租ヨリ多キコト一割五分ノ上ニ在リ、斯クノ如ク村費ノ多額ヲ要スル所以ハ主トシテ學校ノ費用多キニ因ル、此十ヶ村ハ一戸長役場ノ所管ニ屬ストイヘドモ、皆山間谿谷ニ

散在シ、各村互ニ相懸隔シ加フルニ山海ノ險アリ、故ニ兒童ノ爲メニハ僅カニ十二三戸ノ村落トイヘドモ皆一校ヲ設ケザルヲ得ズ。學校アレバ則資格ヲ備ヘタル教員ヲ置カザルヲ得ズ、一校ノ費平均五十圓トスルモ十校ノ費合シテ五百圓ニ上ルナリ。又同郡和指村々費戸數割ハ一戸二圓九十錢、地方稅ヲ合スレバ三圓三十餘錢ナリ。其他僻村其例少カラズ、同國上縣郡ニ在テハ猶重キ所アリト云フ、然ルニ此等村民生活ノ情態ヲ見ルニ、茅舍四柱床板ノミニシテ藺疊ヲ敷クモノハ甚稀ナリ。身ニハ襤褸ヲ纏ヒ、糲飯甘藷ノ外口ニ入ル能ハズ三圓ノ金ハ以テ一家五口數月ヲ支ユルニ足ルベシ。今之レヲ舉テ學校ニ致サシム、其慘實ニ見ルニ忍ビズ。之レニ反シ市街人家稠密ノ町村ハ其戸數百千軒アリトイヘドモ一枚ヲ建設シテ足レリ。教員授業生等ヲ雇ヒ、其入費ハ向キノ寒村一校ノ入費ニ倍蕪シ、凡ソ二百圓トスルモ全町村八百戸ニ配當スレバ則僅ニ二十五錢ト爲ル（其積金ノ利子及釀金等ヲ以テ學校ヲ支持シ村費ヲ要セザル所ハ姑ク論ゼズ）且ツ市街ニ在テハ多少商賣アリ、營業割ヲ課シ、又富豪ノ義捐等アリ、猶以テ此上ニモ輕減スベキ方法アリ。僻村ニ在テハ地租割戸數ノ外賦課スベキモノナシ。是レ則益々寒村ノ貧民ニ重クシテ都會ノ富民ニ輕クナル所以ナリ。

今此偏重不當ナル賦課ヲ廢シ、僻地ノ貧民ヲシテ肩ヲ息マシメント欲セバ、宜ク先ヅ町村費全體ノ制限ヲ定メ、本年第二十五號布告ノ精神ヲシテ貫徹セシムベシ。町村費全體ノ制限ヲ定

メント欲セバ今ノ戸數割ヲ廢シ、家屋割ヲ興スニ若クハナシ。蓋シ廿五號布告ハ此戸數割改正ヲ俟テ始メテ完成スルモノナリ。

家屋割ノ法ハ則家屋税ノ制ニ准シ、其税額ヲ以テ制限ト爲シ、家屋税徴收ノ際同時ニ之レヲ徴收スルコトヲ得セシメバ、一面、以テ年々戸數割ノ貧富ヲ等差スルノ勞ナク、又一面ハ之レヲ各別ニ徴收スルノ煩ヲ省キ、人民ヲシテ町村費ノ負擔ヲ感ゼザラシム。且家屋税ハ都鄙及家屋構造ヲ區別シ、細カニ之レガ等級ヲ定メ、最モ小屋ハ免除スルノ法ナレバ、彼ノ戸數割ノ如ク貧富輕重相轉倒スルノ弊ナク、極貧者免除ノ區域判然其等級ニ至テハ家屋税調査ノ時既ニ之ヲ區別シタレバ唯之レニ準據スルノミニシテ別ニ手數ヲ勞セズ、是レ一舉數利ヲ得ルナリ。

戸數割家屋ノ利害ヲ分析對照シテ參覽ニ便ニスルコト左ノ如シ(但シ家屋税法前文ノ如ク施行セラル、モノト假定シテ之レニ標準ヲ取レリ。即チ、

戸數割の弊

一、無形物ニ課スルモノナレバ一定ノ準據ナ

ク年々其ノ等差ヲ改正セザルヲ得ズ、繁雜ニシテ且ツ當ヲ得ルコト甚ダ難ク常ニ紛議ヲ免カレズ。

一、都鄙貧富輕重相轉倒シテ賦税ノ主義ニ反シ貧民其賦課ニ堪ヘズ、富却富民却テ僥倖スルノ結果アリ。

一、無産ノ僦居人ニ賦課スル故ニ往々身代限ヲ爲スモ猶完納スル能ハズ、爲メニ缺損金ヲ生ジ追加徴收等ノ弊アリ。

一、極貧者ハ免除スルトスルモ極貧非極貧ノ區別判然セズ、往々紛議ヲ生ジ村吏ノ苦ム所ナリ

一、地方税ヲ課シ又町村費ヲ課シ又追加徴收ヲ課シ民其何ノ爲メタルヲ解スルモノ少

町村費制限賦課法改良之議

家屋割の利

一、一定不動ノモノニシテ其準據スベキ税率

既ニ判然當ヲ得ルコト近ク隨テ各村吏ノ繁雜ヲ省キ人民ノ紛議少シ。

一、都鄙ノ冷熱ニヨリ自然ニ等差ヲ立ツルモノナレバ、貧富ノ度ニ應ジ自カラ輕重ノ差ヲ生ジ、賦課ノ主義ニ適シ富民僥倖、貧民却テ重苛ニ苦ムノ弊ナシ。

一、家屋ニ課スルモノナレバ、無産ノ僦居人ニ課スルモノ弊ナシ。隨テ身代限追加徴收等ノ弊少ナシ。

一、家屋最小幾坪以下ヲ免除スルモノト決定スレバ、免非免ノ區別判然敢テ紛議ヲ唱フルモノナシ。

一、國稅徴收ニ際シ其何割ヲ合セテ課スルモノナレバ、吏民共ニ簡易ニシテ事務上ノ整

ク、吏民共ニ繁苛ニ堪ヘズ、爲メニ村費ノ決算等ニ至リ帳簿ヲ整頓スル能ハズ、隨テ那移出納ノ弊ヲ醸シ、村吏ノ事務上不都合ヲ生出ズルモノ往々人レアリ。

頓ヲ容易ナラシメ隨テ諸般ノ事務ニモ支障ヲ生ズルコト少ナカラシ。但シ貧民ニ至テハ、一時ニ出スノ困難ナルモノアラシ。是等ハ村内ノ協議ニ由リ兩三度ニ分割シテ出サシムルモ妨ゲナシ、然レドモ此法ニ依レバ貧富輕重宜キヲ得、從前ノコトガ特ニ貧民ニ重キノ弊ナケレバ分割セザルモ格別ノ困難ナカルベシ。

今全國區町村費ニ係ル戸數割家屋稅ヲ調査スルニ、明治十五年度ノ精算五百十五萬七千餘圓アリ、今新タニ興サントスル家屋稅ノ概算ヲ五百萬圓トシ、此額迄ヲ徵收スル事トスレバ則僅カニ十五萬圓ノ不足ヲ生ズベシ。然レドモ家屋稅概算ハ可成少額ニ精算スレバ、實際ニ當テハ概算ヨリ上ルコトアルモ下ルコト無カルベシ。但之レニ因テ僻地寒村ノ從前非常ニ重キ村落ハ大イニ輕減シ、人家稠密ノ町村ハ却テ増加スルノ結果アルベシ。是レ則輕重其宜キヲ得テ我望ム所ノ目的ヲ達スルナリ。故ニ市街及人家稠密ノ町村ニ在テハ制限内ノ家屋制ヲ以テ其町村内

ノ諸費ヲ支辨シテ猶餘剩アルベシ。僻地寒村人烟稀疎ノ郷ニ在テハ、家屋割甚僅少ナレバ、或ハ其村落共同入費ニ不足スルノ憂アラン。蓋シ從來ノ畫一主義ヲ弛メ、寒村ハ寒村相當ノ處置ヲ爲サシメバ、敢テ其必用費ニ不足スルコト無カルベシ。必用費トハ則戸長役場ノ費用ナリ。戸長ノ給料ハ既ニ地方稅ヨリ支給スルコトナレバ、只諸雇員給料薪炭筆紙墨費ノ類ノミ、雇員ハ其村人ヲ用ユレバ多額ノ給料ヲ要セズ、米麥等ヲ給シ又里道修繕用水工事業ハ大抵人夫實役ヲ爲サシメテ事辨スベシ。最モ其影響ヲ蒙ルモノハ學校ニ在リ、蓋シ是等ノ僻地ニ在テハ別ニ學校ヲ設クルニ及バズ、舊時ノ如ク寺院ノ僧侶又ハ戸長筆生等ニ就キ田舎ニ必用ナル算筆ヲ習ハシムル位ノ事ニテ可ナリ。

若シ又僻陋人家稀少ノ村落ニ在テハ、家屋割制限内ヲ以テ實際要費ヲ辨ズル能ハザルモノアレバ、此等ノ村落ニ限リ、其向キノ地方稅ノ有舍（地方稅、戸數割三百十五萬圓餘ノ代リニ國庫ヨリ四百四十二萬餘圓ヲ給スレバ則百二十七萬圓ノ剩餘ヲ生ズベシ）ヲ以テ補助スル等ノ制ヲ設クルモノ亦可ナラン。

以上陳述スルトコロハ地方稅町村費ノ不經紛雜ヲ整頓シ、併セテ偏重ノ賦課法ヲ改良シ、貧富輕重各ハ其宜ヲ得セシメント欲スルニアリ。三良以爲ク方今地方政治ノ改良スベキモノ數アリトイヘドモ先ヅコノ經濟改良ヲ以テ第一着手ト爲スベシ。就中町村ノ賦稅法其宜キヲ得ザレ

バ百般ノ事業之ニ撞着シテ行ハルベカラズ。其現行法ノ弊害既ニ斯ノ如ク甚シキモノトセバ、之レヲ改良スルハ蓋シ方今内治ノ大急務ナリ。伏テ願フハ兩卿閣下其事實ヲ徴シ、若シ三良ノ言虚ナラバ妄言ノ罪ヲ正シ、果シテ真ナラバ速カニ採撰施行アランコトヲ熱望懇到ニ勝ヘズ。

明治十八年十一月

參事院議官 尾崎三良 謹白

内務卿伯爵 山縣有朋 殿
大藏卿伯爵 松方正義 殿

衆議院議員提出海關稅法案

海關稅法案

右衆議院規則第八十六條ニ依リ提出候也

明治二十四年三月 日

發議者

駒林廣運 河野廣中 松田正久 新井章吾 鈴木昌司 奈須川光寶

衆議院議員提出海關稅法案

野	櫻	影	長	河	鈴	伊	丸	改	小	高	鹽	工	森	本
口	井	山	谷	島	木	藤	山	野	野	津	田	藤	東	間
袈	德	秀	川	醇	萬	大	督	耕	賴	仲	奧	行	一	直
	太	樹	泰	郎	次	八	永	三	永	郎	造	幹	郎	

海關稅法案

衆議院議員提出海關稅法案

淺	江	山	東	豐	山	江	樺	伊	基	二	佐
香	橋	口	尾	田	田	原	山	藤	俊	位	野
克	七	左	平	文	泰	素	一	一	良	景	佐
孝	郎	郎	郎	三	造	六	郎	郎	良	暢	助

第一條 外國ヨリ輸入スル貨物ハ左ノ輸入税目ニ從ヒ輸入税ヲ納ムベシ。
輸入税目(別項ノ通り)

第二條 輸入税目中ニ貨物價額ト稱スルモノハ其貨物ノ仕入元、代價、荷造費、其仕入ヨリ輸入港へ着スルマデノ運搬費及其他ニ要シタル諸費ヲ合セタル金額ヲ云フ。

第三條 列國ニ輸出スル貨物ニ就キ現今徴收、輸出税ハ此法律施行ノ日ヨリ廢ス。

第四條 此法律ノ施行期日更ラニ公布ス。

輸入税目

左ニ掲グル貨物ハ其價額百分ノ五

- 一、穀物及植物ノ種實
- 一、菜類
- 一、苗類(草木共)
- 一、菓類
- 一、他ニ掲ゲザル草木苗及其部分
- 一、食鹽

- 一、鐵
- 一、金屬塊
- 一、安質母尼
- 一、眞鍮
- 一、日耳曼銀
- 一、鉛
- 一、水銀
- 一、白銅
- 一、鐵
- 一、錫
- 一、亞鉛
- 一、其他生金屬
- 一、石油
- 一、生綿(種子ノ混ジタル)
- 一、屑綿絲

- 一、羊毛
- 一、生糸、繭、真綿類
- 一、苧麻類
- 一、禽獸
- 一、粘土
- 一、石炭
- 一、コルク
- 一、乾鰯
- 一、海羅
- 一、生護謨
- 一、塞子及塞子甲材
- 一、油糟
- 一、生肉生魚
- 一、他ニ掲ゲザル物品ニシテ生産ノ儘人工ヲ加ヘザルモノ

左ニ掲グル貨物ハ其價額百分ノ十

- 一、乾麵包
- 一、乳油
- 一、乾酪
- 一、珈琲
- 一、生卵
- 一、穀類ノ粉及種實粉
- 一、乳膏及乳粉
- 一、ハム及ベーコン
- 一、礦水
- 一、鹹魚鹹肉
- 一、茶
- 一、藁紙(表紙甲等ノ)
- 一、石炭酸
- 一、撒里失爾酸

衆議院議員提出海關稅法案

- 一、酒石酸
- 一、明礬
- 一、晒白粉
- 一、龍腦
- 一、聖古尼涅
- 一、人蔘
- 一、阿膠
- 一、辰砂
- 一、佩里設林
- 一、亞拉昆護漠
- 一、安息香
- 一、麒麟香
- 一、乳香
- 一、火藥
- 一、莫兒比涅

- 一、赤磷
- 一、貌魯密度剝篤亞斯
- 一、沃度剝亞斯
- 一、規尼涅
- 一、硝石
- 一、礬篤寧
- 一、重碳酸曹達
- 一、施布失那
- 一、ダイナマイド
- 一、他ニ掲ゲザル藥材
- 一、アニリンタイス
- 一、紺青
- 一、洋紅
- 一、呀嚨蟲
- 一、花綠青

- 一、雌黃
- 一、鉛粉
- 一、丹
- 一、黃丹
- 一、ログード越幾斯
- 一、スマルト及コバルト
- 一、姜黃
- 一、群青
- 一、洋漆
- 一、綠青
- 一、朱
- 一、碗朱
- 一、他ニ掲ゲザル染料彩料類
- 一、屑玻璃及粉玻璃
- 一、羽

- 一、皮、毛皮
- 一、毛（羊毛ヲ除ク）髮毛
- 一、骨
- 一、角
- 一、蹄
- 一、牙
- 一、甲
- 一、貝
- 一、故鐵
- 一、條鐵
- 一、縮鐵及蹄鐵
- 一、故鐵線索及熟鐵
- 一、葉鐵
- 一、故真鍮
- 一、故銅

衆議院議員提出海關稅法案

- 一、故亞鉛
- 一、金屬板
- 一、金屬ノ竿及棒
- 一、植物ヨリ取リタル油及蠟
- 一、動物ノ脂肪及油
- 一、經綿
- 一、竹材、木材板及藤
- 一、白堊
- 一、板護謨
- 一、楨肌
- 一、黒鉛
- 一、バッテリー
- 一、海綿
- 一、石材及砥石類
- 一、タール及ビツチ

- 一、磚瓦諸類
- 一、船索
- 一、フェルト
- 一、包席
- 一、洗濯石鹼
- 一、茶、藍
- 一、農具及工匠具類
- 一、漁具
- 一、他ニ掲ゲザル物品ニシテ人工ヲ加ヘタルモ製造又ハ彫刻等ノ手ヲ經ザルモノ

左ニ掲グル貨物ハ其價額百分ノ十五

- 一、洋紙
- 一、唐紙
- 一、靴底皮
- 一、角牙皮毛、甲蹄具骨ノ類ニシテ未タ器具ニ製セザルモノ尙(ナメシ)又ハ(シカキ)等ノ

工ヲ施シモノ

- 一、金屬ノ釘、螺旋釘、筒管、線、線索、錨、及錨鍵
- 一、坭塼
- 一、セメント
- 一、赤砂糖
- 一、綿織糸
- 一、毛織糸
- 一、麻織糸

左ニ掲グル貨物ハ其價額百分ノ二十

- 一、小銃
- 一、カルトリツチ
- 一、其他兵器
- 一、權衡類
- 一、晴雨儀

- 一、乗車及車具類
- 一、鐵道乗客車及同部分類
- 一、鐵道馬車及同部分類
- 一、貨車
- 一、刃物類
- 一、消防器及同部分類
- 一、獵銃及同付屬品類
- 一、化學器
- 一、理學器
- 一、寫真器
- 一、外科器
- 一、測量器
- 一、製圖器
- 一、他ノ諸學術器類
- 一、寫真器及同部分類

- 一、鑛山器及同部分品類
- 一、製紙器及同部分品類
- 一、印刷器及同部分品類
- 一、鋸木機及同部分品類
- 一、縫衣機及同部分品類
- 一、紡績機及同部分品類
- 一、電信機及同部分品類
- 一、織布機及同部分品類
- 一、唧筒機及同部分品類
- 一、汽罐氣機及同部分品類
- 一、其他諸器械類
- 一、鍼盤
- 一、顯微鏡
- 一、双眼鏡
- 一、眼鏡

- 一、望遠鏡
- 一、驗溫器
- 一、汽船及風帆船
- 一、貨幣匣
- 一、置爐壁爐及附屬品類
- 一、金屬ノ器類
- 一、金屬ノ箔金屬ノ類
- 一、臆玻璃鏡玻璃片
- 一、麝香
- 一、製藥諸種
- 一、珊瑚樹
- 一、護膜器類
- 一、糖草諸種
- 一、傘及同部分品類
- 一、旅櫃

左ニ掲グル貨物ハ其價額百分ノ二十五

- 一、鉛筆
- 一、印刷墨
- 一、諸般ノ文具類
- 一、刷毛類
- 一、靴類
- 一、袴鈞
- 一、鈕鉛類
- 一、帽子
- 一、手袋
- 一、家具類
- 一、ランプ及同部分品類
- 一、皮革器類
- 一、マツチ
- 一、畫類畫甲色油

- 一、磁器及陶器類
- 一、化粧石鹼
- 一、木製器類
- 一、角、牙、毛、皮甲蹄、具骨、ノ類ニテ製シタル器具
- 一、玻璃鏡類
- 一、玻璃珠
- 一、金銀器類
- 一、饌器及厨具類
- 一、白砂糖、氷砂糖、及精製砂糖
- 一、縫糸組糸
- 一、綿織物
- 一、毛織物
- 一、麻織物
- 一、交織物
- 一、其他ノ諸織物

一、織物ヲ以テ製シタルモノ

一、編物

一、衣服諸種

一、雨衣

一、他ニ掲ゲサル諸製造物

左ニ掲グル貨物ハ其價額百分ノ三十

一、アルコール

一、葉多葉粉類

一、樂器及部分器類

一、時計類

左ニ掲グル貨物ハ其價額百分ノ三十五

一、玻璃器類

一、金銀器類

一、珊瑚珠

一、珠玉及金銀細貨類

一、香水及香油

一、骨牌類

一、造花類

一、煙火類

一、衝球器及付屬品類

一、製造多葉粉類

一、酒類

左ニ掲グルモノハ無稅

一、書籍地圖及海圖

一、新聞紙

一、定時刊行諸雜誌

一、金銀

衆議院議員提出海關稅法案

- 一、貨幣
- 一、農甲種子
- 一、苗
- 一、軍甲船舶
- 一、内國産ノ貨物ヲ外國ヨリ積戻リ左ノ事項ヲ具備スル者ハ
 - 一、輸出ノ時ノ性質若クハ形狀ヲ變ゼザル事
 - 二、輸出ノ日ヨリ滿五ヶ年ヲ經過セザルコト
 - 三、輸出免狀ヲ付シタルコト

左ニ掲グル貨物ハ其輸入ヲ禁ズ

- 一、阿片
- 一、風俗ヲ紊亂スベキ繪畫及製造品

海關稅法案祭議ノ理由

現今我稅關ニ於テ徵收スルトコロノ輸出入稅ハ各交際國トノ條約ニ依リテ之レヲ徵收シ、我帝國ニハ未ダ特立ノ海關稅法ナルモノアラザルナリ。自今政府ハ交際國ニ對スル現今條約ノ改正ニ從事スルト聞ク、而シテ議會開會ノ前己ニ法律第八十號稅關法及勅令第三百三號稅關規則ヲ發布シタリト雖ドモ、未ダ海關稅法ヲ公布セズ。顧フニ政府ハ海關ニ關スル稅目稅率ヲ改正條約中ニ包含セシニ依テ以テ關稅ヲ徵收セントスルモノナルヤ或ヒハ現今條約中ノ稅目稅率ヲ繼續スル意ナルヤ未ダ知ルベカラザルナリ。

抑條約ハ遵守セザルベカラズト雖ドモ、租稅ノ目及其率ハ憲法第六十二條第三十七條ニ依リ帝國議會ノ協贊ヲ經テ法律ヲ以テ之レヲ定ムルヲ要ス。然ラバ則チ一面ニハ已ニ遵守セザルベカラザルモノトナリ、一面ニハ更ラニ議會ノ協贊ヲ經ザルベカラズ。其間豈ニ極大衝突ノ恐ナキヲ得ンヤ。且ツ夫々條約ニ於テ一旦稅率稅目ヲ定メタル上ハ、他日假令何等ノ不便ヲ見ルモ又條約ヲ改ムルニアラザレバ如何トモスルヲ得ズ。我帝國ノ不利不體面實ニ之ヨリ大ナルハナカルベキナリ。是レ海關稅目、稅率ヲ條約中ニ包含シテ條約改良ヲ遂ゲントスルノ非ナル處ナリ。

若シ又現行條約稅目稅率ヲ繼續センカ、是レ實ニ我帝國ノ財産上經濟上ニ名狀スベカラザル妨害アリ。故ニ我忠誠ナル臣民四千萬人之ガ改正ニ望ミテ得ル能ハザル茲ニ二十年、實ニ現行

税目税率ノ繼續ハ帝國ノ輿論ガ決シテ容ル、能ハザル處ナリ。

或ハ去ル明治十二年北米合衆國ト訂結セシモノ、如ク、海關稅法ニ關スル立法權及其行政權ハ我國權タルコト各交際國ニ於テ之ヲ認定シ、然ル後ニアラザレバ則チ我海關稅法ヲ制定スベカラズト爲スモノアランカ、是レ殆ンド我獨立國タルヲ自忘スルナリ。元來條約文中海關稅法ノ制定及施行ニ關シテハ可成一章ニモ之ヲ掲載セザルヲ可トスルナリ。認不認ヲ言ハザレバ誰カ又我帝國最大王權ノ一ナルヲ疑フモノアランヤ。而シテ今ニシテ海關稅法ヲ設ケザレバ一旦條約改正成ルノ日、海關稅ハ將タ何ニ由テ之レヲ徵收セントスルカ。且ツ今日之ヲ設クルモ直チニ之レヲ執行セザレバ現行條約ニハ一切觸ル、コトナキナリ。之レニ反シテ若シ海關稅法ナキコト今日ノ如クナラシメバ、外國政府ガ再ビ之ヲ條約書中ニ掲載セントスルハ當ニ其然ルベキ處ナルベシ。

是故ニ海關稅法ハ宜シク早ク之レヲ制定シ、其施行期日ノ如キハ改正條約實施ノ時ヲ期シテ更ラニ之レヲ公布スルモノナレバ、條約改正成ルノ日ハ何等ノ稅法ヲ遵守スベキヤヲ我帝國ノ臣民及帝國ニ貿易ノ關係ヲ有スル外國官民ニ知了セシムベキナリ。

發議法案中所掲ノ稅目税率ノ如キハ我國情ニ照シテ輕重ヲ商量シタルモノナリ。要スルニ我工業ヲ保全獎勵スルト我國庫ノ歲入増益トヲ得ルニ出デザルハナシ。

普日稅則ノ比較並ニ日本稅制ノ

改正案

普國ハ人口二千七百二十七萬九千百一十一ニシテ、面積三千四百八十二萬七千五百六十六「ヘクタール」、即チ三千五百一十一萬四千八百十五町アリ。日本ハ人口三千六百萬ニシテ、面積三千八百六十六萬三千七百八十八町、即チ三千八百三十四萬二千八百一十「ヘクタール」アリ。由之觀之、普國ハ日本ノ人口凡ソ四分ノ三ヲ有スルモノニシテ、日本ノ人口ヨリ寡キコト四分ノ一ナリ。又普國ノ面積ハ日本ニ比スレバ凡ソ十分一狹小ニシテ、凡ソ日本面積十分ノ九ヲ有ス。其稅額及種類ヲ舉グレバ大約左ノ如シ。

第一、直稅

(イ)收入等級稅單ニ等級稅ト稱スルモノト其種類ヲ同フス、唯慣例ニ依テ區別ヲ立ルノミ、本稅ハ八百五十圓以上ノ收入アル者ニ賦課スルモノニシテ、其歲入高七百四十四萬三千七百五十五圓アリ、八百五十圓未滿ハ等級稅ニ屬ス、其收入高六百三十萬八千二百二十五

圓アリ。

前年度ノ收入等級稅及等級稅ハ全體千八百八十七萬九千五百五十五圓ノ豫算ナレドモ、最下等々級ノ五段迄ヲ五ヶ月分ノ稅額五百十二萬七千五百五十五圓ヲ免ジタルヲ以テ、千三百七十五萬千八百八十圓ノ高ニ減ズ。

(ロ)地租 千三萬八千七百五十五圓

(ハ)家屋稅 七百十萬圓

(ニ)營業稅 四百六十七萬九千二百五十圓

外ニ鐵道收入 六十五萬四千三百圓

總計 三千六百二十二萬四千八百八十五圓

右ノ總計ニ前年度ノ免稅額五百十二萬七千五百五十五圓ヲ加フルトキハ、前年度ノ普國直稅收入額ハ四千三百三十四萬四千二百六十圓ナリ。

第二 間稅

(イ) 砂糖稅及砂糖輸入稅 一千二十九萬七千八百六十四圓

(ロ) 煙草稅及煙草輸入稅 四百九十一萬二千四百圓

(ハ) 火酒稅及火酒輸入稅 八百六十六萬一千百十七圓

(ニ) 麥酒稅及麥酒輸入稅 三百八十八萬七千二百七十三圓

(ホ) 葡萄酒稅及菓酒輸入稅 百九十七萬七千七百三十五圓

(ヘ) 珈琲ノ輸入稅 六百四十七萬六千七百八十八圓

(ト) 鹽稅及鹽輸入稅 六百三十四萬二千三百九十三圓

(チ) 雜種輸入稅 千五百二十萬八千四百圓

(リ) 爲換印紙稅並カルタ印稅 百十五萬六千三百六十二圓

(ヌ) 證券印紙稅 四百萬圓

(ル) 遺物相續稅 百三十二萬五千圓

(オ) 橋、渡船場、港、運河、藏敷、積荷ニ入用ノ機械等ノ諸稅 五十九萬二千五百圓

(ワ) 訴訟用印紙料 千百六十二萬五千圓

總計 七千六百四十六萬三千七百七十六圓

右ノ總計三千六百二十二萬四千八百八十五圓ヲ合スルトキハ、一萬千二百六十八萬四千五百六十一圓ナリ。

右ノ外直稅又ハ間稅ノ部ニ屬スル收入アリト雖ドモ、繁雜ニ涉ルノ恐アルト、收入額ノ僅少ナルトヲ以テ之レヲ省ク、而テ以上、一ヨリ十七マデノ說明ヲ左ニ記述セントス

普日稅則ノ比較並ニ日本稅制ノ改正案

第一 收入等級稅及等級稅

凡ソ普國ノ住民即臣民ナル者ハ收入等級稅及等級稅則ニ從ヒ各々其收入高ニ應ジテ租稅ヲ納ムルノ義務アリ。八百五十萬圓以上ノ收入者ハ其百分ノ三、八百五十圓未滿ノ收入者ハ各其等級ニ準ジ、右ヨリ幾分ヲ減少シタル稅額ヲ納ムルノ義務アリ。百五圓未滿ノ收入ハ之ヲ免稅トス。百五圓以上八百五十圓以上ハ收入等級稅ノ部ニ屬ス、而テ其收入ノ如何ナル事業ニ原因スルカハ措テ之レヲ問ズ、前年度ノ豫算ニ依ルニ右二種ノ收入稅額ハ千三百七十五萬壹千八百八十圓ニシテ、之レヲ地租ニ比スレバ三百乃至四百萬圓ノ多額ヲ有セリ。千六百七十八年ニ於テハ普國人口ノ總收入七十八億九百十萬「マルク」即チ十九億五千二百二十七萬五千圓ノ豫算ナリキ。之ヲ人口ニ割付スルトキハ、一人ニ付キ平均三百八「マルク」ノ收入アリ。而シテ千八百七十八年統計院ノ調査ニ因ルニ、普國ニ於テ一家ノ生計ヲ立ルニハ九百二「マルク」即二百二十五圓ノ入費ヲ要スト、又普國人民ノ收入高ハ千八百七十八年前トイヘドモ大差ナシ。七十八年ノ統計ニ依レバ、平均二百二十五圓ノ收入アル者千十六萬千六百十六人ニシテ、平均二百二十五圓以上ノ收入ヲ以テ一家ヲ立ル者ハ、百四十萬六千二百四十七人ナリト。由之觀之、普國人民中、二百二十五圓以下ノ收入ヲ以テ家計ヲ立ル者百分ノ八十七乃至八十八ニ居リ、三百二十五圓以上ノ收入者ハ、僅カニ百分ノ十二乃至十三ニ止マレ

リ。

第二 地 租

地租ハ千八百六十一年五月二十一日ノ布告ニ基キ、土地ヨリ收入スル純益ヨリ其何分ヲ納ムルモノトス。地租ヲ納ムル者ハ畑所有者ニ限ラズ森林、牧場、草野等ノ所有者モ亦納租セザルベカラズ。地租收入額ハ千八百六十一年五月二十一日ノ布告ヲ以テ七百五十萬圓ト確定セラレタリ。當時地租ノ平均高ハ一「ヘクタール」ニ付キ二十七錢ナリ。地租ハ純益高百分ノ九、五七郡即チ凡ソ地價二百分ノ一ヲ納ムルモノトス。元來地租ハ純利益高ヲ標準トシテ、其幾分ヲ減少シ、之レヲ正當ノ純益ト看做シテ賦課セシモノナリシ。然ルニ普國ニ於テハ土地ノ純益漸々騰貴シ、今日ニ至テハ地租ハ土耕ノ純益百分ノ四乃至六、即チ凡ソ地價四百分一ノ割合ニナレリ。土地ノ純益トハ耕作費其他必要ノ諸雜費ヲ收入額中ヨリ引出シタル其殘余ヲ云フ。千八百六十一年ニ於テ確定シタル所ノ地租收入ハ七百五十萬圓ナリシニ、今日ニ至テハ其高千三百七十五萬千八百八十圓トナレリ。是レ普國ノ千八百六十六年隣國ト戰端ヲ開キ、結局敵地ヲ押領シテ以テ其境域ヲ擴充シタルニ因レリ。以上述ルガ如ク土地ノ收入ハ次第ニ騰貴スルト雖ドモ、地租ハ今日迄未ダ改正ナシ。然ルニ尙ホ種々ノ議論アリ、云ク、抑々地租ハ財産及工業ニ收入シタル資本稅ニ比スレバ其賦課重シト云フベシト、是ニ於テ一

ツハ之レヲ減少セシト云ヒ、一ツハ全ク之レヲ町村ニ委托シテ町村費ニ當ント唱フルニ至ル。普國ニ於テハ法律上ノ免租ヲ除クノ外ハ總テ納租義務ヲ負ビザル地主ナシ。法律上免租ニ屬スルモノハ官有地其他府縣郡區町村有ノ土地ニシテ、公共ノ用ニ供スル土地、橋、土築、道路、鐵道、運河等ナリ。

第二 家屋稅

家屋稅ハ地租ノ一種類ニシテ、家屋中、庭及庭園等ニ賦課スルモノナリ。本稅ハ千八百六十年五月二十一日布告セラレタリ。法律上免稅ニ屬スルモノニアラザルヨリハ、普國中總テ納稅セザル家屋ナシ。其法律上ニ於テ免稅ニ係ルモノハ、府、縣、郡、區、町、村ノ有建造物ニシテ單ニ公用ニ當テタルモノ、其他大學校、普通教育學校、寺院、說教場、養育院、病院、懲治檻、集治檻、農家ノ納屋及牛小屋等ナリ家屋稅ハ家屋一ケ年ノ需用價格ニ因テ賦課セラル。住家商店等ハ百分ノ四、工業ノミニ使用スル建造物即諸品ノ製造所、煉瓦、陶器酒造、鍛冶、及鑛鑛、其他蒸汽水車、及風車等ノ諸製造所ニ總テ百分ノ二、貸家ハ一ケ年ノ平均收入高ニ應ジテ納稅額ヲ確定ス。今茲ニ一軒ノ需用價格ヲ賣買價百分ノ四ト假定セバ、家屋稅ハ平均賣買價六百分ノ一ニ當レリ。實ニ僅少ナリト云フベシ。然ルニ普國ノ家屋稅收入額ハ七百十萬ニシテ地租收入高ノ半額ヨリ尙ホ超過セリ。

第四 營業稅

營業稅ハ前述ノ如ク鐵道收入ヲ合スルモ其收入額ハ僅カニ五百二十三萬三千五百五十圓ニ過ギズ。若シ又鐵道收入ヲ除クトキハ更ラニ減ジテ四百六十七萬九千二百五十圓トナル、營業稅ニ二種アリ、一ハ住所確定セル營業ニシテ一ハ住所確定セザル營業トス。其ノ住所確定セル營業ハ左ノ如シ。

(イ) 受賣商業

(ロ) 旅人宿酒屋并ニ料理店

(ハ) 諸細工師

(ニ) 車馬貸附、船渡世、荷物運輸營業

右ノ營業稅ハ總テ地租及家屋稅ノ如ク收入純益額ニ因テ課賦スルモノニアラズ、他ノ物件ヲ憑準トシテ賦課スルモノナリ。歐洲ノ諸國ハ大抵普國ト同ジク營業稅ハ純益高ニ因ラズ他ノ物件ニ因テ賦課セザルナシ。地租及ビ家屋稅ハ純益ニ因テ賦課セラル、ニ、營業稅ニ限リ特ニ他ノ物件ニ因テ賦課セラル。其原因ノ何等ノ點ニアルヤヲ尋レバ要スルニ營業上ノ收入純益ヲ測定スルニ實ニ難事ナルヲ以テ、營業稅ハ大概他ノ物件ニ因テ賦課セラル。而シテ其實際ノ收入額ニ至テハ純益高ニ因テ賦課セラルト別段ノ差違アルコトナシ。

第五 砂糖税及砂糖輸入税

砂糖税ハ間税ノ一ニシテ、獨國ニ於テハ大根砂糖製造高ニ賦課ス。輸入ノ砂糖ハ國境ニ於テ輸入税ヲ課ス。千八百八十二年及八十三年ノ豫算等ニ依レバ獨逸國內ノ砂糖税及ビ砂糖輸入税ノ收入總額ハ三千五百四十二萬五千五百五十圓ニシテ、右ノ内千八百三十七萬六千九百圓ハ輸出砂糖ノ税額ナリ。而テ之ヲ全額ヨリ引去ルトキハ千七百四萬四千二百圓ノ收入額ナリ此ノ砂糖税ヲ獨國ノ人口四千五百二十三萬四千六十一人ニ割付スルトキハ、一人ニ付キ三十七錢七厘五毛ノ割合ナリ。普國ノ人口ハ二千七百二十七萬九百一十一人ナルヲ以テ、千二十七萬七千八百六十四圓ノ砂糖税ヲ納ムル割合ナリ。

茲ニ各國一人一ケ年ノ砂糖消費高ヲ計算スルニ凡ソ左ノ如シ。

英 國	三〇、〇五キログラム
蘭 國	一〇、五〇キログラム
佛 國	九、五〇
獨 國	六、八〇
奧 國	五、五〇
露 國	四、二五

希臘 三、〇〇

土耳其 一、五〇

ゲルストネルノ計算ニ依レバ砂糖税ハ一「セントネル」ニ付キ左ノ如シ。

獨 國	二圓五十三錢
奧 國	二圓
露 國	三圓四十三錢
佛 國	四圓九十五錢

カ、フオンリーケノ著書ニ依ルニ、千八百八十二年獨國ニ於テハ精製砂糖一「セントネル」ニ付キ三圓七十五錢、粗製砂糖ハ同三圓ニシテ、砂糖大根ノ税ハ一「セントネル」ニ付キ二十錢ナリ。當時粗悪砂糖一「セントネル」ヲ製スルニ十二「セントネル」半ノ大根ヲ要ス。故ニ一「セントネル」ノ大根税二十錢ニ半ヲ乘ズレバ砂糖税ハ二圓五十錢ノ割合ニ當ル由之觀之ゲルストネルノ計算ハ實ニ附合スルモノト云フベシ。

第六 煙草税及煙草輸入税

此税ハ獨逸國政府ノ收入ニ屬スルモノナリ。千八百八十二年及同八十三年ノ豫算ニ依レバ獨國ノ煙草税及煙草輸入税ノ純收入百十五萬九千圓アリ、之ヲ全國ノ人口ニ割付スルトキハ

一人ニ付キ十八錢ノ割合トナル、而シテ普國ノミノ收入ハ四百九十一萬二百四十圓ナリ。又煙草稅ハ千八百七十九年六月十六日ノ布告アル迄ハ面積稅ニシテ、煙草ヲ作ル地面ノ大小ニ因リテ賦課シタリト雖ドモ、千八百七十九年六月十六日ノ布告ヲ以テ二種ノ賦課法即チ面積稅及量目稅ノ兩種目ヲ設ケタリ。煙草畑四「アール」以下ノ面積ナレバ「メートル」平方ニ付キ一錢一厘二毛五朱ノ面積稅ニシテ四「アール」以上ノ面積ナレバ煙草ノ量目即ニ「セントネル」ニ付税金十一圓二十五錢賦課ス。又同法律ニ依レバ輸入煙草稅ノ賦課額ハ左ノ如シ。

(イ) 葉 煙 草

百キログラムニ付

二十一圓二十五錢

(ロ) 葉卷及紙卷煙草

同

六十七圓五十錢

官ノ統計ニ依レバ獨逸國內ノ煙草費消高ハ最近十二年間ノ平均ヲ以テスレバ一人ニ付キ「キログラム」十分七ノ割合ナリ。ゲルストフエルドノ千八百七十九年ノ統計ニ依レバ、獨國ニテハ一人一ケ年間費消スル煙草ノ量目ハ「キログラム」十分ノ七ニシテ、澳國ニ於テハ「キログラム」十分ノ六、佛國ニ於テハ十分ノ九、英國ニ於テハ十分ノ七、普國ニ於テハ十分ノ六ナリ。各國ノ煙草稅額ハ「セントネル」ニ付キ左ノ如シ。

露 國

十三圓六十五錢

澳 國

二十七圓五十錢

英 國

八十七圓五十錢

佛 國 專賣

九十五圓

第七 獨國內ノ火酒稅及其輸入稅

純收入額ハ千四百四十九萬千六百圓ニシテ、之レヲ全國ノ人口ニ割付スルトキハ一人ニ付キ三十一錢七厘五毛ノ割合ナリ。此ノ割合ヲ以テ普國ノ收入額ヲ計算スルトキハ、普國ノミノ火酒稅及其輸入稅ハ八百六十六萬千一百圓ナリ。又一「ヘクトリール」ニ付キ百分ノアルコホルヲ含有スル火酒ノ稅ハ左ノ如シ。

獨 國

一圓九十五錢

白 耳 義

十八圓八十五錢

佛 國

三十一圓二十錢

露 國

四十五圓五十二錢

亞米利加合衆國

四十九圓七十四錢

英 國

九十八圓六十四錢

獨逸ノ火酒消費量ハ一ケ年一人ニ付キ四「リール」半ノ割合ニシテ、日本ノ一石ハ百八十

「リール」ニ當ル。

第八 麥酒稅

獨國ニ於テハ通例未製麥酒即チ「モロミ」ニ課スト雖ドモ、聯邦ノ一二ヶ國ニ於テハ麥ノ萌芽ニ課ス。内國ノ麥酒製造稅及麥酒輸入稅ノ純收入額ハ千八百八十二年及八十三年ニ於テハ四百九十萬二百二十五圓ニシテ、之レヲ人口ニ割付ケルトキハ一人前十四錢二厘五毛ノ割合ナリ。普國ノ麥酒稅及其輸入稅額ハ三百八十八萬七千二百七十三圓ナリ。麥酒一「ヘクトリール」ニ付テノ稅高ハ千八百八十二年及八十三年ニ於テハ、二十錢五厘ニシテ、其前年ニ於テモ通例二十錢乃至二十一錢ナリ。麥酒一「ヘクトリール」ニ付キ歐洲各國ノ賦稅高ハ左ノ如シ。

佛國	八十錢
露國	九十四錢
英國	九十三錢
澳國	一圓十八錢
伊國	一圓三十七錢
ノルウエゲン	一圓五十一錢

獨國內ニテ一ヶ年間ニ消費スル所ノ麥酒ノ總高ヲ全國ノ人口ニ割付スルトキハ、一人前八十七「リール」半ノ割合ナリ。

第九 葡萄酒及菓酒ノ輸入稅

葡萄酒稅ハ元ト葡萄酒製造高ニ賦課セシモ、今日ニテハ全ク之レヲ廢シ、單ニ輸入稅ノミヲ徵課スルコト、ナレリ。千八百八十二年獨國中ノ葡萄酒及菓酒ノ輸入稅收入高ハ三百二十三萬二千五百圓ニシテ、一人別ノ割合ハ七錢七厘ナリ。又普國中ノ葡萄酒稅額ハ百九十七萬七千七百三十五圓ナリ。樽ニ入レタル葡萄酒ノ輸入稅ハ百「キログラム」ニ付キ六圓ニシテ、壘詰ノ分ハ十二圓ナリ。「ゲルストフェルド」ノ千八百七十九年ノ統計ニ依レバ、獨國ノ火酒稅及葡萄酒輸入稅ノ收入額ハ二千七百十三萬五千五百圓ニシテ、内國ノ間稅即チ消費物稅及輸入稅總額ノ百分ノ三十五ト二分ノ一、英國ハ右三種ノ酒稅額ハ一億五千三百三十七萬五百圓ニシテ、間稅及輸入稅總額ノ百分ノ六十九ト三分ノ一、佛國ハ八千六百六萬圓ニシテ百分ノ三十二ト五分ノ二、澳國ハ千七百五十六萬五百圓ニシテ百分ノ六十七ト三分ノ一ニ當レリ。

第十 珈琲及珈琲代用品ノ輸入品稅

獨國全國ニ於テ千八百八十二年ニ於テハ千七百七十一萬八千二百五十圓ノ收入ナリ。又之レヲ

人口ニ割付スルトキハ一人前二十三錢七厘五毛ノ割合ナリ。普國ノミニ屬スル稅額ハ六百四十七萬六千七百八十八圓ナリ。珈琲輸入稅ハ百「キログラム」ニ付キ十圓ヲ課ス。

第十一 鹽稅及其輸入稅

獨國ニテハ今尙ホ存續セリ。千八百八十二年及八十三年ニ於テハ鹽稅及其輸入稅ノ純收入高ハ千四十九萬五千九百圓ニシテ、一人別二十四錢二厘五毛ノ割合ナリ。普國ノミニ屬スル稅額ハ即チ六百三十四萬二千三百九十三圓ナリ。鹽ノ製造稅ハ百「キログラム」ニ付三圓ニシテ、輸入稅ハ百「キログラム」ニ付三圓二十錢ナリ。鹽輸出又農工業上必要ノ鹽殊ニ魚類ノ鹽漬ニ用ユル量目ハ免稅ニ屬ス。獨國ノ食鹽值段ハ一「キログラム」ニ付平均五錢位ナリ。又僻地ニ於テハ一「キログラム」ニ付六錢位ニ當ル。鹽製造場ノ近邊ニ於テハ屢々二錢乃至三錢位ノコトアリ、一ケ年間ノ鹽ノ費消高ヲ人口ニ割付スレバ一人ニ七「キログラム」三分二ノ割合ナリ。佛露二ヶ國ノ鹽稅ハ獨國ニ比スレバ大ニ輕シ、鹽一「キログラム」ニ付キ佛國ニ於テハ二圓、露國ニ於テハ一圓四十八錢ナリ。英國ニ於テハ無稅ナリ。澳國伊國セルビヤ又瑞西ノ或ル一二ノ「カントン」ニ於テハ、官賣ノ制アリ、ゲルストフェルドノ統計ニ依レバ人頭割ノ鹽稅ハ左ノ如シ。

澳 國 三十六錢七厘五毛

獨 國 二十三錢

佛 國 十六錢五厘

露 國 十四錢七厘五毛

第十二 輸出入及通過稅

純收入高ハ千八百八十二年及八十三年ニ於テハ四千七百七十二萬四千圓ニシテ、一人別ノ割合ハ一圓五錢五厘ナリ。普國ノミニノ收入高ハ二千八百七十七萬九千四百八十二圓ニシテ、該金額中ヨリ珈琲、煙草、葡萄酒、食鹽、砂糖、麥酒、及火酒ハ製造稅及輸入稅ヲ引キ去リ其他ノ輸出品ニ付テノ稅額ハ千五百二十萬八千四百圓ナリ。通過稅ハ獨國及其他ノ文明國ニ於テハ大約之ヲ廢シタリ。獨國ニ於テハ輸出稅モ亦千八百七十三年ノ十月一日布告ヲ以テ之レヲ廢棄セリ。故ニ獨國ニ於テハ今日尙ホ存スルハ輸入稅ノミニシテ、他ノ關稅ナシ。其輸入稅中免稅ニ係ルモノハ石炭並ニ未製金屬但鐵ハ之ヲ除ク、木綿、麻、薪、一定ノ獸類及獸類ヨリ製シタルモノ、生糸、羊毛、其他學術上ノ機械書籍類並ニ美術品等即是ナリ。此他ノ輸出品ハ總テ關稅ヲ課ス。又輸入稅ヲ課ス物品中ニテ尤モ必要ナルモノハ南方ノ菓物、米、鮭、香料、茶、木綿系等ナリ。

第十三 爲替印紙稅

普日稅則ノ比較並ニ日本稅制ノ改正案

獨國ニ於テハ爲換印紙稅並ニカルタ稅ヲ間稅トシテ賦課ス。爲換印紙稅ハ交通稅ニ屬スルモノニシテ、カルタ稅ハ消費稅ニ屬ス。千八百八十二年及八十三年ノ爲換印紙稅ノ收入額ハ百六十七萬七千五百七十五圓ニシテ、人口ニ割レバ一人ニ付キ三錢六厘ニ當ル。印紙稅ハ五十圓未滿ハ二錢五厘ニシテ、五十圓以上百圓未滿ハ五錢、百圓以上百五十圓未滿ハ七錢五厘ナリ。其他ハ此ノ割合ニ準ジテ増減ス。

カルタ稅收入高ハ千八百八十二年及八十三年ニ於テハ二十六萬四千二百圓ニシテ、人口ニ割レバ一人ニ六厘ノ割ニ當ル。カルタ稅ハ一組三十六枚未滿ナレバ七錢五厘ニシテ、其以上ハ總テ十二錢五厘トス。普國ノミノ爲換印紙稅ノ收入額ハ千十五萬六千三百六十二圓ナリ。

第十四 證券印紙稅額

普國ノ此ノ稅額ハ四百萬圓ナリ。該印紙稅ハ千八百二十二年三月七日、千八百六十七年八月七日、千八百七十三年五月三十日、千八百七十五年六月二十二日、千八百七十五年六月二十七日等ノ布告ニ基テ賦課セラル。普國ノ印紙稅ハ道理上ヨリ論ズレバ他國ト同ジク種々ノ收入ヲ含有ス。或ヒハ手數料ノ如キモノアリ、或ハ正當ノ租稅アリト雖ドモ、其課稅ノ方法タル印紙ヲ貼付スルト同一ナルヲ以テ、概シテ證券印紙稅トハ稱セシナリ。普國及其他ノ國ニ於テモ印紙稅中ニ於テ一等ノ地位ヲ占ムル者ハ即チ交通稅ナリトス。交通稅トハ所有權及

財產讓渡ニ付テ賦課スル租稅ヲ云フ。譬ヘバ普國ニ於テハ內國ノ土地及土地使用權ノ賣買及交換ノ場合ニ際シ、其直段百分ノ一ヲ印紙稅トシテ納メザルベカラザルモノトス。又土地賣買ノ節契約書ヲ認メズ、直チニ臺帳書換ヲ求ムル者モ、其賣買值段百分ノ一ヲ納稅セシムルナリ。不動産ノ借受契約ハ其收入三分ノ一ヲ納稅セシメ、又其契約延期ノ節ハ更ラニ納稅セシム。動産ノ賣買、交換、糶賣、注作品ノ請負、建築ノ請負等ノ契約ハ其併直三分ノ一、金圓借用證書ハ千二百分ノ一、生命保險ハ二百分ノ一ノ印紙稅トス。

第十五 遺物相續稅

普獨兩國トモ一般ニ唯支族ノ相續者ニ賦課スルノミニシテ本族ノ相續者ニ之レヲ課セズ然ルニ歐洲中ニモ或ヒハ本族ノ相續者ニ賦課スル國アリ、普國ノ遺物相續稅ハ千八百七十三年五月三十日ノ法律ニ基因ス。遺物讓渡人若シ其資産ヲ其家ニ屬スル者譬ヘバ妻又ハ雇人ヲ其遺物相續者ト取極ルトキハ、遺物價額百分ノ一ヲ納稅セシム。養子及其本族或ヒハ讓渡人ノ同胞又ハ異母兄弟姊妹及其本族相續者タルトキハ、遺物價額百分ノ二ヲ納稅セシム。以上記載シタル其他ノ支族ノ相續者タルトキハ百分ノ四ヲ納稅セシム。法律上明文ナキモノハ百分ノ八ヲ納稅ス。免稅ニ屬スルハ三十七圓五十錢未滿ノ遺物、其外本族及遺物讓渡人ノ家ニ屬

スル者ノ讓受クル遺物ニシテ、其價額二百二十五圓未満ノモノナリ。其他法律上免稅ニ屬スルモノハ臂ヘバ政府、養育院、病院、懲治檻監獄、救貧院、小學校及大學校等寄贈ノ遺物ナリ。前年度相續稅ノ收入額ハ百三十二萬五千圓ナリシ。

第十六 橋梁、運河、藏敷等ノ納稅

此稅ハ政府ノ取扱ニ對スル手數料ナリ。該稅ハ賦課スルニ甚ダ不便ナルヲ以テ、漸々廢セラル。普國ノ收入額ハ毎年五十九萬二千五百圓ナリ。

第十七 訴訟用印紙料

普國ノ前年度豫算ニ依レバ、千六百二十二萬五千圓ナリ。民事訴訟ニ使用スル印紙料ハ訴訟物件ノ價額ニ依テ等級ヲ分テ、其等級ニ依テ納メシム。金高五圓迄ノ訴訟ハ二十五錢、七十五圓以上百十二圓五十錢迄ハ三圓七十五錢ノ印紙料ヲ納メシム。金高増加スルトキハ之レニ準ジテ印紙料ヲ賦課ス

以上陳述シタル所ノモノハ各租稅ノ說明ニシテ、以下其組織ヲ講究セントス。普國ノ租稅組織上第一區別ヲ要スルモノアリ、手數料ト正稅ト即チ是レナリ。其手數料ニ屬スルモノハ第十六ノ橋梁、渡場、港、運河及藏敷等其他第十七ノ訴訟印紙料並ニ第十四ノ證券印紙中ノ一部分ニシテ、其他ノ租稅ハ正稅ニ屬スルモノナリトス。

夫レ手數料ハ政府ノ一定セル行爲ニ對シテ納ムル所ニシテ、正稅ト其性ヲ異ニシ、大ヒニ當局者ノ利益ニ關スルガ故ニ。凡ソ文明ヲ以テ稱セラル、所ノ國ニシテ苟クモ此ノ手數料ノ制規ヲ設ケザルモノハアラザルナリ。

夫レ賦課ノ方法タル、國民ノ資力ニ應ジテ之レヲ負擔セシムルヲ以テ最モ其理ニ適シタルモノト謂フベキナリ。故ニ之レヲ負擔スルノ能力ヲ有スル人民ハ固ヨリ之レニ應ゼザルベカラザルノ義務アリ。此賦課法ニ因ルトキハ第一、道理ニ適シ、第二、國ノ歲入ヲ多クシ、第三、人民ノ負擔平均ヲ得テ輕重ノ苦狀ナカラシムルノ利益アリ。而シテ又納稅義務者ノ其納稅義務ニ堪ルト堪ザルトハ大ニ各人民ノ歲入額、財產額、勞力及生活上ニ於テ必要ナル需用ノ多寡ニ關係ヲ有スルモノナレバ左ニ其要點ヲ舉グ。

一、巨大ノ財產ヲ有シ其利金ヲ以テ生活ヲ營ム者ハ人民中蓋シ寡シ。其多數ハ勞力ニ因テ歲入ヲ得、而テ其需用ヲ充スモノナリ。故ニ人民ノ負擔スベキ租稅ハ其歲入額ヲ以テ賦課ノ標準トセザルベカラズ。

二、然リト雖ドモ理論上單ニ歲入額ノミヲ以テ賦課ノ標準トナス能ハザルノ理由アリ。曰ク同一ナル歲入額ト雖ドモ勞力ニ因テ得ル所ノモノト、財產ヨリ得ル所ノモノトハ之レヲ同一視スベカラズ。設ヘバ茲ニ財產ニ依テ千圓ノ利金ヲ收入スル者ト、千圓ノ年俸ヲ受クル無

財産ノ官吏トアラン、然ルトキハ其収入額ハ彼此等シク千圓ナリト雖モ、納税ノ點ニ至テハ財産所有者ハ敢テ之レヲ難シトセズ。何トナレバ財産所有者ハ其財産ヲ保險會社ニ賣渡シテ終身確定ノ金員ヲ其會社ヨリ領收スルノ方法アルノミナラズ、其領收スル確定ノ金員ヨリ尙ホ收入ヲ増加スルコトモ得ベク、又勞力ヲ使用シテ他ノ收入ヲ得ルノ術アリ。地主モ亦然リ、地主ニシテ地面ヲ貸附シ其地代トシテ一年二百圓ヲ得レバ、官吏ノ年俸二百圓ヲ受クル者ヨリモ納税シ易シ、又地主ハ只勞力ヲ使用シ得ルノミナラズ、其地面ヲ賣却シテ資本トナシ、終身其利子ヲ以テ生活ヲ營ミ得ベシ。此故ニ只歳入ノミヲ以テ賦課ノ標準トスルハ不可ナリ。歳入ノ外猶財産ノ多寡ヲ調査シ、之ヲモ併セテ賦課ノ標準トナサルベカラズ。

三、凡ソ同一ノ歳入及同一ノ財産ヲ有スル者ハ納税上一般ニ同一ノ資力ヲ有セザルベカラズ。故ニ政府ニ於テモ之レニ賦課スルニ同一ノ財産アル者ト雖ドモ、其缺クベカラザル需用ノ多寡ニ依テハ租税ノ輕重ニ感覺ナキ能ハズ。固ヨリ同一ノ收入者ナルトキハ其収入ノ財産ニ因ルト、又勞力ニ得ルトヲ問ハズ、同一ノ税額ヲ納メザルベカラザルノ理ナリト雖ドモ未ダ是ノミヲ以テ盡シタリトスベカラズ。尙ホ參酌スベキ要件アリ、例ヘバ家族中ニ病人アルカ、又ハ通例ヨリ子供ノ數多キカ、又親族中救恤セザルベカラザル貧困者アルカ、又

不時ノ災難又ハ缺クベカラザル費用ノ夥シキカノ如キ免レ難キ事情アルモノニ至テハ、假令同一ノ收入アルモ同額ノ租税ヲ納ムルニ困難ナルガ故ニ、右等ノ事情アル者ハ宜シク之ヲ酌量シ、以テ租税ヲ輕減セザルベカラズ。

然リト雖ドモ特ニ其餘裕アル者ノ如キハ右ノ事情アリト雖トモ、敢テ之レヲ酌量スルニ及バズト雖ドモ、眞ニ餘裕アリテ富豪者ト稱セラル、者ハ何レノ國ニ於テモ其人口少部分ニ止マリ、其多數ノ部分ハ財産ニモ乏シク、又且ツ歳入モ寡キ者ノミ。而シテ其消費スルトコロノモノハ多クハ生活上必要ノ入費ニ屬スルモノナリ。此故ニ必要ノ需用増減ハ隨テ人民ノ納税力ヲ増減スルモノナリ、由之觀之、獨リ歳入及財産ヲ以テ賦課ノ標準トナスベカラズ。納税者ノ需用多寡ヲモ亦斟酌セザルベカラズ。收入アル者ト雖ドモ其收入ヲ以テ僅カニ生活シ得ルモノハ其賦課ニ堪ユルノ資力アラザル者ナルヲ以テ、全ク之ヲ免稅スルヲ要ス。而テ中等及下等社會ノ收入税ハ上等社會ヨリモ頗ル其額ヲ減ズベシ。中等及下等社會ノ收入ハ其多少ニ依リ税率ヲ増減シ賦課セザルベカラズト雖ドモ、上等社會ノ收入ハ同一ノ割合ヲ以テ賦課スベシ。普國ニ於テハ右ノ原則ニ基テ租税組織ヲ制定セリ。而シテ其直税ニ係ルモノハ收入税、地租、家屋税、及營業税ニシテ、其中收入税ハ一般ニ之レヲ賦課ス。

普國ノ租稅組織ハ其如斯ナルヲ以テ、之レヲ整理シタルモノト謂フベシ。然リト雖ドモ租稅中一ノ缺乏スルモノアリ、資本稅即チ是ナリ。試ニ看ヨ地主ハ地租、家屋所有者ハ家屋稅、營業者ハ營業稅各其納稅義務ヲ負フニアラズヤ、然ルニ資本所有者ニ至テハ之ト相違シ、僅カニ收入稅ヲ納メシムルノミニシテ資本稅ヲ負擔セシムルコトナシ。之レヲ稅法ニ背馳スルモノト謂フニアラズシテ何ゾヤ。故ニ普國ニ於テハ直稅ノ組織ノ完全ナランコトヲ欲セバ、資本稅ノ設置ハ實ニ之レヲ緊要ナリトス。

普國ノ租稅組織ハ直稅ノ設置ヲ以テ未ダ之レヲ足レリトセズ、其大半ハ間稅ノ方ニ依テ之レヲ徵收ス、直稅ノ收入額ハ前記ノ如ク二千六百二十二萬四千八百八十五圓ニシテ、間稅ノ收入額ハ七千六百四十六萬三百七十六圓アリ。間接ニ租稅ヲ賦課スルノ方法ハ獨リ普國ノミニ限ラズ、他ノ文明國ニ於テモ亦施行セラル、所ナリ。抑モ間稅ノ設置ハ直稅ノ不充分ナルニ基因シ、直稅ノ缺ケタルヲ補フモノナリ。直稅ハ歲入及財產額ヲ假定シテ其稅率ヲ確定シ、未來ノ收入及純益ニ賦課スルモノナルガ故ニ、納稅者ノ收入及純益ハ何程嚴重ニ調査スルトモ其額ハ年々ニ不同アリ。譬ヘバ農產物ハ價值非常ニ下落シタルトキハ其純益モ亦隨テ減少スベシ、故ニ收入及純益高ヲ推定セントスルハ亦甚ダ難シトス。然リト雖ドモ若シ眞正ノ資力ニ應ジテ納稅セシメント欲セバ納稅義務者ノ歲入ヲ實地調査シ、而ル後チ相當ノ稅率ヲ定メテ賦課セザルベカラ

ズ。而シテ此目的ハ大概直稅ノ方ニ依テ達シ得ベシト雖ドモ、各人ノ歲入上大ニ不同アルヲ以テ、其賦課ノ偏重偏輕ノ弊アルハ實ニ免ガレ難シトス。故ニ直稅ハ人民ノ一部分ニ於テ常ニ其不公平ニシテ且ツ不正ナルノ感覺ヲ起サシムルコト多シ。若シ或ヒハ普國其他ノ文明國ニ於テモ特ニ直稅ノミヲ以テ其國用ニ充テント欲スルトキハ、賦稅ノ苛重ナルヲ以テ納稅義務者中其負擔ニ堪ヘザル蓋シ寡カラザルベシ。

直稅ノ外向ホ歲入額ニ應ジテ租稅ヲ賦課スルノ方法アリ。消費稅即是レナリ。消費稅トハ人間ノ消費スベキ物品譬ヘバ烟草、砂糖、酒、等ニ賦課スルモノニシテ、要言スレバ其物品購求者ヨリ其代價ト共ニ納附スルモノナルニ過ギズ。人民中ニテ其歲入ハ僅カニ其勞費ヲ償ヒ、其衣食ニ供スルニ過ギザル者ノ多數ナルベシ。若シ人民ノ消費スベキ物品即チ衣食、薪炭、燈油、家屋、家具等ニ其價格ニ準ジテ課稅スルトキハ、人民ノ資力ニ應ジテ其歲入ニ賦課スルト同一ナルベシ。然リト雖ドモ消費物ニ悉ク賦課スルコトハ甚ダ困難ニシテ、且ツ之レヲ實際ニ施行スルハ到底得ベカラザルコトナリ。只消費物品中間ノ最好物ニシテ、生活上必要ニ屬セザルモノ、即チ酒類、砂糖、煙草、珈琲、茶、「シヨコンド」等ニ賦課スルヲ得ベシ。右等ノ物品ニ至テハ生活上多少餘裕アル者ニアラザレバ自ラ需用ナシ。是ヲ以テ其購求者ハ即チ消費稅ニ堪ユルノ資力アル者ト看做スベシ。此故ニ消費稅ハ直稅ノ如ク偏重偏輕ノ弊ナク、最モ下等及中

等ノ納稅義務者ニ適當スルモノナリ。既ニ前述シタルガ如ク各個人ハ其歲入ヲ以テ先ヅ最モ必要ノ需用ニ充テ、而テ其殘餘アルトキハ之レヲ課稅ノ消費物ニ充ルナラン。故ニ消費物中其生活上ニ必要ナルモノト必要ナラザルモノトヲ能ク區分シテ課稅スルトキハ、消費稅ノ直稅ニ優レルコト蓋シ辯解ヲ費スヲ俟タズ。然レドモ其區分法ニシテ其當ヲ得ザルトキハ直稅ト同一ノ結果ヲ見ルニ至ルヤ更ニ疑ヲ置カザル所ナリ。夫レ消費稅ハ人民中富裕ナル部分ニ限り之レヲ負擔スルヲ以テ、政府ノ收入額モ亦極メテ多ク、且ツ直稅ノ重キニ比スレバ其賦稅ノ重キヲ感ズル者蓋シ寡シ。是レ間稅即チ消費稅ノ地租、收入、家屋、營業ノ諸稅ニ優レル所ナリ。

此ノ故ニ普國及其他ノ文明國ニ於テモ大概此ノ消費稅ノ組織ヲ施行セリ。然リト雖ドモ本稅ヲ以テ今日特ニ國家ノ需用ニ充テントスルハ固ヨリ難シ。加之本稅ヲ以テ國用ニ充テント欲スルモ之レニ堪フベキ物品甚ダ僅少ニシテ、其價值ハ忽チ騰貴シ、富者ニアラザレバ遂ニ之レヲ購求シ能ハザルニ至リ、從テ政府ノ收入額モ減少スベシ。各國皆其國用ニ應ジテ租稅ヲ賦課スルヲ以テ、國用多ケレバ收入額モ亦増加セザルベカラズ。故ニ理財上ノ點ヨリモ既ニ此ノ兩組織、即チ間接ノ消費稅及ビ直稅ノ設置ナカルベカラズ。直稅ハ消費稅ノ缺ケタルヲ補ヒ、消費稅ハ直稅ノ足ラザルヲ填ルモノナリ。而シテ賦課ノ方法タル前ニ陳述シタルガ如ク各個人ノ資力ニ因テ之レヲ負擔セシムルヲ以テ正當トス。夫レ消費稅ハ人民一般ニ賦課スルモノニシテ、

其比例ニ至テハ毫モ差違アルコトナシト雖ドモ、中等及下等人民ハ常ニ其重キヲ苦シミ、而シテ上等即チ富貴社會ニ於テハ更ラニ其重キヲ感ゼズ。故ニ此ノ不平均ヲ補ハント欲シ、驕奢品稅ヲ設ケテ上等社會ニ負擔セシメタルモ尙ホ好結果ヲ現ハサザリシ。又驕奢品稅ノ收入額ハ甚ダ僅少ナルモノニシテ、理財上有益ナルモノト認ルコトヲ得ズ。富者ノ收入額ニ準ジテ驕奢品稅ヲ賦課セントスルノ計畫ハ今日迄行ハレズ、故ニ前述ノ不平均ヲ補ハント欲セバ收入額ニ賦課スルニ多少ノ稅率ヲ以テスルノ方法アルノミ。普國ニ於テハ此ノ稅法ニ基キ現行稅則ヲ制定セリ。

今茲ニ普國ノ租稅組織中遺物相續稅手續料ノ部ニ屬セザル證券印紙稅ノ兩種ハ如何ナル位置ヲ占ムルヤヲ說明セントスルニ、右兩種ノ稅ハ大概財產ノ全部或ヒハ其一部ヲ該所有者ヨリ他人ニ讓リ渡ストキ、其價額ニ準ジテ賦課セラル、モノニシテ、之レヲ例スレバ猶ホ彼ノ收入稅ノ外ニ歲入額ニ準シ間接ニ消費稅ヲ課スルノ制規アルガ如ク、地租及ビ營業家屋並ニ資本等ノ諸稅ノ外、更ラニ財產ノ價格ニ準シテ賦課スル間稅ナリ。蓋シ直稅ハ收入額ヲ標準トシテ之レヲ賦課スト雖ドモ、證券印紙稅及遺物相續稅ハ財產所有者ヨリ該財產ヲ他人ニ讓リ渡ス時ニ於テ賦率ヲ確定シテ之レヲ稅課ス。又地租及家屋稅ハ豫ジメ其收入額ヲ假定シテ賦課スルモノナレバ、歲終ニ至リ或ヒハ收入額ノ増加シ或ヒハ減少シテ不平均ヲ生ズルコト往々之レアリ。然

ルニ證券印紙税及遺物相續税ハ財産讓渡シノ時ニ於テ其價額ヲ確定スルモノナレバ、税率ヲ制定スルニ甚ダ利便ナリ。又財産ノ價額ハ多クハ讓渡人ト讓受人トノ兩間ノ約束ニ依テ確定セラレ、殊ニ土地家屋又ハ動産價額ノ如キハ賣買ノ際ニ於テ之レヲ定ムルヲ以テ通例トス。而シテ假令遺物讓與ノ際ニ於テ價格ノ分明ナラザルコトアルトキハ、則チ官廳ニ於テ之レヲ確定ス。交通税ハ主トシテ現在ノ交通價額ニ賦課セラル、ヲ以テ、假定ノ收入額ニ直税ヲ課スルニ比スレバ大イニ優レル所アリ。然リト雖ドモ一利アレバ亦一害ナキ能ハズ。即チ財産ノ部分ニシテ今日ノ取引上繁多ナルモノアリ、又繁多ナラザルモノアリ。而シテ繁多ナルモノハ隨テ多額ノ租税ヲ納メ、繁多ナラザルモノハ其納税モ亦最モ少シ。由是觀之交通税モ亦偏重偏輕ノ弊ヲ免カレズ。此ノ故ニ理財學者中之レヲ可トセザル者モ往々之レ無キニ非ラズ。是ヲ以テ普國ニ於テハ此税法ノ區域ヲ狹縮シ財産所有者ニ課スルニハ主トシテ直税ヲ以テセリ。

以上陳述シタル所ノ普國租税組織ヲ摘探シテ簡單ニ之レヲ列記セント欲セバ即チ左ノ如シ。

第一 租税ニ類シタル手數料

手數料ハ其正税ト性質ヲ異ニス、該税ニ屬スルモノ即チ訴訟入費其他橋梁、津渡、港、運河、藏敷等ニ課スル租税ニシテ概ネ政府ノ手數ニ對シ拂フベキモノナリ。

第二 正税

該税ハ人民ノ缺クベカラザル需用ノ多寡ヲ酌量シ其資力即チ歲入又ハ財産收益額ニ準ジテ賦課セラレ、普國ノ直税即チ收入及等級税地租並ニ家屋及營業税ハ人民ノ歲入及財産額ヲ直接ニ概算シ、其多寡ニ準ジテ賦課セラレ、間接ノ消費税殊ニ砂糖、鹽、煙草、酒類、骨牌珈琲及其他ノ輸入税ハ收入税ヲ補ンガ爲メ是レ亦其資力ニ應ジテ賦課セラレ、間税ニ屬スル交通税即チ證券印紙税遺物相續税並ニ爲換印紙税ハ各々財産税中ノ一部ニシテ現在ノ交通價額ニ準ジテ賦課セラル、モノナリ。

以上普國租税組織ノ説明ニシテ、以下普國ノ租税組織ト日本現行ノ組織ヲ比較セントス。即チ明治十七年度歲入出豫算書ニ據リ日本租税ノ順序ヲ前文列叙シタル普國租税順序ノ如ク列記セバ左ノ如シ。

第一 直税

- 一、地 租 金四千二百八十八萬八千五百六十六圓
- 二、營 業 税 金百三十六萬三千四百七十六圓

内 譯

- 船 税 金十九萬八千四百四十五圓
- 車 税 金四十五萬三千八百四十七圓

普日税則ノ比較並ニ日本税制ノ改正案

會社稅	金五十三萬千四百八十三圓
牛馬賣買免許稅	金八萬七千七百八十九圓
代言免許料	金一萬二百七十圓
鑛山稅	金一萬六千九十二圓
營麴營業稅	金六萬五千八百五十圓
直稅收入額ノ總計	四十四萬二千四百四十二圓

第二 間稅

三、煙草稅	金百五十八萬八千二百圓
四、酒造稅	金千六百八十一萬三千六百十二圓
五、賣藥稅	金五十五萬六千四百九十五圓
六、版權免許料	金四千三百七十三圓
七、海關稅	金二百六十一萬圓
八、北海道物產稅	金六十五萬六千六百五十六圓
九、證券印稅	金八十八萬六千三百三十六圓
十、訴訟用印紙料	金五十三萬五百七十六圓

十一、郵便稅	金二百二十五萬二千七百八圓
十二、銃獵稅	金八萬六千六百六十二圓
十三、度量衡稅	金二千四百四十三圓
十四、海外旅券其他 免許手數料	金二萬千七百七十三圓
間稅收入額ノ總計	二千六百萬八千七百三十四圓
直間兩稅ノ收入額ノ合計	七千二十六萬七百七十六圓

一、普國租稅組織ニ據レバ凡ソ該國ノ人民ニシテ五百「マルク」以上ノ歲入ヲ有スル者ハ其歲入ノ勞力、營業利益、利息、家屋所有、又ハ其他ノ收入基源ニ因ルト否トヲ問ハズ、盡ク收入稅ニ服從セザルベカラズ。該稅ハ普國ノ租稅中最モ巨額ノ收入ニシテ、之ヲ地租ノ收益額ニ比スレバ三百乃至四百萬圓ノ多キニ居ル。日本ニ於テハ未ダ收入稅ノ定メナキガ爲メ勞力資本、家屋所有等ニ基因スル歲入ハ總テ免稅タリ。是故ニ人民ノ半數殊ニ富有社會ノ者ハ僅カニ間稅ヲ納ムルノミニシテ直稅ノ負擔ハ殆ント免カル、モノ、如シ。

二、地租ハ日本ニ於テモ亦普國ト同ジク自ラ定法アリ。普國ノ地租收入額ハ國稅ノ十一乃至十二分ノ一ニ居レリ。然ルニ日本ノ地租ハ國稅五分ノ三即チ十二分ノ七乃至八トナセリ。日本ノ總國稅收入額ハ七千五百九十八萬二千九百六十九圓ニシテ、而シテ其四千二百八十八

萬八千五百六十六圓ハ地租ノ收入ナリ。由是觀之、國稅ノ大半ハ農民殊ニ小作人ノ負擔スル所タリ。而テ其農民ノ數ヲ算スレバ未ダ全國人口ノ半ニダモ足ラザルナリ。而シテ普國ノ地租ノ如キハ之レニ比スレバ實ニ鮮少ナルモノト謂フベシ。日本ノ稅率ハ地價ノ二分五厘ニシテ、現今普國ノ地租額ハ最貴キモ亦土地賣買價格百分ノ一ニ過ギズ。千八百六十年五月二十一日ノ布告ニ據レバ普國ノ面積即チ森林、未開墾地、田畑等一「ヘクタール」毎ニ地租ノ平均額ハ二十七錢ニシテ、田畑一「ヘクタール」ノ平均額ハ四十一錢ナリ。千八百七十九年日本內務省發行ノ農業統計ニ據レバ日本田畑ノ面積ハ千八百七十七年ニ於テ四百五十四萬六千二百十五町、又ハ四百五十萬八千六百四十一「ヘクタール」アリ。而シテ明治十七年度歲入出豫算書ニ據レバ、地租收入額ハ四千二百八十八萬八千五百六十六圓ナリ由是觀之、田畑一「ヘクタール」ノ地租平均額ハ九圓三十二錢ニシテ、之レヲ普國ノ地租ニ比スレバ二十二乃至二十三ヲ倍セリ。實ニ日本ノ農地所有者ノ納稅ハ過重ナルモノト言フベシ。而テ日本ノ農業今日尙ホ未ダ振ハザルハ蓋シ此ノ重稅ニ基因スルモノナラン。夫レ普國ノ地租ハ極メテ輕少ナリト雖トモ、地主ハ尙ホ未ダ喜悅ノ色ヲ見サズ。却テ常ニ其過重ナルヲ歎訴ス。普國ニ於テスラ且ツ尙ホ斯クノ如シ。況ンヤ日本租額ノ最重ノ地主ニ於テオヤ。一朝農產價格ノ下落ヲ來サバ農民ハ忽チ貧困ノ域ニ陥リ、管ニ納稅ヲ能ハザルノ

ミナラズ、農業モ亦必ラズ衰微スルニ至ラン。豈ニ長太息セザルベケンヤ。

三、普國ニ於テハ家屋稅ナル者アリ。其收入額ハ毎年七百十萬圓ヲ下ラズ。蓋シ該稅ハ家屋ノ價格ニ應ジテ賦課スルガ故ニ、家屋ノ價額貴ケレバ其賦課額モ亦多シ。而テ高價ノ家屋ハ概シテ富有者ニ屬スルヲ以テ、該稅ヲ負擔スルモノハ主トシテ市府住民ノ中等以上ニアリ。今日本ニ於テモ亦家屋附屬ノ土地ニ課稅スト雖ドモ未ダ特ニ所謂家屋稅ナル者ヲ設ケズ。

四、普國及ビ日本ニ於テハ共ニ營業稅ノ設ケアリ、而シテ日本ノ歲入出豫算書ニハ未ダ特ニ之レヲ掲載セズト雖ドモ、船車、會社、牛馬、賣買、免許代言、免許鑛山、醫麴、營業等ノ諸稅ハ其性質ヨリ之ヲ論究スレバ純然タル營業稅ト謂フ可シ。普國ノ營業稅ノ如キハ之レニ反シ其區域廣大ニシテ且ツ組織ノ完全ナルニ困リ、之レヲ日本ノ營業稅ニ比スレバ其收入額モ亦遙カ超過セリ。抑モ普國工業ノ盛大ナルコトハ固ヨリ日本ノ比ニアラズ、故ニ其納稅ノ資力ヲ有スルモ亦多キ所以ナリ。

五、普國及日本ニ於テハ均シク資本稅ノ設ケナシ。抑モ普國ニ於テハ土地家屋又ハ製造場等ノ所有主ハ單ニ收入稅ヲ納ムルノミナラズ、地主ハ地租、家屋所有者ハ家屋稅、製造場所有者ハ營業稅ヲ各更ニ之ヲ納メザルベカラズ。然ルニ資本家ハ唯收入稅ヲ納ムルノミニテ未ダ資本稅ヲ納ムルノ義務ナシ。今日本ニ於テハ收入稅ノ設ケナキガ爲メ資本家ハ國稅ヲ免ル

ルモノノ如シ。

六、普國ノ砂糖製造税及砂糖輸入税ノ歳入額ハ一千二十九萬七千八百六十四圓ナリ、今日本ニ於テハ砂糖輸入税ノ額甚タ僅少ナリ。然レドモ其消費額ニ至テハ輸入品中最モ多シトス。蓋シ千八百七十五年ヨリ同八十一年ニ至ルノ間毎年四百乃至五百萬圓ノ輸入アリト、獨逸及普國ノ人民ハ一ケ年一人毎ニ三十五錢三厘三毛ノ砂糖税ヲ納ム、此比例ヲ以テ日本ノ全人口ニ賦課スルトキハ一千三百五十三萬圓ノ收入アルベシ。

七、普國ノ煙草税收入額ハ四百九十一萬二百四十圓ニシテ、日本ノ收入額ハ僅カニ百五十八萬八千二百圓ナリ。而シテ煙草ノ消費額ニ至テハ兩國トモニ寡ナカラズ。今試ミニ煙草税額ヲ該人別ニ分課スルトキハ、一ケ年一人毎二十八錢ナリ、此比例ヲ以テ日本ノ人口ニ賦課スルトキハ、毎年六百四十八萬圓ノ收入アルベシ。

八、酒類税ハ普日共ニ之ヲ設ケアリ、其收入額モ亦殆ンド平均ス。

九、日本ニ於テハ普國ノ有セザル一種ノ消費税アリ、即チ賣藥税是レナリ。此ノ收入額ハ五十五萬六千四百九十五圓ナリト雖ドモ、未ダ以テ消費税ノ缺ケタルヲ補フニ足ラズ。

十、普國ニ於テハ珈琲ノ輸入税アリ、千八百八十二年ノ豫算表ニ依レバ六百四十六萬六千七百八十八圓ノ收入アリ。而シテ日本ニ於テハ總輸入税額二百六十一萬「マルク」ト記載シア

ルニ依リ、珈琲税ノ其幾分ナルヤハ之レヲ知ルニ由ナシ。

十一、普國ノ鹽税收入額ハ六百三十四萬二千三百九十三圓ナリ。而シテ日本ニ於テハ曾テ該税ノ設ナシ。只製鹽ノ輸入税アルノミ。然レドモ其收入額ハ實ニ僅少ナルモノナリ。喰鹽ノ消費額ハ何レノ國ニ於テモ大同小異ニシテ、普國ニ於テハ一人ノ消費量一ケ年七「キログラム」三分ノ二ニ當リ、其納税額ハ二十四錢二厘五毛ナリ。此ノ比例ヲ以テ日本人民ニ鹽税ヲ課スルトキハ該税一ケ年ノ收入額ハ七百乃至八百萬圓ノ多キニ至ラン。

十二、普國ニ於テハ以上列記シタル所ノ諸收入ノ外ニ尙ホ雜種品ノ輸入税アリ。其收入額ハ一千五百二十萬八千四百圓ナリ。今日本ノ輸入税ハ北海道ノ物産税ヲ合シ僅カニ三百二十六萬六千六百五十六圓ナリキ。

十三、日本及普國ニ於テハ證券印税ノ設ケアリ。普國ノ收入額ハ四百萬圓ニシテ、日本ノ收入額ハ八十八萬六千三百三十六圓ナリ。該收入額ニ斯クノ如キ差異アルハ蓋シ普國ノ交通日本ヨリモ繁多ナルニ基因スルナラン。

十四、普國ニ於テハ遺物相續税アリ、其收入額百三十二萬五千圓ナリ。今日本ニ於テハ該税ノ設ケナシ。

十五、橋梁、津渡、港口、運河、藏敷、及積荷ニ用ユル機械等ノ諸税ハ日本ノ豫算書ニ掲載ナ

キガ故ニ未ダ其有無ヲ知ラザレバ姑ク之レヲ措キ、普國ニ於テハ該稅ハ漸ク廢棄ニ屬スト雖トモ尙ホ每歲五十九萬二千五百圓ノ收入アリ。

十六、普國ノ訴訟印紙料ノ收入額ハ千百六十二萬五千圓ニシテ、而シテ日本ニ於テハ僅カニ五十三萬五百七十六圓ナリ。普國ニ於テハ訴訟用印紙ヲ訴訟ノミニ使用セズ、遺言又ハ證據トナルベキ證書等ニ用ルガ故ニ其收入額モ亦日本ニ比スレバ雲泥ノ差異アリ

十七、日本ニ於テハ郵便稅アリ。其收入額ハ二百二十五萬二千七百八圓ナリ。而シテ普國ニ於テハ郵便ハ獨逸政府ノ管轄ニ屬スルヲ以テ其收入額ヲ記載セズト雖ドモ、千八百十二及八十三年ノ豫算表ニ據レバ獨逸國ノ郵便稅收入額ハ三千三百十二萬三千圓アリ。

十八、日本ニ於テハ獵銃稅、度量衡稅海外旅券其他免許手數料等ノ如キ國稅ノ部ニ屬スルモノアリト雖ドモ、此ノ收入額ハ至テ鮮少ナリ。蓋シ普國ノ銃獵稅ハ地方稅ノ部ニ屬シテ國稅ニ屬セズ。

日本ノ租稅組織ハ最近十七年間ニ於テ大ニ其準備ヲ爲セリ。殊ニ酒類及煙草稅ノ設定ノ如キハ理財上ノ一大進歩ト謂ハザル可カラズ。又之レト同時ニ種々ノ營業稅ヲ設定シ、營業者ヲシテ納稅ノ義務ヲ負擔セシメ、大ニ國家ノ稅入ヲ増加セリト雖ドモ、之ヲ普國ノ租稅組織ニ比スレバ尙ホ遠ク及バザルモノアルガ如シ。殊ニ直稅及間稅組織ノ如キハ實ニ不完全ナルモノナリ。

而シテ其不完全ナル所以ハ既ニ上項ニ之レヲ論述シタレバ復之レニ贅セズ。又日本ノ直稅收入額ハ間稅ノ收入額ヨリモ多シ。然ルニ獨逸及其他ノ文明國ニ於テハ之ニ反シ、間稅ノ收入ハ直稅ヨリモ多シ。蓋シ是レ直稅ニハ偏重偏輕ノ弊アルガ爲メニ多ク間稅ノ組織ヲ採用シタルニ因ルナリ。顧ルニ日本ノ消費稅殊ニ關稅組織ノ完全ナラザルハ日本ノ二百年間孤立シテ外交ヲ開カザリシガ爲メナラン。然ラバ則チ今日ノ關稅組織ハ開港以來漸ク其緊要ナルヲ認メ始メテ之レヲ設ケタルモノナレバ其不完全ナルハ固ヨリ論ヲ待タザルナリ。

日本ニ於テハ租稅組織ノ不完全ナルガ爲メ、人口ノ多キニ比スレバ其收入額最モ寡シ。人口ハ三千六百萬アリト雖ドモ其納稅額ハ僅カニ七千二十六萬七千七百七十六圓ナリ。普國ノ人口ハ二千七百二十七萬ニシテ其納稅額ハ郵便手數料ヲ除キ一億一千五百四十一萬九百六十六圓ナリ。其地方稅收入額モ亦之レニ準ジテ日本ニ過グルコト遠シ。蓋シ普國ノ人民ハ自國ノ事業盛大ナルニ因リ、過半能ク納稅シ得ルノ資力アル者ノ多キハ固ヨリ論ヲ待タズト雖ドモ、而カモ若シ租稅組織ニシテ整頓セザルアラバ何ゾ今日ノ如キ多額ノ收入アラシヤ。而シテ日本政府ノ收入額ノ斯ノ如ク寡少ナルハ多クハ組織ノ不完全ナルニ因ルナラン。今假リニ日本人民ノ稅額ヲ該人別ニ分課スルトセバ、一人毎ニ一圓九十五錢ナリ。而シテ今茲ニ各國ノ表ヲ比較セント欲セバ左ノ如シ。

佛國	十三圓六錢
英國	十圓六錢
澳國	八圓十九錢
露國	四圓七十二錢
獨國	三圓七十八錢

歐洲各國ハ概シテ租稅收入ノ外ニ多額ノ營業收入ヲ有スル殊ニ土地鑛山工商業鐵道電信郵便等ヨリ收入スル所ノモノ多シ。日本ニ於テハ租稅收入ヲ除クノ外、經常歲入ニ加フル收入額ハ僅カニ四百二十萬八千三百三十五圓ナリ。普國政府ノ營業收入額ハ二億千二百萬圓ニシテ、内千三百九萬三千圓ハ官林、七百二十萬圓ハ官有地、一億二千八百萬圓ハ鐵道ヨリ收入ス。然ルニ普國政府ニ屬スル山林及土地ハ之レヲ日本政府ノ所有ニ比スレバ最モ狹少ナリ。而ルニ日本ニ於テハ其收入額鮮少ナルニ因リ、偶々國家ノ一大事業ヲ起サント欲スルモ、其資力ニ乏シキガ爲メニ遂ニ之ヲ果ス能ハズ。蓋シ明治十二年ノ豫算書ニ據レバ其歲出額ハ僅カニ七千五百九十八萬二千五百六十二圓ナリ。而シテ歐洲各國ノ歲出額ハ千八百七十九年ニ於テ左ノ如シ。

佛國	五億九千六百萬圓
英國	四億二千七百五十萬圓

露國	五億三千二百五十萬圓
獨國	三億三千二十七萬五千圓
奧國	三億六百二十五萬圓
伊國	二億八千二百五十萬圓

前述ノ説明ニ因テ之レヲ觀レバ日本ノ租稅組織ハ自カラ之ヲ改正スルノ必要ナルヲ感ズルモノアリ。第一着ニハ農民ノ負擔スル地租ヲ減殺セザルベカラズ。又之レト同時ニ歲入額ヲ増加シ、且ツ一般ニ賦課ノ平均ヲ得セシムルノ方法ヲ設クルヲ緊要ナリトス。而テ此ノ目的ヲ達セント欲セバ直稅及間稅並ニ輸入稅ノ組織ヲ十分發達セシメザルベカラズ。直稅ノ發達トハ何ゾヤ、曰ク、一、收入稅、二、資本稅、三、家屋稅ヲ設定シ、四、營業稅ノ區域ヲ擴充シ、五、地租ヲ殺減スルニアリ。

凡ソ間稅タル者ハ之レヲ重加スルヨリモ寧ロ之ヲ輕減シテ需用多キ消費物ニ課スルハ理財上ニ於テ稷益多シトス。殊ニ之ヲ酒類、砂糖、煙草、鹽、石油等ニ課スルヲ以テ適當トス。而シテ佛國ニ於テハ稅ヲ紙ニ課セリ。其收入額ハ千四百四十二萬一千「フラン」ナリ。今日日本ノ間稅ニ就テ改正セザルベカラザルモノハ左ノ如シ。

一、砂糖ノ輸入稅ヲ重クシ、又内國ノ砂糖製造ニ課稅スベシ。

- 二、煙草税ノ賦課法ヲ完全ニシ、其收入額ヲ増加スベシ。
 - 三、鹽ノ輸入税及ビ内國ノ鹽税ヲ設定ス可シ。但シ鹽ハ消費物件中最モ要用ナルモノナレバ之レニ重税ヲ課スルハ其當ヲ得タルモノニアラズ。假令ヒ最モ輕税ヲ課スルモ鹽ノ消費量ハ最モ多キヲ以テ其收入額ハ必ラズ鮮少ナラザルナリ。
 - 四、日本紙ニ課税スベシ。蓋シ日本ノ紙ヲ消費スルノ額ハ歐洲ノ各國ヨリモ多シ。
- 以上直税及間税ノ改正案ニシテ其他地方税ノ修正ヲ要スルモノ多シト雖ドモ國税組織ノ整頓セザル以上ハ未ダ其修正ヲ圖ル能ハザルナリ。

パテルノストロ氏關稅ニ付答議

問

タリフハタツクスノ一ノ種類ナルヤ？
 若シタツクスノ一ノ種類ナリトナラバ、外國トノ條約ニ依リ、タリフヲ定ムルニ當リ之レヲ内國人ニモ適用シテ義務ヲ負ハシムル爲メニハ立憲國ニ於テハ議院ノ議ヲ經ルヲ要スベキヤ？
 (通商條約ハ議院ノ議ヲ經ベシトノ明文アル國ハ此ノ明文ノ示ス所ニ依ルベキノ外)

關稅タリフ率ハ如何ナルモノナルヤ、之レヲ約言スレバ即チ政府ガ或ル貨物若クハ商品ノ輸出
 入ニ對シ徵收スルコトヲ得ル關稅ヲ豫メ定メタル價格ノ表ナリ。
 行政法又ハ財政學ノ著者ハ嚴格ニ此ノ「或ル」ノ用語ヲ引用ス、何ントナレバ政府ガ特定ノ

貨物又ハ商品ノ輸出入ニ對シ、關稅ヲ徵收シ得ル爲メニハ其貨物又ハ商品ハ關稅ヲ課セラレタル、即チ關稅率ヲ定メラレタル物品ナルヲ要スレバナリ。

關稅ノ事項ハ左ノ二點ヨリ之レヲ研究スベキモノトス。

第一 經濟ノ點、自由貿易又ハ保護貿易ニ關連スル重大ノ問題（理論上ニ於テモ理論ト實際ト

ニ關ル適用上ニ於テモ）ニ關シテ

第二 財政ノ點、國庫收入ノ一源泉トシテ關稅ノ租稅タル性質ニ關シテ

關稅ヲ經濟及財政ノ二點ヨリシテ論ズルハ閣下ノ問題ニ關係少キヲ以テ、余ハ之ヲ論ゼザルベシ。然レドモ余ハ其ノ問題ノ第一部ニ對シテ答フルニ、關稅ハ租稅ノ性質ヲ有スルモノナルヤ否ニ付テハ未ダ異論ナカリシノミナラズ、又此後反對ノ論ヲ爲ス者ナカルベキコトヲ以テス。

實ニ人民ハ關稅ヲ間接稅ノ部類トシテ、又、國內ニ於テセズ、國境ニ於テ徵收セラル、眞ノ消費稅トシテ毫モ疑ヒナク之レヲ支拂ヒ來レリ。今關稅ハ租稅ノ包含スルモノタルコトヲ明示スル爲メニ考證ヲ求メ、以テ長文ヲ爲スハ閣下ノ倦厭ヲ來シ無用ノ事ニ屬スルヲ以テ茲ニ之ヲ贅セズ。

稅ノ設定、其目的、準率ノ成立、徵收ノ方法、單ニ財政上ノ結果其結果ノ保全ニ關スル經濟

上ノ結果、其他租稅ニ關スル問題攻究及難題ハ總テ關稅ニモ亦生ズルモノナリ。

此故ニ一般憲法ニ於テハ關稅ニ關スル一切ノ事項ヲ、又ハ通商條約ノ承諾ヲ立法權ニ委スルコト、爲シタリ。而シテ條約ノ協贊ニ關シ議會ノ權限ヲ規定シタル明文ナキ憲法ニ於テハ、關係ノ事項ニ從ヒ議會ノ權限ハ立憲制度ノ性質精神目的ニ依テ之レヲ定ム。故ニ余ハ左ニ英國憲法註釋（トッド氏ノ著）ノ一節ヲ抄録シテ其一例ヲ示サントス。

條約締結ノ權利

外國ト條約：：ヲナスハ君主ノ特種ナル權力ナリ。：：英國ニ於テハ此權力ハ全ク帝王ニ歸シ、責任大臣ノ助言ヲ以テ行ハル、モノトス。故ニ君主ガ如何ナル條約又ハ契約ヲ締結セラル、モ、英國内ニ於テハ何人ト雖ドモ適法ニ之レヲ延期シ取消シ又ハ之レニ抵抗スルコトヲ得ザルモノトス。但國家ノ名譽及利益ヲ毀損スベキ條約ヲ締結シタル場合ニハ、議會ニ對シテ大臣其責ニ當ルモノトス。條約締結ニ關シ議會ガ憲法上有スル權力ハ制限セラレタルモノニシテ、議會ノ制可又ハ認定ハ條約ニ効力ヲ與フル條件トシテハ必要ナラザルモノトスト。

然レドモ「トッド」氏ハ付言シテ曰ク。

是等ノ事ニ關シ議會ノ有スル正當ナル權力ハ要スルニ下ノ如シ。第一議會ハ條約ヲ實行ス

ルニハ立法的議定ヲ要スル條約ノ部分ニ對シテ承諾ヲ與ヘ、又ハ與ヘザルノ權力ヲ有ス。
 例ヘバ條約ニ於テ現行ノ關稅率又ハ通商規則ヲ變更スルコトヲ提起スル場合ノ如シ。第二
 ……然レドモ條約ニ効力ヲ與ヘン爲メニ議會ニ提出セラレタル議案ニ對シ、議會ハ之レニ
 同意シ又ハ否決ヲ爲スヲ得レドモ、少シモ議案自身ヲ變更加除スルノ權力ヲ有セズ。
 若シ條約ヲ施行スル爲メニ立法行爲ヲ要スル場合ニ於テハ、政府ヲシテ重大ナル利益ヲ有
 効的ニ増進セシムルヲ得セシムルノ目的ヲ以テ、國家ノ外交政略ノ變更ニ對シ其條約ハ充
 分ニ討議ニ付セラルベシ。

(右兩項ハトツド氏ノ原文ニ於テハ轉置セリ)

何故ニ此ノ如ク謂フカ、曰ク若シ一權力(王權)ニシテ其條約締結權ノ執行ニ依リ、法律ニ
 依ルニ非ラザレバ變更シ若クハ制定スル能ハザル事項(例之租稅及租稅ノ包含スル關稅率)ヲ
 專斷以テ變更シ、若クハ制定スルコトヲ得ルトセバ是即チ立憲制度ノ精神目的擔保ニ背戾スル
 ガ故ナリ。

諸國ノ憲法中條文ノ明哲ヲ缺キタル場合ニ於テモ、此事タルヤ解釋上毫モ疑ヒヲ容レザル所
 ナリ。

例ヘバ伊國憲法第五條ニ曰ク。

行政權ハ國王一人ニ屬ス。

國王ハ國ノ元首ニシテ戰ヲ宣シ和親同盟及通商等ノ條約ヲ締結ス。然レドモ國益及國安ニ

關スル條約ハ議院ニ通知ヲ爲シ且ツ之ニ理由ヲ附スベシ。

國財ノ負擔タル若クハ國疆ヲ變更スル條約ハ兩院ノ承諾ヲ得ルニ非ラザレバ其効力ヲ有セ
 ズト。

我憲法ノ第五條ハ夫レ斯ノ如シ。故ニ其條文ニノミ據ルトキハ國財ノ負擔タル、若ハ國疆ヲ
 變更スル條約ニ非ザレバ國王ハ議院ニ通知シテ通商條約又ハ其他ノ條約ハ臣民ニ對シ執行力ヲ
 有スルモノ、如シト雖ドモ、此ノ如キハ決シテ本條ノ意義ニアラザルナリ。抑モ立法權ノ權限
 ニ屬スル事項ハ、其立法權ノ協賛アルニ非ザレバ効力ヲ有スルコトヲ得ザルハ、是レ立憲制度
 ノ真相ナリ。而シテ關稅率ハ此等ノ事項中ニアルモノナリ。何トナレバ租稅ノ價額ヲ設定若ク
 ハ變更スルモノナレバナリ。

眞ノ立憲國ニ於テ此ノ事ニ關スル問題ハ生ズルコトナシ。我ガ伊國ニ於テハ立法事項ニ關ス
 ル條約若クハ通商條約ハ議院ノ協賛ヲ得ザレバ何等ノ効力ヲ有セザルナリ。而シテ國財ノ負
 擔ナル言辭ニ就テハ、一定精確ノ解釋アリ。即チ國財ノ負擔ニアラズシテ相殺シテ利益ヲ得タ
 ル財政上ノ支出ヲモ包含スルモノナリト謂フノ解釋是レナリ。

我議院ハ其承諾ヲ有スル條約ヲ討議ス、然レドモ議院ハ條約ノ締結ニ與ラザルヲ以テ、其條約ヲ變更スルノ權ヲ有セズ。故ニ議院ニ於テ其承諾ヲ拒ムヲ得、而シテ此場合ニハ其條約ハ効力ナシ。然レドモ條約ノ儘ニ承諾シタル場合ニ於テハ効力ヲ生ズ。

今路易十八世ノ欽定憲法ヲ引用シ以テ一例ト爲サンニ、其前文ニ、佛國王ハ天祐ニ依リ憲法ヲ布キ佛國王權ノ全力時世ノ必要並ニ人民ノ希望ニ應ジタル執行權ノ制限ヲ宣言シ云々トアリ。此ハ欽定憲法ハ一層明了ナル先例ヲ吾人ニ與ヘタルモノト信ズ。實ニ其第十四條ニ曰ク、國王ハ國ノ元首ニシテ陸海軍ヲ統帥シ、戰ヲ宣シ和親同盟及通商ノ條約ヲ締結シ、文武官ヲ任命シ規則命令ヲ發スベシ云々ト。

條約締結ニ關スル職權ヲ制限シ又ハ兩議院ニ通牒スベキコトヲ命ジタル條章ノ存スル者ヲ見ズ。然レドモ王政復古時代ニ於テハ關稅率ニ付キ種々沿革ノ見ル可キ者アリ。關稅ニ關スル一切ノ事項ハ議院ニ送付シタリ、如何トナレバ欽定憲法第四十八條ニ兩議院ノ承諾及國王ノ認可ヲ經ルニ非ラザレバ、如何ナル租稅ト雖ドモ之レヲ設定シ之ヲ徵收スルヲ得ズト云ヘリ。

「ナポレオン」三世ノ時代ニ於テ、憲法上元首ハ通商條約ヲ締結スルノ權ヲ有スルヲ以テ、直チニ關稅率ニ法律ノ効果ヲ付與シ得ル者ナリトノ法律上ノ解釋行ハレタルハ無比ノ先例ナリ。是レ一方ニ於テハ「クローデター」ト謂フ可ク、又一方ニ於テハ憲法法理上不當ナル解釋ニ

冠スルニ更ニ立憲制ノ假裝形式ヲ以テシタルモノナリ。

千八百五十二年正月十四日、共和大統領「ナポレオン・ボナパルト」ノ時世ニ布告セシ憲法ニハ左ノ二條ヲ記載セリ。

第六條 大統領ハ國ノ元首ニシテ云々、講和同盟通商條約ヲ締結ス。

第二十七條 元老院ハ其院令ヲ以テ左ノ件々ヲ規定ス：云々

二、凡テ憲法上規定ノ存セザル場合ニシテ憲法ノ施行ニ必要ナル事項

三、種々ノ解釋アル憲法條項ノ疑義：元老院ハ又違憲ノ法規ヲ廢毀スルコトヲ得

千八百五十二年十一月七日元老院令ニ付テハ帝國政府ハ共和政府トナリ、憲法中幾多ノ條項ヲ改正セリ。其外十二月二十五日元老院令第三條ニ曰ク、憲法第九條ニ從テ定メタル通商條約ハ關稅率ノ變更ニ關シテモ亦法律ノ効力ヲ有スト。

凡ソ斯ノ如キ者皆違憲背法トス。其違憲タルハ解釋ノ形式ヲ以テ務メテ之レヲ蔽ハントスルヲ以テ知ルベキナリ。憲法々理上ニ於テモ之レヲ辯明シ能ハザル所ナリ。蓋シ疑點ヲ解釋スルノ任ヲ有スル團體ノ解釋ハ正當ト認ムルヲ得ベク、又是認セザルヲ得ズト雖ドモ、明瞭ニシテ然カモ一ノ疑ナキ點ニ付キ、如何ニ法律上解釋ノ形式ヲ以テ憲法ヲ誤ラントスルモ是認スル能ハザル可シ。余ハ唯憲法ノ解釋上ニ付論ズル而已、如何トナレバ此一小「クローデター」ノ結果

ニ關シテ余ハ佛國ガ當時議院ノ保護派ノ陋説ヨリ脱却シ得タルハ經濟上ノ發達ニ最大ノ幸ナリシコトヲ知ル。然レドモ政治上ノ事實及ビ效果ハ吾人ノ知ル所ニ非ラズ、右ノ事實ハ當時國民ガ實際元首ニ附與シタル全權ニ依リ生出スルヲ得タル者ナリ。其他ノ場合ニ在テハ是レ不注意ノ事ニシテ、又決シテ起ラザルベキナリ。上來余ハ暗ニ閣下ガ諮問ノ其ノ二ニ應答シタルモノト信ズ。

大日本憲法ニ於テモ余ハ條約ニ於テ定ムル關稅率ノ變改ニ付其效果ヲ有セントセバ議院ノ協賛ヲ經由スルヲ要スト信ズ。是レ唯ニ立憲制ノ真相タルノミナラズ、條約締結ニ關スル天皇ノ大權及議院權利ノ劃然タル區域ニ基ク、又實ニ憲法ノ總テノ條文(殊ニ四條(末項)五條、九條、十三條、第二章重モニ二十一條、及六十二條)ノ調和及關連ヨリ起ルモノナリ。適法ニ締結批准公布シタル條約ハ憲法ニ於テ別ニ他ノ認可ヲ必要トセザル時ハ、直チニ法律ノ力アルベキモ、尙ホ他ノ認可ヲ求ムルヲ要スルハ單ニ憲法正條ノ明文アルガ故ニ非ズ。立法權ノ作用ニ出ヅル法律ヲ以テスルニ非ザレバ設定變更廢止スル能ハザル事項ニシテ、現行ノ法律ニ依テ規定セラレタル者ナルトキハ假令明文ナシト雖ドモ其事物本來ノ性質ヨリ之レヲ要スベキ者トス而シテ

大日本天皇陛下ハ議會ノ協賛ヲ經由スルニ非レバ立法權ヲ執行スルコト能ハザルハ明カナリ。

故ニ條約ハ立法權ノ干涉ヲ要スベキ部分ニ關シテ議會ノ贊成ナキトキハ法律ノ効力ヲ有セズ。議會ハ之レニ協賛スルト否トノ權アルハ勿論ナリ。然レドモ條約面ニ記載セラレタル條項ヲ變更スルノ權ナク、採用又ハ拒否ノ二途アルノミ。

以上ノ陳述ヲ以テ閣下ノ諮問ニ對スル余ノ意見ヲ了セリ。

議會ハ條約ニ依リ定メタル關稅率ノ變更ヲ認ムベキハ余又疑ハズ。議會ニ於テ實際上ノ困難ト學理ノ討議ヲ惹起セザラシムルノ方略ニ至テハ閣下能ク之レヲ知ル。此政策ニ付テハ余ハ別ニ管見アリ。他日閣下ト相見ルノ日學理講話ノ好問題トシテ閣下ノ意見ヲ聽クヲ樂ム。

問

タリフノ件ニ付テハ已ニ詳細ノ教ヲ領シタルヲ感謝ス、今更ニ左ノ問題ニ付キ答示ヲ請フ。

タリフノ定ハ各國ノ國法ニ屬スベキモノナルヤ?

近來ノ多クノ行ハル、慣例ニ依レバ、ムシロ國際上ノ約^{コンベンション}東ニ依リテ成立ツモノ、如

シ。是レ便宜上又ハ其ノ國特別ノ事情ニ起用スルモノナルカ、又ハ近時國際法ノ現用例トシテ看ルベキヤ？

五月一日ノ貴問ニ答フ

關稅率ハ一般關稅率タリスジエネラル（又獨立關稅率トモ云フ）及條約關稅率ノ二種ニ分ツコトヲ得ベシ。

各國ハ其ノ自由貿易主義ヲ奉ズルト保護貿易主義ヲ採ルトニ從ヒ、又己レニ有利ナルカ或ハ有利ナリト信ズルニ從ヒ、其ノ徵收セント欲スル關稅ニ關ル事項ヲ規定セリ。而シテ一般關稅率ハ其表記及價額ヲ示シタルモノナリ。此ノ稅率ハ其ノ通商條約ヲ締結セザル諸國ヨリ來ル所ノ商品ニ適用スルモノニシテ、通商條約ニ依リ此ノ規定ノ例外ヲ作ラザル限りハ之レテ適用スルモノトス。勿論國家ハ一ノ一般關稅率ヲモ有セズ、而シテ關稅ヲ支拂ハズシテ總テノ商品ヲ輸入セシムルコトヲ得ベク、又ハ條約關稅率ノミヲ有シ又ハ條約關稅率ニ依リ其効力ヲ中止シタルガ爲メ實際死文トナリタル一般關稅率ヲ有スルコトヲモ得ベシ。

條約稅率ハ之レニ反シテ諸種ノ條約ニ依リ約定シタル稅率ナリ。

一般稅率ヲ奉ズルト條約稅率ニ依リ此ノ規定ノ例外ヲ作ルトハ孰レカ一國ニ適當ナルヤノ問

題ハ經濟諸家ノ未ダ其說ヲ一定スル能ハザル所ナリ。此ノ點ニ付テモ各國ハ其ノ利害ノ裁判官タラザルヲ得ズ。余ハ此ノ重要ナル經濟問題ニ論及スルコトハ此ノ事ノ足下ヲ益スル時ニ非レバ之レヲ爲サザルベシ。但シ實際ニ余ハ諸國ガ保護貿易ノ傾向ニ依リ其ノ一般稅率ヲ定ムル時ニ當ツテハ、諸國ノ利害ヲ可成的公平ニ調和スル爲ニハ條約稅率ハ甚ダ必要トナルベキヲ信ズ。故ニ各國ヲシテ條約稅率ヲ採ルニ至ラシムルハ各國工商業ノ相互ノ便益ノ然ラシムルモノナリ。

各國悉ク保護貿易ノ誤謬ヲ了解スルニ至レバ、條約稅率ハ其ノ必要及今日此ノ稅率ヲ採擇セシムル所ノ利益ヲ示サザルニ至ラン。

之レヲ要スルニ一般稅率ニ例外ヲ作ラザルコトモ條約稅率主義ヲ採擇スルコトモ、皆現用例ノ如ク、又ハ各種ノ場合ニ於ケル各國ノ明白ナル便宜ノ如ク見做スヲ得ベシ。

各國ハ其ノ利害ノ裁判官ニシテ其ノ希望ヲ自由ニスルモノナリ。現時ノ有様ヲ見ルニ一國ニシテ他國ノ報酬（相互主義）ヲ要求スルコトナクシテ自國ノミ自由貿易ヲ採ルコトヲ厭ハザル限りハ條約稅率ヲ採擇スルニ至レリ。

一般稅率ノ討究ハ（我ガ商業政略ノ主義如何ナルトモ）條約ヲ結バザル諸國ヨリ來ル商品ニ之レヲ適用スル爲メ、又通商條約期限盡キテ更ラニ約定セザル場合ニ之レヲ適用スル爲メ、又

一國ノ利害及經濟上ノ位地ヲ了知シ、我ガ稅率ノ基本（條約稅率ノ場合ト雖ドモ）ニ付一層適當ナル方法ヲ探知スル爲メ甚ダ要用ナルベシ。此ノ討究ハ諸國政府ガ攻撃ノ衝ト爲リタル最難事ノ一ナリ。

パテルノストロ

問

國際法ト國法トノ關係ニ付テハ公法諸家ノ說未ダ全ク一致ノ點ニ歸セザルガ如シ。或人ハ（獨逸ノ「ロベルト・フオン・モール」氏ノ如シ）國際法上ノ地位ハ外國ニ對シテ專ラ國ノ主長ニ歸ス。故ニ代議體ノ協贊ノ有無ニ拘ラズ外國ハ主長ニ對シテ權利義務ヲ有スト論ジタリ。

縱令多クノ公法學者ニ從ヒ、國家ノ代表權ハ其ノ國憲ノ規定ニ從フベク、對手國ハ條約ヲ締結スル前ニ國憲上ノ規定ニ從ヘル代表權ナルコトヲ推測スル者ナリトノ說ヲ採用スルモ、我ガ憲法十三條ハ明文ヲ以テ條約締結ノ權ヲ絕對的ニ君主ノ專有ニ歸シ、一モ制限ヲ置カズ。何等ノ場合モ議會ノ協贊ヲ要スルコトヲ著サズ。而シテ獨リ推理

法ニ依リテノミ國法ヲ變更シ又ハ廢止スルノ條約ハ議會ノ協贊ヲ經ザルハ其ノ効力ヲ有セザルコトヲ論斷スルコトヲ得ベシ。

如此ハ法理上ニ於テ疑點ヲ存セズト雖トモ、國際上ノ實際ニ於テ往々困難ヲ生ズルコトナシトセザルベシ。此ノ困難ヲ避クル爲メニ適當ノ方法アリヤ、貴下ノ高見ハ如何

又六十三條ヲ以テ十三條ノ制限ナリト判斷シ得ベキヤ如何？

千八百九十一年五月十八日ノ貴問ニ答フ

憲法及國際法ノ間ニ一致ヲ缺クコトヲ認許スベカラズ。此ノ兩者ノ間ニ牴觸アル場合ニ於テハ、一般ノ規則トシテ國際法ハ憲法ノ上ニ立ツモノト認ムベカラズ。場合ニ依リテハ其牴觸ニ付キ法理ノ判斷ヲ要スルコトアリ、又ハ相讓ヲ以テ一致スルコトアリ。

國際法ハ憲法ヲ爲スモノニアラズ、單ニ國家ヲ有リノ儘ニ承認スルモノナリ。而シテ外國ニ對シテ國家ヲ代表スルノ權利及義務ハ其ノ國家諸機關中如何ナルモノニ存スルヤ、又此ノ代表權ノ條件及制限ハ如何ナルヤヲ決定スルハ各國ノ公法ナリ。

國際上ノ關係ニ於テハ各國ハ其ノ公法ニ依リ規定セラレタル一外國ノ代表機關ヲ認メテ其外國ヲ代表スル（故ニ條約ヲ締結シ國家ヲ羈約スル）コトヲ委任セラレタルモノト爲スナリ。此ノ如ク認ムル外他ノ道アルコト能ハズ。何ントナレバ各國ハ此ノ外國トノ關係ニ於テ此ノ外國ノ對外機關即チ代表者ニ與フルニ此ノ外國ノ公法ニ依リ其代表權ニ付シタル條件及制限ノ外一ノ權力ヲ以テスルコト能ハザレバナリ。要スルニ真正ノ理論ハ以上陳ブル所ニ過ギズ。之レト相合セザル所ノ總テノ理論ハ空論ト做サルベカラズ。何トナレバ之レ等ノ理論ハ原則上必要ナル論理ヲ度外視スルノミナラズ、亦今日到ル處ニ承認セラレタル憲法學及其ノ適用ノ大發達ヲ觀察外ニ置クモノナレバナリ。

今ヤ余ハ足下ノ問題ニ對シ此ノ理論ノ適用ヲ試ミントス。

實ニ條約ハ國家ヲ代表シ及羈約スルコトヲ委任セラレタル者ニ限り締結シ及批准セラレタル時ニ完結スルモノナリ。然レドモ其ノ國憲ニシテ他ノ協賛ヲ要スルニ於テハ、此ノ條約ハ直チニ執行セラル、能ハザルコトヲ會得セザルベカラズ。一國政府ハ必要ノ協賛ヲ得ルガ爲メニハ法律規定ノ上ニ其ノ權限ニ屬スル一切ノ事ヲ正當ニ施措スルノ德義的義務ヲ有スルモノナリ。何ントナレバ政府ハ輕卒ニ動作シ、其ノ執行ニ必要ナル協賛ヲ得ルノ望少キ條約ヲ締結シ、就中批准スルコトヲ得ザレバナリ。政府ハ其ノ有スル憲法上ノ權力ノ外ニハ國家ノ積極的責任ヲ

約束スルコト能ハザルナリ。

或ル論者ハ曰ク、他國ノ公法上條約ヲ締結シ及批准スルコトヲ委任セラレタル機關ニ依リ、其ノ國ト契約シタル國家ハ其ノ條約ノ執行ヲ請求スルノ權利ヲ有ス。何ントナレバ『契約ヲ爲シタル國家ハ他國ノ元首ガ輕卒ノ批准ヲ爲シテ其ノ國法ヲ侵犯シタルヤ否ヤヲ探究スルノ義務ナク、批准アリタル後ハ條約ハ完結シ執行セラルベモキノトナリ、且ツ之レヲ執行セザルベカラザレバナリ』ト。

余ハ此ノ論者ノ理論ハ憲法學ノ發達ト矛盾スルコトヲ再言セントス。此ノ理論ハ何レノ點ヨリ見ルモ誤謬タルヲ免カレズ。余ハ之レヲ誤謬ナリトス。何トナレバ該論者ト雖トモ國家ヲ羈約スルノ資格（憲法上ノ資格）ヲ有シタル人ニ依リ締結批准セラレザル以上ハ、條約ハ成立セザルコトヲ承認セザルヲ得ザルベシ。既ニ之レヲ承認スル以上ハ、契約ヲ爲ス所ノ國家ハ條約ヲ締結、批准スルノ資格ヲ有スル機關ハ何物ナルヤヲ知ル爲メニハ、各々他國ノ公法ヲ知悉スルノ義務及事實アルコトモ承認セザルベカラズ。各國ハ締結批准ノ資格ヲ有スル機關ニ付テハ他國ノ公法ヲ知悉スルモノト見做サレタリト言ヒナガラ、此ノ機關ノ資格ニ關スル國法ノ條件及制限ヲ知悉セズト見做サレタリト言ハバ、豈ニ不理ノ甚シキモノニアラズヤ。理論上此ノ如ク不理ナルモノハ實際上ニ於テモ亦不當ナリ。第一本問題ハ國家元首ガ法律ヲ

侵犯シタルト否トヲ言フニアラズシテ、條約ノ執行ニ關シ一國公法ニ依リ國家元首ニ付與シタル權力ニ對スル同一公法ノ條件及制限ヲ云フモノナリ。而シテ對手タル他ノ國家ハ其ノ契約ヲ爲シタル國家ノ公法ヲ知悉セリト見做サレタリ。何ントナレバ若シ其ノ國ノ内國公法ヲ知悉セザランカ、其ノ契約ヲ爲サントスル國家ノ國際上ノ機關ト定メラレタルモノハ何者ナルヤ、又如何ナル點マデ權力ヲ有スルヤモ亦知悉スルコト能ハザルベシ。第二實際ニ於テ契約ヲ爲ストコロノ（後ニテ協賛ヲ得ルヲ要スル）國家モ亦之レト契約スル國家モ共ニ他ノ條件ナキ以上ハ條約ハ執行セラルベキモノナリト見做スベシ。批准ハ條約ヲ完結シ其ノ執行ニ付憲法學上ノ障害アラザル以上ハ、暗ニ執行セラルベキモノト爲スモノナリ。然レドモ若シ後ニテ執行ニ必要ナル條件（假令ヘ之レヲ明言セザルモ豫想スルコトヲ得）即チ協賛ヲ得ザルトキハ、條約ハ執行セラレズ、而シテ對手國ハ其ノ執行ヲ要求スルコトナシ。若シ之レヲ要求スルコトアルモ此ノ要求ハ他ノ對手國ノ爲メニ抗言セラルベシ。

學問上ニ於テモ亦此ノ點ニ付其名ノ存スルアリ。國憲ニ從ヒ議會ガ條約ヲ協賛スル前ニ國家ノ元首ニ依リ與ヘラレタル批准ヲ名ヅケテ不完全ノ批准ト云フ。

實際 上諸國ハ條約執行ノ義務ニ關シテハ條約ヲ豫想シテ運動スルモノナリ。故ニ批准ノ後法案ヲ議會ニ付シ協賛ヲ求ムルヲ常トス（英國ノ如キ常ニ然リ）此ノ手續ヲ見テ甚ダ不

可ナル方法ナリト論ズル者アリ。余モ亦之レヲ至當ノ論ナリト信ズ。何トナレバ君主ノ批准ヲ執行スル能ハザラシムルコトナシト云フベカラザレバナリ。然レドモ此ノ手續ヲ見テモ原則上及實際上真正ノ理論ハ如何ナルヤヲ知ルコトヲ得ベシ。何トナレバ政府ヲシテ憲法ヲ侵犯シテ運動スルノ希望ヲ懷カシムルコト能ハザレバナリ。故ニ君主ハ條約ヲ批准スト云フトキハ君主ハ之レヲ執行スルノ義務ヲ負ヘリト云フノ意義アルモノナリ。然レドモ若シ執行ノ成否ハ其ノ權力以外ニ在ルトキハ（憲法政治ノ國ニ在テハ）其ノ義務ハ中絶スルモノト豫想スルヲ常トス。此ノ真正ノ理論ニ付近世學者ノ著述少カラズ、此等ノ學者ハ常ニ事實上有ル所ヲ觀察シ敢テ空論ニ涉ルコトナシ。余ハ左ニ其中ノ二著ヲ指定スベシ、即チ「カルボー」（國際法第一卷六六五、六六六、六六七頁）及「プロヂエ、フォデレ」（國際法第一卷一一六、六項七七三頁以下）是ナリ。此ノ二著ニ曰ク

『不完全ノ批准ハ憲法學上甚ダ厭フベキ事ナルコトハ何人モ異論ナカルベシ。何トナレバ立法權ハ既成ノ事實ヲ議決スルトアラズシテ將ニ成サントスル事實ヲ議決スベキモノナレバナリ（余ガ甚ダ厭フベシト認ムルハ「プロヂエ、フォデレ」ト同一ノ點及同一ノ方法ニ於テスルニアラズ、余ハ將ニ成サントスル憲法ヲ觀察スル者ナリ。數多ノ既成（現行）憲法ニ於テハ或ル種ノ條約ニ限り立法權ノ協賛ナキトキハ執行スルコトヲ得ザルコトヲ除ク

外、條約ニ關スル總テノ事ヲ充分ニ國家元首ニ委任シタルコト明カナリ。然レドモ結論ニ於テハ執行義務ノ最終ノ結果ニ付テハ同一ナリトス。何ントナレバ憲法上ノ君主ノ批准ハ或ル場合ニ於テ其性質上條件附ノ批准ナレバナリ。(尤モ現行憲法中ニ於テモ稍ヤ厭フベキノ度ヲ減ズルモノ亦之ナシト云フベカラズ) 豫メ立法權ノ協賛ヲ要スル所ノ根本法ニ從ハント欲セバ行政權ハ急卒ニ批准スルコトヲ謹マザルベカラズ。若シ然ラズシテ議會ガ國憲ニ從ヒ協賛ヲ爲スノ前ニ條約ヲ批准スルコトアルモ、予ハ其ノ契約ヲ爲サントスル國家ニハ條約ノ執行ヲ要求スルノ理由アリト認ムルコト能ハズ。條約又ハ其約款中ノ或ルモノニ付憲法上議會ノ最終ノ制可ヲ要スル國ニ於テハ、國家元首ノ批准ハ當然存スル所ノ一條條件タルニ過ギズシテ、別ニ明文ヲ以テ之レヲ付與スルノ必要アラザルナリ。契約者タル國家ハ其條約シタル國ノ公法ノ規定ヲ知り、而シテ其ノ契約ノ成立ニ必要ナル制止條件ヲ知ラザルコトナシ。實ニ契約者タル國ハ外國政府ガ果シテ其ノ國法ヲ侵犯シタルヤ又ハ尊敬シタルヤヲ審査スルヲ要セズ、然レモ其ノ契約ヲナシタル國ニ於テハ條約ノ成立及効力ハ立法權ノ協賛ナル制止條件ニ從屬スルヤ否ヤヲ知り又知ラザルベカラズ(プロヂエ、フオデレ) 『此ノ如キ牴觸ハ一例トシテ千八百三十一年七月七日、佛國及北米合衆國間ノ要求ヲ規定スル爲メニ巴里ニ於テ締結シタル條約ヲ引證スル者アリ。此ノ條約ノ批准ハ千八百三十二

年二月二日ニ於テ交換セラレタリ。其批准ノ後佛國ニ於テハ條約ニ於テ規定シタル償金ノ支拂ニ付必要ナル經費ヲ請求スル爲メ、其ノ條約ヲ立法權ノ審議ニ付シタリ。然ルニ其ノ經費ハ代議院ノ爲メニ拒絕セラレタルガ故ニ、條約ハ執行スルコトヲ得ザルニ至レリ：合衆國政府ハ使節ヲ佛國政府ニ遣ハシ、信ヲ缺キ言ヲ食シタルコトヲ責メタリ。然ルニ巴里内閣ハ左ノ言ヲ爲スコトヲ躊躇セザリシナリ、曰ク『佛國ニ於テハ公共支出及徵稅ノ議決ハ立法權ノ職權ナルガ故ニ、金錢上ノ約款ヲ包含スル所ノ總テノ條約ハ兩議院ノ制可ヲ得タル後ニアラザレバ執行セラルベキモノトナル能ハズ。此ノ條件アルガ故ニ國王ノ批准ハ條約ヲ確定スルニ足ラズシテ、條件附ノ結果ヲ與フルニ過ギズ。然レドモ政府ハ又德義上ノ義務ヲ有ス、故ニ條約ノ協賛ヲ得ル爲メニ再ビ議院ニ求ムル所アルベシ』ト(次會期ニ於テ協賛ヲ得タリ)：而シテ合衆國モ亦充分ノ權利ヲ有セザリシナリ。一般ノ規則ニ於テ批准セラレタル條約ノ効力ハ全ク各國內國法ノ規定ニ從屬セリ：故ニ本問題ニ於テモ合衆國ハ償金ニ關スル條約ノ批准ヲ交換シタル後、佛國政府ガ負フ所ノ法律上ノ義務如何ヲ知ラザルベカラザリシナリ。又自國憲法中或ル種ノ國際契約ニ付テハ元老院ノ同意ヲ以テ、大統領ニ依リ批准セラレタル後ト雖ドモ尙ホ國會全體ノ一致ヲ要スルコトヲ明文ヲ以テ規定セラレタル以上ハ合衆國モ亦甚ダ強ユルコト能ハザリシナリ(「カルボー」、「フオ

デレシ

「君主ノ批准權ハ何レヨリ來ルカ、明ニ各國ノ内國憲法ヨリ來ルモノナリ。而シテ此ハ主權ノ執行ハ此ノ憲法ニ依リ廣クセラレ、狹クセラレ、又有効條件ニモ從屬セラルハコトアリ。故ニ君主ハ己レヲ支配スル所ノ公法ニ依リ規定セラレタル境域、制限ノ内ニ於テ批准ヲ爲スコトヲ得。而シテ國內及國外ニ於テ公法ヲ遵守シ、及尊敬セシムルノ特別職ヲ務有セリ云々。然レバ立憲國ニ於テ君主ノ批准權ハ憲法上ノ價值ヲ與フルニ過ギズシテ、常ニ條約ニ對シテ其ノ執行ノ價值ヲ與フルモノニアラズ。君主ハ德義上其有スル權力ニ付充分ノ結果ヲ得ル爲メニ如何ナル勞苦、如何ナル注意ヲモ辭セザルノ義務アリ。然レドモ國民全體ハ其名義ヲ以テ爲シタル約束ニ付キ憲法上ノ同意ヲ與ヘザル間ハ其條約ノ爲メニ羈束セラレタリト見做スベカラズ。故ニ國民ハ憲法上實施スベカラズト認メラレタル條約ハ假令批准セラレタリト雖ドモ之レヲ執行スルノ責任ナク又義務アルコトナシ」(カルポー)

以上ハ法理上眞正ノ判斷ナリ。

實ニ政治ヲ行フニ付テハ注意ヲ要スル所ノモノアリ、議會ハ憲法上其ノ議ニ付セラレタル條約ノ協贊ヲ拒ムコトヲ得、而シテ對手國ハ其ノ執行ヲ要求スルノ權利ヲ有セズ。然レドモ協贊ノ拒絕ハ宛モ批准ノ拒絕ノ如ク兩國間ノ關係ヲ破ブルニ至ラザルモ、之レヲ困難ナラシムルコト

ト少ナカラズ。故ニ善ク政治ヲ行ハント欲セバ國家ノ元首ヲシテ後ニ協贊ヲ得ルノ疑ハシキ條約ハ輕卒ニ之レヲ締結セザラシメ、又議會ヲシテ協贊ノ拒絕ヨリ生ズル内國及國際上ノ關係ヲ充分ニ研究セシムルヲ要ス。國家元首ガ締結セント欲シ、又ハ締結シタル後協贊ヲ得難キノ憂アル條約ニ關シ、内國及國際上ノ困難ヲ避クル爲メニ適當ノ方法アルヤ否ヤニ付足下ハ予ノ答辯ヲ求メラレタリ。

政治上ノ實際ニ於テ常ニ適當ナル又ハ常ニ不適當ナル方法ナシト信ズ。此ノ方法又ハ彼ノ方法ノ適用ハ憲法ノ性質、其ノ結果、遭遇セル特別ノ場合、其ノ他ノ事情等ニ從テ異ナラザルベカラズ。

議院政治ノ國ニ在テハ内閣ハ多數黨派ニ屬セリ。故ニ多數者ハ内閣ガ黨議ニ違反セザル限ハ之レヲ助ケテ總テノ困難ヲ避ケシムルコトヲ務ム、而シテ國際上ノ關係ニ於テモ亦然リトス。其ノ他ノ立憲國ニ在テハ條約締結前ノ注意、國務大臣ノ權力、君主ノ注意深ク且ツ巧ミナル干涉、議會及國內(議院解散ノ場合ニ於テ)ニ於ケル輿論ヲ正確ニスルコト、新聞紙ヲ利用シテ輿論ヲ作ルコト少クモ協贊ヲ得ント欲スル問題ニ付國益(總テノ他ノ觀察ニ對シ勝ヲ制スルモノ)ヲ名トシテ議院中ノ最有力者ト豫メ協同スルコト此等ハ巧ニ利用スルニ於テハ總テ適當ノ方法ナリ。

以上ハ議會トノ關係ニ付テ云フモノナリ。

此ノ他政府ガ或ル場合ニ於テ自由ニ爲シ得ル所ノ一大方法アリ。即チ議會ニ對シテ自ラ有スル權勢及信用ニ依リ、又ハ巧ミニ好機ヲ利用シテ一ノ特定ノ事件ニ付全權委任ノ法律ヲ作ルコト是レナリ。(立法上ノ委任)予ハ敢テ行政權ニ對スル立法權ノ委任ニ付憲法學上ノ問題ニ論及スルニアラズ(此ノ問題ニ對シテハ諸憲法ノ明文精神又ハ實際ニ從ヒ種々ノ答辯アルコトヲ得)予ハ何人モ承認スル所ノ委任(但シ憲法ノ明文、精神又ハ實際ニ於テ之ヲ排除スルトキハ此ノ限リニ在ラス)議院政治ノ國ニ於テモ(假令バ伊國ノ如キ)其例少ナカラザル委任ニ付テ云フ者ナリ。

國際上ノ關係ニ付テハ總テノ困難ハ左ノ方法ニ依リ排斥スルコトヲ得ベシ。

- 第一 立法權ノ同意ヲ得ルノ條件ヲ以テ後ニ批准ヲ與フルコトヲ明カニ規定シ、
- 第二 前ニ批准ヲ與フルコトトスルモ、確定ノ爲メ立法權干渉ヲ要スル事件ニ付テハ立法權ノ同意ヲ得ルノ條件ヲ以テ條約ヲ執行スルノ義務アルコトヲ明カニ規定ス。

日本憲法ニ關シテハ予ハ先ニ差出シタル書狀中ノ一ニ於テ既ニ詳述シタリ(新條約ニ依リ關

稅ヲ變更スルコトニ付キ)第十三條ノ解釋ニ付テハ如何ナルモノヲ以テ正當ナリトスルヤ、本條ハ憲法中ノ他ノ條ヲ離レテ及明ニ立憲(即チ制限セラレタリ)君主國ノ元則ニ適合シタル貴國憲法全體ノ意義ヲ離レテ觀察ヲ下スベカラズ。第六十二條ニ關シテハ天皇ニ依リ適法ニ締結批准公布セラレタル條約ハ、國ニ對シテ法律トナルガ故ニ、第六十二條ハ其ノ憲法學上ノ勢力ヲ第十三條ノ結果ノ上ニ及ボサズト云フヲ得ズ。條約ハ國ニ對シテ遵奉ノ義務ヲ與フル所ノ法律トナルハ實ニ然リ。然レドモ總テハ事項ガ條約ノ結果ニ依リ法律トナルト云フニ至テハ、未ダ正當ノ言ナリト云フベカラズ。條約ハ國法ノ一部トナルハ實ニ然リ。然レドモ條約ガ國法ハ一部トナルニハ其ノ條約ハ憲法上有効ナルヲ要ス。然ルニ若シ其條約ニシテ根本法(憲法)ノ規定ニ、又ハ立法權ヨリ生ズル法律ノ規定(日本ニ於テハ天皇ハ議會ノ協贊ヲ以テ之レヲ作ル第五條)ニ違反スルトキハ、憲法上有効ナリト云フベカラズ。天皇ハ其ノ權力即チ憲法(第四條)ノ規定ニ從ヒ、其ノ身ニ有セラル、總テノ大權ヲ施行セラレザルベカラズ。然レドモ第十三條ノ大權ヲ施行シナガラ亦憲法ノ總テノ他ノ諸條ヨリ生ズル條件及制限ヲモ遵守セラレザルベカラズ。然ラザレバ大權ハ制限ナキモノトナリ、憲法全體ハ天皇ノ意思ニ依リ左右セラル、ニ至ルベシ。是レ立憲主義ノ精神ヲ減盡スルモノニ非ラズヤ。予ハ左ニ一ニ疑問ヲ設クベシ。天皇陛下若シ外國裁判官ヲ貴國裁判所ニ列セシムルノ條約ヲ締結、批准セラル、コトアラバ、

足下ハ何ノ言ヲ爲サント欲スルカ。

足下ハ必ラズ憲法第十九條及第二十四條及裁判所構成法ノ規定ニ違反スト答フルナルベシ
(立法權ヨリ生ズル特別ノ法律アルトキハ此限ニ在ラズ)

陛下若シ人民ニ對シ國內ニ於テハ何々ノ宗教ヲ奉ズルコトヲ禁ズルノ條約ヲ締結、批准セラ
ルコトアラバ(予ハ推理ノ爲メ單純ノ假想ヲ呈スルコトハ足下ノ能ク了知セラル、所ナラン)
足下ハ何ノ言ヲ爲サント欲スルカ。

足下ハ必ラズ憲法第二十八條ニ違反スト答フルナルベシ。予ハ此如ク幾多ノ假問ヲ呈スルヲ
得ベシ。

今ヤ予ハ再ビ第六十二條ニ付テ言フ所アラントス。

本條ノ所謂法律トハ何ニ付テ言ハント欲スルヤ、如何ナル意義ヲ有スルヤ?

法律トハ立法權ヨリ生ズル法律ヲ云フ(皇帝ハ議會ノ協賛ヲ以テ之レヲ作ル)其ノ意義明白
ナリ。即チ租稅ハ國ヲ代表スル團體ニヨリ協賛セラレザルベカラズ。其ノ新設及變更ハ行政權
ノ專斷ニ委スベカラザルノ憲法上ノ大原則ニ適合スルモノナリ。

此ノ點ニ於テ疑ノ容ルベキアルヤ。

日本憲法ノ起草者(陛下ノ顧問官タル)ハ此事ニ付一點ノ疑團ヲ置カザルガ如シ。伊藤伯ノ

第六十二條ノ解釋ヲ一讀セバ之ヲ信ズルニ充分ナラン。

此ハ解釋ハ正確ヲ保證スルニハ必ラズシモ第十三條ニ明文ハ制限ヲ置クハ要ヲ見ズ。抑モ憲
法ハ甚ダ精細ノ著作ニシテ、其ノ總テノ規定ハ互ニ相關連シ又互ニ相完實スルモノナリ。

終リニ臨ミ大體ニ於テ記載セラレザル一憲法ヲ引證スベシ：(英國憲法)

足下ハ必ラズ國際上ノ關係ニ於テ、國家ヲ代表スルノ權ヲ君主ニ與ヘザル所ノ一憲法ヲ發見
スルコト能ハザルベシ。

予ハ先ニ足下ニ呈シタル書狀中ニ於テ「トツド」ヲ引證セリ。今ヤ又「ブラツクストン」ヲ
引證セントス(予ハ此ノ地ニ於テ予ガ藏書ノ一部ヲ有スルニ過ギザルヲ以テ「カルボー」ノ翻譯
書ヨリ之レヲ拔載セリ)

『英國憲法ハ合衆王國ノ公權勢ノ一ニ對シテ、國王ニ依リ締結セラレタル外交條約ヲ阻害
シ遲滯シ廢滅シ中止スルノ能力ヲ與ヘズ。然レドモ國際上權利ノ規約ハ法律トシテ及議會
ノ如何ナル常令ニモ違反セザルノ條件ヲ以テ公布セラレタル後ニ非ラザレバ遵奉ノ義務ヲ
負ハシムコトナシ。故ニ條約ニシテ法律ノ變更(其ノ規定又ハ外形)ヲ包含シ又ハ邦國一
般ノ利害ニ關係ヲ有スルトキハ協賛、換言スレバ立法的制可(議會及國王)ノ必要アリ』

パテルノスト口 頓首

獨逸關稅管轄區ノ關稅表及關稅 煙草稅ノ收入ニ關スル法律

獨逸關稅管轄區ノ關稅表及關稅煙草稅ノ收入ニ關スル千八百七十九年七月十五日ノ法律、朕
ウイルヘルム云々、聯邦參議院及國會ノ協賛ヲ經テ獨逸國ノ名ニ於テ左ノ件ヲ命ズ。

第一條 物品ノ輸入スル者アルトキハ下ニ掲グル關稅表ニ照シテ關稅ヲ徵收ス。此ノ關稅表ハ
千八百七十年十月一日ノ同盟關稅表及同表ヲ變更シタル千八百七十三年七月七日ノ法律ニ
代ハリタル者トス（帝國法令集二四一頁）本法ヲ實施スルハ左ノ區別ニ從フ。

△第一 關稅表第六號（鐵等）第十四號（ホップエン）第十五號（小機械等）第二十三號（燭料）ニ
關スルトキ、及關稅表第二十五號ク一ノ第二ヲ除ク外同表第二十五號（雜貨香料云々）ニ掲
ゲタル物品ニ關スルトキ、及ビ關稅表第二十六號。ゼー（脂肪質ノ物）ニ屬スル物ニ關スル
トキ、及關稅表第二十九號（石油）第二十七號（獸類等）第三十九號（家畜）ニ關スルトキハ即
時ニ本法ヲ實施ス。

△第二 關稅表第九號デー、エー、エフ（穀類等）第十三號「アール」ヨリ「エフ」（木）ニ至

ルマデノ物件ニ關スルトキハ千八百七十九年十月一日ヨリ實施ス。

△第三 關稅表第八號即チ麻其他ノ植木性ノ紡績材料（但シ粗製ナルカ銹ヲ生ジ破損シ若ク
ハ麻刷ニテ梳キタル木綿又ハ廢物ヲ除ク）ニ關シテハ千八百八十年七月一日ヲ以テ本法ヲ
實施ス。

△第四 關稅表ニ掲ゲタル前記外ノ物品ニ關シテハ千八百八十年一月一日ヲ以テ本法ヲ實施
ス。但シ第一ニ於テ例外トナシタル者ニ關シテモ亦タ同ジ。

第二條 左ノ場合ニ於テハ總量ヨリ量稅ヲ徵收ス。

甲、關稅表ニ此ノ事ヲ明記シタルトキ

乙、百キログラムニ付關稅六マルク以下ノ物品

右ノ外ハ凡テ眞量ヲ以テ量稅ノ基本ト定ム。流動物ノ眞量ヲ測定スルトキハ其ノ容器（桶
壘石壘ノ類）ノ重量ヲ控除セズ、舍利別ニ付テハ現行ノ規定ニ從フ。

其他ノ物品ニ付テハ聯邦參議院ハ眞量測定ノ標準トナルベキ總量ノ步割ヲ定ム。

第三條 若シ當事者ガ關稅表ノ番號ニ掲ゲタル最高ノ稅率ヲ拂フコトヲ欲セザルトキハ關稅表
ノ第二號、ゼー第二十二號、ア一、ベ一、エ一、及エフ、ニ掲ゲタル物品ハ之レヲ一定ノ
關稅廳ニ送達スベキ旨ヲ聯邦參議院ハ規定スル權アリ。

第四條 關稅ヲ免除スル者ハ左ノ如シ。

甲、郵便ヲ以テ外國ヨリ送達シタル物品ニシテ總量二百五十グラム以下ノ者、

乙、重量稅ヲ拂フベキ物品ニシテ總量五十グラム以下ノ者、

五プエンニツヒ以下ノ關稅ニ之レヲ徵收セズ、同額以上ノ者ハ五ヲ以テ除之得ル迄徵收ス而シテ其殘額ハ除棄スル者トス。

聯邦參議院ハ凡テ前記ノ場合ニ於テ弊害アルトキハ場所ノ制限ヲ命ズル權アリ。

第五條 左ノ物品ニハ左記ノ條件ヲ充ストキハ關稅ヲ免除セラル。

第一 關稅區域外ノ土地ニ於ケル耕作又ハ牧畜ノ產物、但シ此ノ土地ガ關稅區域内ノ住居又ハ經濟上ノ建物ヨリ管理セラレタルトキニ限ル。山林ノ產物モ亦同一ノ條件ニ從フ。但シ關稅區域外ノ土地カ内地ニ於ケル土地ノ附屬地ナルトキニアラザレバ山林ノ產物免稅トナラズ。

第二 既ニ使用シタル賣買ニ適セザル衣類及洗濯物、使用シタル家具具有價證券、使用シタル製造所機械、輸入者ノ一旦使用シタル者ニシテ自由ニ供スル手道具、結婚ノ關係ニ由リ内國ニ住居スル外國人ノ衣類洗濯物及有價證券ハ新ナル者ト雖ドモ特許アルトキハ均シク輸入稅ヲ免ズ。

第三 既ニ使用セラレタル家具及有價證券ハ遺產ナリト證明セラレ且ツ特別アルトキ。

第四 旅行用器具衣類洗濯物ノ類ニシテ、旅行者車夫舟子ガ其ノ使用ニ供スル者及ビ旅行中ノ手職人ガ其職ニ供スル手道具、並ニ旅行中ノ美術者ガ其ノ職ニ使用スル爲メ携帯スル諸器具機械、並ニ此等ノ種類ニ屬スル物品ニシテ前記旅行者ノ前後ニ到著スル者旅行中消費スル者。

第五 馬車及汽車、但シ汽車ハ國境ヲ超ユルトキ乗客及物品ノ運搬ニ供セラレ、而シテ之レガ爲メ國境内ニ來リタルトキ本邦鐵道廳ノ汽車ガ空車ニテ還來リシトキ並ニ外國鐵道廳ノ汽車ニシテ既ニ運搬ノ内ニ供シタル者。

旅行者ノ車馬ガ輸入ノ時所有主ノ運搬ノ用ニ供セザリシトキハ所有主ガ既ニ之レヲ他ノ方法ニ使用シタルコト、向後猶ホ使用スルコトヲ證明シ且ツ特別ノ許可アルトキ。

馬其他ノ獸類ハ輸入ノ節其ノ使役上曳車獸又ハ負荷獸トシテ旅車荷車ヲ曳キ物品ヲ荷ヒ又ハ旅人ヲ運搬シ得ルコト明カナルトキ。

第六 油穀類等ヲ買入レテ之レヲ再ビ賣出ス爲メニ輸入シタル空虛ナル桶袋等、且此等ノ者ガ其ノ内容ヲ充實シタル後外國ヨリ還リタルトキ。

(原本第七ヲ脱シタルカ但シ第八ハ誤謬ナルカ原本ノ儘ヲ存ス)

第八 美術展覽會國王附屬若クハ公共ノ美術館又ハ同美術集会所ニ陳列スル爲メ輸入シタル美術物其外ノ品物ニシテ書籍館又ハ公共ノ學術集洽所ニ陳列スル爲メ輸入シタル物品及學術集洽所ニ陳列スル爲メ輸入シタル天然物。

第九 古代ノ物件ニシテ當ニ其ノ價值ハ年數ニ在ルコト判然タル者ノミナラズ、集洽所へ陳列スル外他ノ目的又ハ使用ニ適セザル者。

第十 海船ノ製造其ノ修繕若クハ旅裝ニ供スル物件（通常ノ船舶附屬物モ此中ニ屬ス）但シ聯邦參事院ハ之レニ關シテ詳細ナル規定ヲ設クルコトヲ得。
前項ノ目的ニ供スル金屬ノ物件ハ現行法ニ從フ。

第六條 他ノ邦國ノ船舶物品ニ比シテ獨逸ノ船舶物品ヲ不利益ニ取り扱フ國ヨリ來リタル物品ニハ、條約ニ抵觸セザル限り關稅表ニ於ケル輸入稅額ノ五十プロセント迄ヲ附加稅トシテ賦課スルヲ得。

此ノ附加稅ノ徵收ハ聯邦參議院ノ協贊ヲ經タル上ニテ勅令ヲ以テ之レヲ命ズ。

此勅令ハ即時ニ議會ニ通知スベシ。議會ガ未ダ召集セラレザルトキハ、次回ノ召集ノ時通知スベシ。議會若シ協贊ヲ與ヘザルトキハ勅令ヲ無効トナスベシ。

第七條 第一 關稅表第九號（穀類）ニ掲ゲタル物品ニシテ、外國ニ於テ賣捌クベキ者ハ倉

式ヲ自由ニ許可スル者トス。而シテ此物件ハ倉庫ニ於テ之レヲ取扱フニ一ノ制限ナク、且ツ取扱ヲ通知セザルヲ以テ、內國品トノ混淆ヲ生ジ易シ、故ニ包含シタル外國品ハ通過稅ヲ免ズル者トス。此等ノ物品ニシテ內國ニ於テ賣捌クベキ者カ、又ハ外國ニ於テ賣捌クベキ者ニ付テハ倉式ヲ許スコトヲ得。

第二 關稅表第十三號ゼーニ掲ゲタル木類ニ對シテハ倉式ヲ許スコトヲ得、但シ此ノ木類ヲ取り圍ムコトヲ廢スルコトヲ得、第十三號第一號ニ屬スル材木ハ一時之レヲ倉庫ヨリ取り出シ而シテ第十三號ゼーノ二號ニ屬スル取扱ヲナシタル後倉庫ニ還附スルコトヲ得。

後ニテ輸入シ且ツ案内狀第一號ヲ以テ運送スル建築用ノ材木ニ對シテ聯邦參議院ハ一般ニ定メタル運送ノ方法ヲ簡便ニスルコトヲ得。

第三 穀粉ノ製造ニ付テハ（關稅表第二十五號ク一ノ二）下ノ如ク輕減ヲ與フ、即チ穀粉ヲ輸出スルトキハ穀粉製造ノ爲メ使用シタル外國穀類ノ割合ニ從ヒ其ノ輸入稅ヲ免ズ、即チ穀粉輸出ノ高ヲ證明スルガ爲メ、外國穀類中實際穀粉トナシタル高ニ應ジ外國米ノ量ヲ免稅スベシ。但シ外國穀類ト製粉トノ割合ニ關シテハ聯邦參議院ハ詳細ノ命令千八百六十九年七月一日ノ法律第百八條第百九條第百十五條及第百十八條）殊ニ倉庫所有主ニ對スル命令ヲ發スルヲ得。

第八條 關稅及煙草稅ノ金額ガ一年ニ於テ一億三千萬圓ニ上ルトキハ、助成金額仕拂ノ基礎トナリタル人口ノ割合ニ應ジテ此ノ超過額ヲ各聯邦ニ分與スベシ。此ノ分與ノ方法ハ獨逸憲法第三十九條ニ掲ゲタル^{クワールタールエキストラクト}三ヶ月摘要書及年末決算書ニ基クベシ。但シ帝國ノ國庫ト各邦ノ國庫ト決算スルヲ妨グズ。

此ノ規定ハ千八百八十年四月一日ヲ以テ効力ヲ生ズ。千八百七十九年十月一日ヨリ千八百八十年三月三十一日マデノ間ニ於テ關稅及煙草稅ノ金額ガ五千二百六十五萬一千八百十五マルクニ止マルトキハ此ノ超過額ハ人口ノ割合ニ應ジ、各聯邦ノ助成金中ヨリ扣除スベシ。

關稅表

番號	物品ノ名稱	稅	稅率
第一	廢物		稅率
	甲 鐵製造物ノ廢物(以下略之)		免除
第二	乙 屠牛ノ流動又ハ乾固シタル血(以下略之)		免除
	木綿及木綿製ノ物		免除
	甲 木綿但シ赤色云々		免除
	乙 綿	百疋ニ付キ 一五〇	免除

第三	以下做之		
	鉛殊ニ安實母尼亞鉛又ハ錫混化シタル者及此等ノ者ヨリ製造シタル品物		三 免除
第四	甲 粗鉛、碎鉛、鉛板、銀板、及金板	百キログラムニ 付	三 免除
	乙 鉛棒、活字		三 免除
第五	以下做之		
	毛拂具及篩師使用品		四
第六	甲 粗品ナル物	同	四
	木皮葉(中略)ヨリ製造シタル毛拂具乃帚		四
第七	以下做之		
	藥品染料		二〇
第八	甲 エーテル、コロールム(以下略之)	百キログラムニ 付	二〇
	以下做之		
第九	鐵及鐵器		一
	甲 各種粗製鐵(以下做之)	百キログラムニ 付	一

第七	以下做之 土、鑛及貴金屬 土、粗製鑛物(以下略之)		免除
第八	以下做之 麻其他植物性ノ紡績料(但シ粗製ナルカ莖ヲ 生ジタルカ破損シタルカ若クハ麻刷ニテ梳キ タル木綿又ハ廢物ヲ除ク) 穀類其他農業上ノ產出物 甲 小麥、裸麥(以下略之) 以下做之 硝子及硝子器	百キログラムニ 付	免除
第九	甲 綠色又ハ其他天然ノ色ヲ有スル空虚ナル 普通ノ硝子 以下做之 人馬ノ毛及此ノ毛ヨリ製造シタル物馬毛及ビ	同	三
第十			
第十一			

第十(完) 三ハ月如シ スル	豕背ニ生ズル毛 甲 粗製ニシテ、麻刷ニテ梳リタル粗質ナル (中略)馬毛 以下做之		免除
第十四	ホハブエンソ 小機械及大機械及ビ船 小機械、但シ構造ノ物料ニ關セズ 第一音樂機械 以下做之	百キログラムニ 付	二〇
第十五	曆 樹膠グツタペルチア及此等ノ物ヨリ製物シタ ル物 甲 粗製又ハ精製シタル樹膠グツタペルチア 以下做之	同	三〇 免除
第十六			
第十七			

第十八	一、衣服及洗濯物但シ全成シタル物ニ限ル及ビ粧 裝品 甲 絹製ノ物 (以下略之) 以下做之 銅其ノ他ノ特別ニ此表ニ掲ゲタル非金屬ト混 化シタル物但シ此表中他號ニ掲ゲタル物及此 等ノ物ヨリ製造シタル物 甲 原形ノ銅或ヒハ碎銅(以下略之) 以下做之 小形ノ物品等 甲 全體又ハ一部分カ買金屬眞珠、珊瑚又ハ 寶石ヨリ製造セラレタル物品(以下略之) 以下做之 柔皮及柔皮製ノ物品 甲、乙ニ掲ゲタル者ノ外各種ノ柔皮乙(略之)	百キログラムニ 付	九〇〇
第十九	以下做之 免 除		
第二十	小形ノ物品等 甲 全體又ハ一部分カ買金屬眞珠、珊瑚又ハ 寶石ヨリ製造セラレタル物品(以下略之) 以下做之 柔皮及柔皮製ノ物品 甲、乙ニ掲ゲタル者ノ外各種ノ柔皮乙(略之)	百キログラムニ 付	六〇〇
第二十一	以下做之 免 除		

第二十二	以下做之 麻糸布及ビ布ヲ以テ製造シタル物品 甲 糸但シ乙ニ掲ゲタル外ノ物ニ限ル云々		
第二十三	燭料 文學的又ハ美術的ノ物品 甲 文字ヲ記載シタル紙云々 以下做之 雜貨香料, 糖菓其他ノ消費品 甲 各種ノ麥酒蜜糖水 乙 各種ノソラシデー云々 以下做之 油但シ他號ニ掲ゲザル者及脂肪 甲 油 第一 壘又ハ德利中ノ各種ノ油 以下做之	百キログラムニ 付	四四八
第二十四	文學的又ハ美術的ノ物品 甲 文字ヲ記載シタル紙云々 以下做之 雜貨香料, 糖菓其他ノ消費品 甲 各種ノ麥酒蜜糖水 乙 各種ノソラシデー云々 以下做之 油但シ他號ニ掲ゲザル者及脂肪 甲 油 第一 壘又ハ德利中ノ各種ノ油 以下做之	百キログラムニ 付	免 除
第二十五	雜貨香料, 糖菓其他ノ消費品 甲 各種ノ麥酒蜜糖水 乙 各種ノソラシデー云々 以下做之 油但シ他號ニ掲ゲザル者及脂肪 甲 油 第一 壘又ハ德利中ノ各種ノ油 以下做之	百キログラムニ 付	四四八
第二十六	油但シ他號ニ掲ゲザル者及脂肪 甲 油 第一 壘又ハ德利中ノ各種ノ油 以下做之	同	上 二〇

第 廿 七	紙及ビ合セ紙		
	甲 縹纒ヨリ製シタル磨礪シ又ハ磨礪セザル物		免 除
	以下做之		
第 廿 八	獸皮ヨリ製造シタル物		
	甲 蔽ハレタル獸皮云々		
	以下做之		
第 廿 九	石油		一五〇
	石油及ビ其他ノ礦油		
	以下做之		
第 三 十	絹及絹製ノ物品		六
	甲 繭(以下略之)		
	以下做之		
第 卅 一	石鹼及香料		免 除
	甲 塗擦石鹼	百キログラムニ付	五

第 卅 二	骨牌		六〇
第 卅 三	石及ビ石製ノ物品		免 除
	甲 天然ノ形ノマヽノ石又ハ切リ石		
	以下做之		
第 卅 四	石炭茶褐色ノ石炭コークス、木炭		免 除
第 卅 五	藁及木皮製ノ物品		
	甲 木皮等ヨリ製シタル席及靴	同	三
	以下做之		
第 卅 六	松脂、瀝青、各種ノ樹脂地松香		免 除
第 卅 七	獸類及其產出物但シ他號ニ掲ゲザル者		
	甲 生獸(以下略之)		免 除
第 卅 八	陶器		
	甲 通常ノ建築使用石(以下略之)		
第 卅 九	家畜		
	甲 馬(以下略之)	一 頭ニ付	十

以下做之

第四十 蠟引羅紗蠟引ムツセリン蠟引タフツト

百キログラムニ付

十二

甲 粗製無印蠟引羅紗

以下做之

第四十一 羊毛此號ノ表ノ他號ニ掲ゲザル獸毛及ビ此等

免除

ノ物ヨリ製シタル物品

甲 粗製ニシテ彩色アル且ツ圖畫シタル羊毛

(以下略之)

以下做之

第四十二 亞鉛特ニ鉛又ハ錫ト混化シタル者及ビ此等ノ

免除

物ヨリ製造シタル物品

甲 粗製ノ亞鉛

以下做之

第四十三 錫、鉛、安質母尼又ハ亞鉛ト混化シタル錫及

ビ此等ノ物ヨリ製造シタル物品

免除

甲 粗製ノ錫

以下做之

關稅改正ニ關スル帝國議會ノ關係ヲ論ズ

方今關稅改正ニ關シ議會ノ協贊ヲ要スルヤ否ニ付國法學者ノ議論分レテ二派トナレリ。其一議會ノ協贊ヲ要ストノ意見ヲ有スル者ハ、憲法第二十一條ニ日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納稅ノ義務ヲ有ストアリ、又其第六十二條ニ新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之レヲ定ムルベシトアルニ據リ、關稅ニ關スル條約ハ更ラニ法律案トシテ議會ノ議定ヲ經ルニアラザレバ効力ヲ生ゼズト謂ヒ、他ノ一議會ノ協贊ヲ要セズトノ意見ヲ有スル者ハ、憲法第十三條ニ 天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ講ジ及諸般ノ條約ヲ締結ストアルニ據リ、憲法第二十一條及第六十二條ニ拘ハラズ、議會ノ協贊ヲ經ザルモ條約ニ依リテ關稅ヲ賦課スルコトヲ得ベシト論ゼリ。

關稅條約ト關稅國法トノ關係ハ今ヤ實ニ重大ノ問題タリ。政府ハ今ニ及ンデ此ノ問題ヲ判決シテ適當ノ方針ヲ取ラザレバ將來内外ノ關係ニ於テ非常ノ困難ヲ生ゼントス。

蓋立憲政治ニ行フニ及ンデハ、國法ノ制定廢改ハ必ズ議會ノ協贊ヲ經ザルベカラズ。是ニ於テ各外國條約ニシテ内包ノ實體内國ノ法律ニ影響スル者ハ、亦或ル方法ニ依リテ議會ノ協贊ヲ取ラザル可ラザルニ至リタルハ必然ノ結果ナリ。

西洋諸國ノ沿革ヲ考フルニ、條約締結ノ權ハ古來國家元首ノ掌握スル所タリ。其條約モ多クハ和親同盟ニ關スルモノニシテ、國ト國トノ交際ヲ規定スルニ過ギザルヲ以テ、列國內部ノ法律ニ干涉スルモノ極メテ少ク、概ネ議會ノ承諾ヲ取ルコトヲ要セザリシナリ。然ルニ近世以來各國ノ交際漸ク密ニ、國民ノ交通隨テ頻繁ニ趣クヨリ、條約ノ種類モ亦多キヲ加ヘ、關稅條約ノ如キ、罪人引渡條約ノ如キ、國際版權若クハ發明特許條約ノ如キ、郵便條約ノ如キ、皆國ト國トノ交際ニ止マラズ、實ニ多少各國內部ノ法律ニ干涉スルニ至リ、從テ國際條約亦國法上ノ問題トナリ、立法ノ機關タル議會ヲシテ此ニ間接ニ參與セシメザルヲ得ザルニ至レリ。

今我邦ノ憲法ニ於テ條約締結ノ大權ト帝國議會法律議定ノ職權ト果シテ如何ナル關係ヲ爲スベキヤヲ講究セザルベカラズ。茲ニ先ヅ國際法學者ノ所說及西洋諸國ノ事例ヲ掲ゲテ之レヲ左ニ詳論セントス。

第一 國際法學者ノ所說

關稅改正ニ關スル帝國議會ノ關係ヲ論ズ

國際法學者ハ其ノ鼻祖ナルヒュゴ、グロチユス氏以來和親條約締結ノ權ヲ以テ最高主權ノ專有スル所トナスニ於テ異說ナシト雖トモ、近世ノ學者ハ又制限君主政治ニ於テハ憲法ニ從ヒ國會ノ協贊ヲ經テ君主之レヲ締結スルコトヲ認メタリ。

ブリンチエリー氏ハ他ノ國際法學家ト同ジク、外國ニ對シテ國體ヲ代表スルノ權利ヲ有シ、且ツ義務ヲ負フハ何人ニシテ、其條件制限ハ如何ナルヤハ總テ國法ノ範圍内ニアリテ規定スルモノトシ、國際法ニ於テハ唯國家ヲ其有様ニ於テ論ズルモノナリトノ說ヲ採ル、氏ハ以爲ラク國家ガ條約締結權ノ施行ニ關シ、憲法上ニ制限ヲ受クルトキハ此ノ制限ハ國際ノ交通上ニ於テモ認メラザルベカラズ。此制限ニ違背シタルノ條約ハ決シテ効力ヲ生ズルコトナシ。國際條約ヲ國家ノ名ニ於テ締結スル當務員ハ、國家ヲ代表スル權利ヲ有スルモノナルヲ要スト。氏ハ又進テ曰ク、一國ノ憲法又ハ法律ノ効力ヲ停止變更スルノ國際條約ハ、代表權ヲ有スルモノノ締結スル所ニ依レバ、初メヨリ之レヲ無効トスルコトナク、唯場合ニ依リ其實施ヲ妨ゲラル、モノナリト。

ホイトン氏ハ國憲ノ明文又ハ憲法上大權ノ分配ヨリ條約締結權ニ制限ヲ設ケ、立法ノ方法ヲ必要トスルトキハ各條約ハ國憲規定ノ法式ニ從ヒ、國民ノ承諾ヲ得ルマデハ其効力ヲ生ゼズ、不完全ナルモノトスト謂ヘリ。此レ蓋シ憲法ニ明文ヲ以テ元首ノ締約權ヲ制限シタル場合ヲ謂

フモノナリ。

近世國際法學ノ大家ト稱セラル、西班牙ノカルボー氏ハ曰ク、條約締結權ノ所在ヲ求ムルニハ、國家ノ最高法タル憲法ニ依ラザル可カラズ。此ノ締結權ハ國民最高權ノ重要ナル部分ニシテ、其執行ハ各國內部公法ノ獨リ規定スル所トス。君主國ニ於テハ其執行多少ノ制限ヲ受ケテ君主之レヲ握リ、共和國ニ於テハ行政主長ハ其大臣又ハ國家大團體ノ輔佐ヲ得テ之レヲ行フト。又曰ク適法ノ批准ヲ得タル條約ハ確定ニ結約國ヲ束縛スルモノナルヤ、或ヒハ其効力ヲ生ズルニ先テ猶他ノ手續ヲ要スルモノナルヤ、此ノ疑問ハ普通一般ノ解釋ヲ得ベキモノニ非ラズ。其性質上國家内部ノ公法上ノ規定ニ從フベキモノナレバ、各國其趣ヲ異ニシ、其解釋又種々ナラザル可ラズ。或ル種類ノ國體例ヘバ專制君主國ニ於テハ、總テ條約ヲ談判締結批准スルノ權ハ直接ニ君主ニ屬ス。此ノ種類ノ條約ニ在テハ批准ヲ交換スルトキハ條約ノ効力ヲ完全ナラシメ直ニ實行セシムルヲ得ベシ。即チ亞細亞、土耳其及ビ東洋諸國ニ於テ見ル所ナリ。又他ノ國體ニ於テハ批准ノ權ヲ行政權ニ委託スル制限ヲ設ケテ之レヲ執行セシム。即チ批准ノ交換ハ直ニ條約實際ノ効力ヲ生ゼシメズ、或ル場合ニ於テ全く之レヲ無効トスルニ非ザルモ、其執行ヲ止ムルコトアリ。此等ノ國體ニ於テハ原則上條約ハ批准セラル、モ未ダ完全ノ効力ヲ生ゼズ。國民ノ代議體ガ法律上ノ制裁ヲ與フルヲ必要トス。此ノ制裁ヲ與フルノ權ハ國民主權ノ固有物ニ

シテ、條約文ニ明示シ、若クハ批准書類ニ記載スルノ必要ナシト。

ツエツベル氏ハ政府ガ代議體ノ協賛ヲ經ズシテ締結シタル條約ニ關シ、國法上及ビ國際法上ノ論點ヲ區別シ詳細ノ論辯ヲナシタリ。氏ハ國際法上ノ關係ヨリ二種ノ場合ヲ區別シ、一ハ憲法ノ明文ニ因リ、締結前ニ代議體ノ協賛ヲ要スルトキ、一ハ條約締結後ニ其施行ニ當テ協賛ヲ要スルトキトセリ。而シテ氏ノ說ニ曰ク、國法上ニ於テ第一ノ場合ニハ條約其効力ヲ生ゼズ、第二ノ場合ニ於テハ實施ヲ得ズ。第一ノ場合ニ於テハ條約ハ國家ニ對シテ束縛力ヲ有セズ、政府ハ其實施ヲ求ムル能ハズ、第二ノ場合ニ於テハ條約ハ無効ニアラザルモ代議體ノ不承諾ニ由リ國內ニ施行スルコトヲ得ザルモノトス。

第一各國ノ例

歐米諸國ニ於テ議會ガ條約締結權ニ干涉スルノ例ヲ按ズルニ、之レヲ三種ニ區別スルヲ得ベシ。即チ一ニ曰ク歐洲大陸諸國ノ例、二ニ曰ク英國ノ例、三ニ曰ク亞米利加合衆國ノ例是ナリ。第一 歐洲大陸ニ於テハ通例憲法ニ於テ國會ノ承諾ヲ經ルニ非レバ條約ノ効力ヲ生ゼザルコトヲ定ム。即チ左ノ如シ

國王ハ戰ヲ宣ヘ和ヲ決シ外國政府ト諸條約ヲ締結スルノ權ヲ有ス。

貿易條約及一國若クハ國民ノ負擔ヲ起スベキ條約ハ兩院ノ同意ヲ得始メテ施行スベキカリ。 (普魯西憲法第四十八條) 自耳義憲法第六十八條同)

皇帝ハ國事ノ條約ヲ結ブ○貿易ノ條約及帝國ノ全部若クハ局部ノ負擔或ヒハ國民ノ義務ヲ起スベキ國事ノ條約ヲ正確トナスタメ帝國議會ノ承認ヲ必要トス (澳特別憲法第六條) 國王ハ外國ト和議ヲ結ビ及ビ其他ノ條約ヲ準定ス○國王ハ國家ノ利益安寧之レヲ要スト思量スルトキハ即時ニ其ノ條約ヲ國會ノ兩院ニ通照ス、歐洲内若クハ他洲ニ於テ王國ノ所屬地ノ局部ヲ讓與若クハ交易スル條規又ハ凡法律ニ準ズル權利ニ關スル條規若クハ其修正ヲ含メル條約ハ國會ニ於テ其條規若クハ修正ヲ認可スルノ後ニ非レバ國王之レヲ准定セズ (荷蘭憲法第五十七條) 丁抹憲法第十八條、同佛國公權ノ關係ニ付テノ法律、千八百七十五年七月十六日及ビ伊太利憲法第五條等

第二 英國ニ於テハ國王ハ無制限ニ條約ヲ締結批准スルノ權アリ。唯條約實行ニ當リ法律ヲ制定シ始メテ効力ヲ生ズルヲ以テ、從テ國會ハ間接ニ條約ヲ批准スルコトヲ得、即チ左ノ如シ。外國ト條約ヲ爲スハ主權者ノ特權トス。蓋シ國際法ニ於テハ條約ハ必ラズ主權者ニ由リテ締結セラル、ヲ要ス。主權者之レヲ締結シ而シテ始メテ全國民ヲ約束スルノ効力ヲ生ズ、

英國ニ於テハ主權ハ責任大臣ノ贊輔ニ依リ行動スル所ノ國王ニ專屬ス、故ニ國王ノ締結スル條約ハ國內ノ如何ナル權力ト雖ドモ法律上之レヲ遷延シ、之レニ抵抗シ之レヲ廢止スルコト能ハズ。但シ其條約國家ノ榮譽及利益ヲ害スルモノナルトキハ、大臣ハ之レヲ締結スルニ參與シタルガ爲メニ國會ニ對シテ責ニ任ゼザル可ラズ（ブラツクストン氏英法註釋ニ據ル）國會ガ條約ニ關スル憲法上ノ權力ハ頗ル到限アリ、其條約ノ効ヲ生ズルニ國會ノ正式承諾ヲ要セズ其權力ノ範圍ハ左ノ如ク解スルコトヲ得ベシ。

一、條約中條約ヲ有効ナラシムルニ立法ノ行爲ヲ要スル部分アルトキハ、國會ハ其部分ニ對シテ承諾ヲ與ヘザルノ權利ヲ有ス。例ヘバ刑法若クハ國法ニ變更ヲ生ズル場合、又ハ現行關稅若クハ貿易規程ニ變更ヲ生ズル場合ノ如シ。

二、國會ニ提出セラレタル條約若クハ其條約ノ或ル部分ニ就キ、上奏ヲ以テ意見ヲ國王ニ奉ルノ權利ヲ有ス。

三、國會ニ於テ條約ヲ不可トスルトキハ其條約ニ付キ責任アル大臣ニ對スル糾責若クハ彈劾ヲ以テスルハ各議院ノ權ニ在リ。

條約ヲ施行スル爲メニ立法行爲ヲ要スルトキハ、各條約ハ國會就中下院ニ於テ充分討議ニ付セラルベシ。是レ政府ヲシテ國家ノ外交政策ノ變更ニ由リテ動カントスル重大ノ利益ヲ

有効的ニ進捗スルコトヲ得セシメント欲スレバナリ。而シテ國會ハ其條約ヲ有効ナラシムル目的ヲ以テ提出セラレタル法案ニ同意ヲ拒ムコトヲ得ト雖ドモ、條約其物ヲ變更スルノ權ヲ有セズ。

政府ノ未ダ批准セザル條約ハ國會ニ提出セザルヲ通例トス。千八百六十五年砂糖ノ關稅及戻シ稅法案ヲ下院ニ提出セシトキ、該案ハ其條約ヲ有効ナラシムルノ目的ニ出デタリト雖ドモ其條約ハ未ダ批准ヲ經ザルヲ以テ、國王ノ命ニ依リ常式ニ從ツテ之レヲ提示スルコトヲ得ズ、因テ條約ノ立法ヲ要スルコトヲ知悉セシメンガ爲メニ大藏省ヨリ報告トシテ其臆本ヲ提示セリ（トッド氏英國議院政治）

第三 亞米利加合衆國ニ於テハ憲法ヲ以テ大統領ハ元老院ノ啓迪ト承諾トニ因リ條約ヲ締結シ而シテ其締結シタル條約ハ國ノ最上法律ナルコトヲ規定ス。則チ左ノ如シ。

合衆國大統領ハ元老院ノ啓迪ト承諾トニ因リ條約ヲ締結スルノ權ヲ有ス、但出席元老院議員ノ三分ノ二ノ同意ヲ要ス（合衆國憲法第二章第二節第二項）

合衆國ノ權力ニ由リテ締結セラレタル條約ハ合衆國最上ノ法律ト爲ス。故ニ各洲ノ裁判官ハ其ノ洲ノ憲法又ハ法律ニ反對ノ明文アルニモ拘ハラズ條約ヲ遵奉スルノ義務ヲ有ス（同上第六章第二節）

各國ノ憲法規定ノ例ヲ一ニセズ、條約ニ就テ議會ノ參與ヲ許スベキヤ否ヤ、及之レヲ許ストセバ其順序方法當ニ如何ニスベキヤハ要スルニ國法上ノ問題ニシテ、國際法上ノ問題ニ非ズ。故ニ今此問題ヲ決セント欲セバ憲法上ノ規定スル所果シテ何レニ在ルヤヲ研究セザル可ラザルナリ。前ニ掲ゲタル事例第一及ビ第三ニ屬スル者ハ皆憲法ノ正文ニ明言スル所ニシテ、復疑義ヲ容ルベキノ地ナク、且批准ノ前ニ立法部ノ承諾ヲ經ルノ便アリ、獨リ英國ニ至リテハ始メヨリ憲法ノ明文アリテ、條約ノ必ラズ國會ノ承諾ヲ經ベキコトヲ規定シタルニ非ラズ。而シテ今日實際ニ於テ貿易條約ノ國會ノ承認ヲ要スルノ慣例ヲ成セシハ蓋シ法律議定ノ權アルニ因リ、延テ之レヲ馴致セシノミ。我國ノ憲法第十三條ト第二十一條及第六十二條トノ間接ノ抵觸ハ實ニ英國ト相類似スル者アリ。

我憲法ハ帝國議會ガ條約ニ關與スルノ權利ヲ認メズ、今條約ニ依リ關稅ヲ改正スルニ、帝國議會ノ協贊ヲ要スルヤ否ヤヲ決セントスルニ當リテ、未ダ遽ニ外國ノ例ニ據ルベカラズト雖ドモ、議會ハ稅法ヲ協贊スルノ權ヲ有スルヲ以テ、間接ニ此等ノ事項ニ關スル條約ニ干與スルノ權ヲ生ズルノ結果アルハ復疑ヲ容レザルナリ。果シテ然ラバ我ガ議會ガ關稅條約ニ對スル權利如何ヲ決セント欲セバ、宜ク英國ノ事例ヲ參酌スベシ。今英國ノ例如何ヲ陳述セン。

第三 英國ノ例

英國ニ於テ往昔關稅ハ慣習ニ依リテ徵收スルモノニシテ、國會ノ議定ニヨリテ徵收スルニ非ザリシモ、其後國會ハ一タビ疾苦救濟ノ請願ニ於テ租稅ノ課收ハ必ラズ國會ノ承諾ニ由ラザル可カラザルコトヲ云ヒ（「チャールス」一世ノ時）ニタビ權利請願ニ於テ之レヲ申明シ（「チャールス」一世ノ時）チャールス二世即位十二年貨物ヨリ噸稅磅稅ヲ徵收スルコトヲ承諾スルニ當リ、其議定案ニ特書シテ國會ノ承諾ニ由ルニ非ラザレバ内外國人ノ輸出入スル物品ニ課稅スルコトヲ得ザルコトヲ宣言シ、而シテ千六百八十八年革命ノ後權利法例ヲ議定スルヤ（維廉及馬利即位一年第二會期法律第一款）國會ノ承諾シタルヨリ長キ時間、若クハ其餘リノ方法ヲ以テ王ノ特權ニ由リ、而シテ國會ノ承諾ヲ取ラズテ幣財ヲ人民ニ賦課シ、國王ノ用ニ供スルハ不法ト爲ストノ箇條ヲ置キ、以テ古來久シク決セザル問題ヲ確定シ、租稅ハ關稅ト内國稅トヲ論ゼズ、必ラズ國會ノ承諾ニ由ラザレバ徵收スルヲ得ザルコトヲ明カニシ、而シテ其課收ハ國會議定ノ法律ニ由ラザルモノナキニ至レリ（「コックス」氏「インステチュション」ニ據ル）

英國政府ガ條約ヲ議院ニ付セシハ「ピット」氏ノ佛國ト締結シタル條約ヲ提出シタルヲ以テ始メト爲ス。

「ビット」氏ガ締結シタル佛國條約ハ航海及通商條約ト題シ、千七百八十六年九月二十六日双方委員佛國ニ於テ調印シ、委員調印ノ日ヨリ二ヶ月以内ニ批准スベシト定メタルモノナリ。而シテ千七百八十七年一月二十三日國會開院式ニ於ケル國王ノ勅諭ニ曰ク。

朕ハ佛國皇帝ト航海及ビ通商條約ヲ締結シタリ。其謄本ハ將ニ卿等ニ示サントス。朕ハ卿等ニ勸ム、卿等ハ其條約ヲ實行スルニ適當ナル方策ヲ採ランコトヲ、而シテ朕ハ深ク信ズ、條約ノ條項ハ兩國ノ工業ヲ獎勵シ貿易ヲ擴張スルノミナラズ、兩國臣民ノ交際ヲ親密ニシ平和ノ厚誼ヲ持續スルノ効アラランコトヲ。云々

而シテ「ビット」氏ハ一月二十六日勅命ニ從ヒ條約ノ謄本ヲ下院ニ提示シ、二月五日ニ今日ヨリ後一週間ノ間ニ於テ勅諭中佛國トノ航海通商ニ係ル部分ニ付キ審議スル爲メ全院委員會ヲ開クベキコトヲ動議シ、「フオクス」氏等反對黨ノ輩ハ其日限ノ短キヲ理由トシテ延期センコトヲ動議セシト雖ドモ否決シ、「ビット」氏ノ動議成立セシニ依リ、當日ニ至リ「ビット」氏ハ條約ニ關スル決議案ヲ提出シテ云ク、

今細目ニ涉ラズ單ニ通商一事ニ就キ條約第六條及ビ第十一條ノ旨ニ從ヒ大綱ニ關スル決議案ヲ議定センコトヲ望ム。即チ左ノ如シ。

一、本委員ハ税目ニ掲ゲラレザル總テノ物品ハ最惠國ノ物品ト同様ノ約束ニテ我國ニ輸入ス

ルコトニ同意スベシ。

二、本條約ニ掲ゲラレタル若クハ掲ゲラレザル物品ニ付キ或ル他ノ外國ト條約ヲ締結スル場合ニ於テハ佛國ハ右外國ニ對スルト同様ノ待遇ヲ受クベシ。

三、税目ニ掲ゲラレタル總テノ物品ハ條約第六條ニ定メラレタル税ヲ納メ、及ビ同様ノ約束ニ從ヘバ我國ニ輸入スルコトヲ許サルベシ。

(參照) 條約第六條締約兩國ハ或ル貨物ニ賦課スベキ租税ヲ定メ、而シテ兩國間ノ貿易ノ行ハルベキ基礎ヲ立ツルヲ適當ト思惟スルニ由リ左ノ税目ヲ同意決定ス。

一、佛國ヨリ直接ニ英國ニ輸入シタル佛産ノ葡萄酒ハ、葡萄牙ノ葡萄酒ニ今日賦課セラル、ヨリ高キ租税ヲ賦課スルコトナシ、佛國ヨリ直接ニ愛爾蘭ニ輸入シタル佛産ノ葡萄酒ハ、今日賦課セラル、ヨリ高キ租税ヲ賦課セラル、コト、ナシ。

二、佛産ノ酢ハ英國ニ於テ一噸ニ付キ六十四「ポンド」五「シリング」三「ペンスト」二分ノ十二ノ租税ヲ今日賦課セラル、ト雖ドモ、爾後一噸ニ付キ三十二「ポンド」十八「シリング」十「ペンスト」二分ノ十六ヨリ高キ租税ヲ賦課セラル、コトナシ。

三、佛産ノ「ブランドイ」ハ今日英國ニ於テ一「ガルロン」ニ付キ九「シリング」六「ペンスト」二分ノ十二ノ租税ヲ賦課セラルト雖ドモ、後來七「シリング」ノ租税ヲ賦課

セラルベシ。

四、佛國ヨリ直接ニ來ル橄欖油ハ後來最惠國ヨリ來ル同品ニ賦課セラル、ヨリ高キ租稅ヲ賦課セラル、コトナシ。

五、麥酒ハ相互ニ從價稅三割ヲ賦課セラルベシ。

六、鐵器又物其他鐵鋼、銅直鋸ヲ以テ作りタル細工物ハ輕重ヲ問ハズ從價稅一割ヨリ高キ租稅ヲ賦課セラル、コトナシ。

七、歐羅巴中ニアル兩國ノ所屬地ニ於テ製造セラレタル綿布及毛織物ハ兩國ニ於テ從價一割ニ歩ノ輸入稅ヲ賦課セラルベシ。但シ絹糸ヲ入レタル綿布毛布ハ双方共禁制品ト爲スハ從前ノ如シ。

八、寒冷紗ノ類ハ兩國ニ於テ七「ヤード」四分ノ三毎ニ五「シルリング」ノ輸入稅ヲ賦課セラルベシ、麻又ハ亞麻ヲ以テ製造シタル「リネン」ニシテ歐羅巴中ニ在ル兩國ノ所屬地ニ於テ製造セラレタルモノハ兩國ニ於テ今日和蘭又ハフランドルニ於テ製造セラレ英國ニ輸入セラル、「リネン」ニ賦課セラル、ヨリ高キ輸入稅ヲ賦課セラル、コトナシ。

愛爾蘭又ハ佛國ニ於テ亞麻ヲ以テ製造セラレタル「リネン」ハ今日和蘭ニ於テ製造セラレ愛爾蘭ニ輸入セラルル「リネン」ニ賦課セラル、ヨリ高キ輸入稅ヲ相互ニ賦課セラルコト

ナシ。

九、馬具ハ相互ニ從價一割五分ノ輸入稅ヲ賦課セラルベシ。

十、紗ハ相互ニ從價一割ノ輸入稅ヲ賦課セラルベシ。

十一、「モスリン」其他本稅目ニ依リ許サレタル物品ヲ以テ製造セラレタル婦女粧飾品ハ相互ニ從價一割ニ歩ノ輸入稅ヲ賦課セラルベシ。若シ婦女粧飾品中本稅目ニ載セザル品物ヲ用キタルモノアルモ最惠國ノ同物品ニ賦課セラル、ヨリ高キ租稅ヲ賦課セラル、コトナシ。

十二、磁器、陶器類ハ相互ニ從價一割ニ歩ノ輸入稅ヲ賦課セラルベシ。

十三、硝子板及ビ凡テノ硝子器ハ双方ニ於テ從價一割ニ歩ノ輸入稅ヲ賦課セラルベシ。

第十一條 此ノ條約者ノ一方ニ於テ他ノ一方ノ生産物製造物ノ輸入ヲ禁ジ、又ハ其輸入稅ヲ增加セントスル場合ニ於テハ其禁止若クハ増加ハ一般ニ及ボシ、他ノ最惠國ノ生産物製造物ニ對シテモ同様禁止又ハ増稅ヲ行フベシ。又他國ノ爲メニ生産物製造物ノ輸出入ノ禁ヲ解キ又ハ其輸出入稅ヲ減ジタル場合ニ於テハ其解禁又ハ減稅ハ他ノ一方ノ臣民ニ對シテモ之レヲ及ボスベシ。

「フオックス」氏ハ「ピット」氏ノ此動議ニ對シ條約ノ結果必ラズ大ニ英國ノ歲入ヲ減ズベク

且佛國ハ從來英國ノ敵ニシテ此條約ヲ締結スルハ實ニ英國ノ手足ヲ束縛セント欲スルニ出ヅルモノトシテ之レヲ駁撃シ、深ク條約ノ結果ヲ講究シタル後ニ非レバ遽ニ本動議ヲ決スベカラザルコトヲ論ゼシト雖ドモ、其動議ハ否決シ、「ピット」氏ノ動議ヲ可決セリ。爾後數回本院委員會ヲ開キ條約ノ主旨ヲ賛成スル決議案數十項ヲ決議セリ。而シテ「ピット」氏黨中ノ一人ナル「ブラツボルン」氏ハ右ノ決議終ルヲ待テ左ノ上奏案ヲ提出シテ議決ヲ求メタリ。

臣等 陛下ト佛國皇帝トノ間ニ締結セラレタル航海及ビ通商條約ニ定メラレタル事項ヲ尤モ慎重ニ審議セリ。陛下ガ條約ヲ締結セラレタルハ陛下ガ常ニ陛下ノ臣民ノ安寧幸福ヲ軫慮セラレテ渝ラザラルコトヲ新ニ證スルモノニシテ、臣等ノ誠ニ感謝ニ堪ヘザル所ナリ。故ニ臣等ハ兩國間ノ好誼ヲ益厚クシ平和ノ幸福ヲ益永クスル此條約ニ對シ、其ノ實行ニ必要ナル法案ヲ立テ及之レヲ議定セルニ敢テ稽緩ナルコトナカルベシ。臣等誠ニ信ズ、我國一般ノ利益ヲ進メ陛下ノ光榮ヲ賛スルハ他ナシ、唯貿易ヲ擴張シ百工ヲ獎勵シ國ノ富源ヲ開發シ及ビ陛下ノ版圖ノ繁榮幸福ノ爲メニ至確至固ナル基礎ヲ立ツル此條約ニ賛同スルニ在ルコトヲ。

此動議出ヅルヤ「フオックス」氏ハ又之ニ反對シテ云ク、此ノ動議ハ尤モ驚クベク尤モ危險ニシテ尤モ憲法ニ悖レリ。蓋シ本院ハ條約ノ主旨ニ反對ヲ表セズト雖ドモ、未ダ其實行ニ必要

ナル法案ヲ議定セズ、然ルニ今遽ニ此ノ如キ上奏ヲ爲ストキハ本院ハ本件ニ付キ立法ノ自由ヲ失ヒ、後日法案ヲ議スルニ及デ充分討論ヲ盡スヲ得ズ、我輩ノ祖先ガ辛苦注意シ法案ノ精論熟議ヲ經ズシテ急速議了スルノ弊ヲ防グ所以ノモノ悉ク水泡ニ歸センノミ。夫レ貿易ニ關スル事項ハ第一ニ全院委員會ニ於テ之レヲ審議シ、其決議ヲ議院ニ報告シ、議院之レヲ可決スルトキハ則其決議ニ從フテ法案ヲ起草シテ提出セシメ、三讀會ノ順序ヲ經過シテ而シテ始メテ之レヲ確定スルハ本院ノ慣例ナリ。然ルニ今未ダ此等ノ順序ヲ經ズ、而シテ已ニ此ノ如キ上奏ヲ爲サントス。是レ本院ノ手ヲ縛シ如何ナル法案ノ提出セラル、コトアルモ強イテ本院ヲシテ之レヲ賛成セシメント欲スル者ニシテ、實ニ豫メ後日ノ討論審議ヲ禁ズルナリト。「ピット」氏之レニ答ヘテ曰ク、此奏案ヲ攻撃スルモノハ本院ヲシテ審議討論ノ職ヲ失ハシムト云フト雖トモ、今コノ場合ニハ實ニ勢ナキノ攻撃ナリ。蓋シ本院ガ本件ニ對シ審議討論スル區域ハ甚ダ廣カラズ唯本條約ヲ施行スルヲ可トスルヤ否ヤヲ決スルニ止マリ、其細目ニ涉リ變更修正スルノ目的ヲ以テ討議スルコトヲ得ザルナリ。即チ本院ノ審議ヲ要スルノ點ハ條約全部ガ國會ノ承諾ヲ受クベキ價值アルヤ否ヤニ在リ。故ニ此條約ヲ以テ國ノ爲メニ害アリト爲ス者ハ本案ニ反對ノ表決ヲ爲シテ可ナリ。又未ダ條約ノ得失ヲ察知スルコト能ハザル者ハ本案ノ延期ヲ求ムルモ可ナリ。然レドモ已ニ本條約ノ直ニ國ノ爲メニ喜ブベキヲ察知シテ疑ハザル諸君ハ、今本案ヲ可決スル

ニ必ラズ躊躇スルコトナカルベシト。而シテ決ヲ取ルニ及ンデ上奏案可決ヲ得タリ。乃チ之レヲ上院ニ送付シ上院之レニ同意セシニ由リ、兩院合同シテ之レヲ國王ニ奉呈シ國王ハ左ノ勅答ヲ賜ヘリ。

貴族及諸員

貴卿等ノ精忠至誠ナル上奏ヲ呈セシヲ謝ス。朕ハ卿等ガ朕ト佛國王ト締結セル航海及通商條約ニ付キ審議ヲ盡シ、以テ卿等ノ意思ヲ表白スルヲ見テ眞ニ満足ニ堪ヘズ。而シテ卿等ハ此ノ條約ヲ實行スルニ必要ナル法案ヲ立テ、敢テ稽緩スルコトナク之レヲ議了センコトヲ保證ス。是レ朕ガ尤モ喜ンデ嘉約スル所ナリ。

此後「ピット」氏ハ關稅改正整理法案ヲ提出シ、國會ハ此レヲ可決シ、而シテ英佛ノ條約始メテ實行スルヲ得ルニ至レリ（以上英國々會史ニ據ル）其後有名ナル「コブデン」氏ガ佛國三世ナポレオント結ベル條約ハ、千八百六十年一月二十三日双方委員調印シ、千八百六十年二月四日巴里ニ於テ批准ヲ交換セリ。而シテ英國政府ハ國會ヲ開キ未ダ其批准シタル條約ヲ國會ニ提出セズシテ豫算ヲ提出シ、當時出納大臣グラットストン氏ハ全院委員會ニ於テ歲出入ノ景況及ビ租稅ノ廢止改更スベキモノヲ説明シ、而シテ審議ノ順序ヲ動議シテ曰ク、其事件ハ今夜其ノ議ヲ決シ、其次ニ關稅中佛國ト條約ニ係ルモノヲ議シ、就中第一ニ葡萄酒輸入稅ヲ議スベシ。

此等ノ事項ハ我商業及ビ歲入ニ重大ナル關係アルヲ以テ成ルベク速カニ議センコトヲ望ムト。（グラットストン氏財政演說）而シテ關稅ノ事ヲ議セントスル日ニ至リ、反對黨ノ首領「ヂスレリイ」氏ハ動議ヲ提出シテ曰ク、關稅ニ付キ決議ヲ爲スタメ全院委員會ヲ開クハ政府ガ條約ヲ審議シ之レニ承諾スルノ機會ヲ本院ニ與ヘタル後ニスベシト、而シテ其動議ヲ提出スル所以ノ主意ヲ辯ジテ云ク

政府ガ條約ヲ本院ニ提出セザルハ本院ガ尤モ注心スル財政上ノ權利ヲ減殺スルノ處置ナリ。曩時宰相「ピット」氏ハ千七百八十六年九月佛國ト通商條約ヲ締結シ、而シテ千七百八十七年一月ノ末ニ至リ國會ヲ開キ、二月二日ニ其ノ條約ヲ提出シ、十二日ニ於テ之レガ審議ヲ開カン事ヲ告ゲタリ。然ルニ「フォックス」氏ハ其日限ノ短キヲ不可トシ、更ラニ猶豫ヲ要求スルノ議ヲ呈シ可決ヲ得ザリシトイヘドモ、之レニ依リテ總テ條約ハ本院ノ議ニ付スルヲ以テ適當トナスノ先例確立セリ。而シテ「ピット」氏ハ其ノ條約ニ關スル決議案數十項ヲ提出シ、議決ヲ得、其主旨ヲ上奏案中ニ包含セシメ、以テ上院ニ送付シ、上院其決議ノ主意ヲ審議シタル後兩院合同シテ上奏書ヲ陛下ニ呈セリ。其後決議ノ旨趣ニ依リ關稅改正整理法案ヲ提出シ、以テ其旨趣ヲ實行スルノ方策ヲ採レリ。或ヒハ云ク、今日ノ改正ハ綱目繁多ニシテ一新面目ヲ開クモノナリ。故ニ舊例ヲ引援スル

コトヲ用キズ、直チニ其審議ヲ開クベシト、然レドモ「ピット」氏ノ施行セントシ所、其綱目ノ繁多ナル今日ノ法案ニ譲ラズ、氏ガ其政策ヲ施行センガ爲メニ三十箇ヨリ少カラザル決議ヲ要セシヲ見テ之レヲ知ルベシ。然ルニ氏ハ猶其政策ト條約トヲ混淆セズ、先ヅ條約ヲ提出シテ本院ニ審議スルノ機會ヲ與ヘ、大體ニ關スル決議案數十項ヲ提出シテ議決ヲ求メ、本院之レヲ決議シタル後始メテ關稅法案ヲ提出シ、前ニ決議シタル條項ヲ參照セシメ、以テ財政方略ヲ議定セシメタリ。然ルニ今本院ハ何ガ故ニ千七百八十年ノ本院ノ異ナル順序ヲ採ラントスルヤ、何ガ故ニ先ヅ條約ヲ議シ次ニ財政上ノ改正案ヲ議シ、而シテ後豫算ニ及バザルヤ。

是ノ如クニシテ始メテ此重大ニシテ且繁密ナル方策ヲ屢々討議シ、屢々批評スルヲ得ルノ機會ヲ得ベキナリ。

「デスレリイ」氏ノ此論頗ル痛切ナリシトイヘドモ、其動議否決シテ行ハレズ、爾後續テ豫算會議ヲ開キシニ、「デスレリイ」氏ハ每議攻撃ヲ加ヘ、其條約ニ關スル條項ニ對シテハ尤モ之レヲ痛論セリ。茲ニ於テ首相「バルメルストン」氏ハ英佛條約ヲ議院ニ提示スベキコトヲ約シ、而シテ其提出アルヤ、「デスレリイ」氏ハ細ニ批評ヲ加ヘ、其條項ノ不備ニシテ大イニ英國ノ利益ニ害アルコトヲ論ジ、決ヲ採ルニ及ンデ「デスレリイ」氏ニ反對スル者二百二十六ノ多數ヲ得

氏ノ議採用セラレザリキ（以上ビーコンスフイールト侯公務傳ニ依ル）英國々會ニ於テ通商條約ヲ議スルノ例右ノ如シ、而シテ其要點ヲ摘示スレバ左ノ如クナルベシ。

一、國王ハ條約批准ノ後、大臣ニ命ジテ其謄本ヲ議院ニ提示セシム、然レドモ議案トシテ提出スルニアラズ又未ダ條約ヲ提示セズト雖ドモ大臣ハ國會ニ於テ條約ノ主意ヲ實行スルノ決議ヲ求ムルヲ得ルコト千八百六十年ノ例ニ於ケルガ如シ。

二、國會ニ於テハ條約ニ關シ決議案ヲ提出シ以テ間接ニ條約ノ主旨ヲ討論シ、攻撃ヲ加フルコトヲ得ト雖ドモ、直接ニ條約其物ニ對シテ論議セズ。唯該決議案ヲ以テ條約全部ニ付キ其ノ否ヲ定ムルノミ。

千八百六十年ノ條約ニ付テハ「グラットストン」氏ハ此決議案ヲ別個獨立セルモノトシテ提出セズシテ「ピット」氏ノ例ニ從ハザリシトイヘドモ、豫算ニ關シ財政演說ヲ爲シ、條約ノ主意ヲ辯明シ、而シテ條約ヲ賛成スル決議案ヲ豫算ニ關スル決議案ト混ジテ提出セリ。然レドモ是唯時宜ニ從ヒ其手續ヲ殊ニスルノミ、其實行ハ千八百六十年ト千七百八十七年ト其例同一ナリ。

三、國會ハ條約ノ主旨ヲ可決シ決議ヲ以テ其意思ヲ表スルノミニシテ條約書ヲ議案トシテ議スルニ非ズ、故ニ條約ノ條項ニ對シ修正ヲ加フルコトヲ得ズ。